悪童達と先生

溝上雄文 著

著者自画像

悪童達と先生

溝上雄文 著

舞台となったバス停留所

子供たちの泳ぎ場となった川

「悪童たちと先生」の舞台となった小学校の跡。今は廃校となって、公園となっている。
校舎も取り壊された校庭の隅には体操の用具入れの小屋だけが取り残されている。

著者の生まれ育った水俣の実家

山の神様

この物語を、故郷を離れた憶しい友と、
美しかった古里の山・川に捧げる

— 悪童達と先生／目次 —

序　章 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第１章　三年生　春 ・・・・・・・・・・・ 13
第２章　三年生　夏 ・・・・・・・・・・・ 26
第３章　三年生　秋 ・・・・・・・・・・・ 83
第４章　四年生　春 ・・・・・・・・・・・ 108
第５章　四年生　夏 ・・・・・・・・・・・ 145
第６章　四年生　秋 ・・・・・・・・・・・ 181
第７章　四年生　冬 ・・・・・・・・・・・ 222
終　章 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 233

序　章

古市小学校の南側を取り囲む、古い城郭のような石垣の上に並んだソメイヨシノの大木から、薄桃色の花弁が強い風に吹かれてフゥアーと舞い上がっていく。

石垣の上の、狭くて東西に長く延びた校庭の北側は、五十年前の校舎建築時に山肌を削り取ったままのデコボコ斜面だが、年代を経て黒ずんできた岩肌が、所々でむき出しになっている。斜面に張り付くように生えた枯れ草の中からは、もう青々とした新芽が、生命を溢れさせ始めている。

校庭から山頂に向かって、急激に駆け昇る山肌には至るところにヤマザクラが生え、カシやシイ、クヌギ、ヤブツバキなどの濃緑の樹海を、其処だけが薄雪を冠ったかのように、鮮やかに景色の彩りを生み出している。

ヤマザクラの大木に咲いた青白い花びらは、山頂から吹き降ろす風に乗り、まるで牡丹雪が風に舞うように、ヒラヒラと斜面を流れ降りてゆく。校舎と校庭の上空で、ソメイヨシノの薄桃色の花びらと、ヤマザクラの青白い花びらが戯れるように交じり合っている。やがて、何処までも澄み切った青空に、吸い込まれるように舞い上がりながら、

風の止む間に音もなく校舎の屋根や校庭に降り注いで、何処もかしこも花弁で埋め尽くしていく。

校舎や校庭に、幾重にも降り積もった花弁から、瑞々しい桜の香りが匂い立ってくるようだ。

九州の南部にあっても標高が高く、九州山脈の背骨から、不知火海（しらぬいかい）に向かって分かれる山稜の脇に、しっかりと張り付いたような小さな村が物語の舞台である。

ここでは、毎年入学式の頃に桜が満開となり、一年中で最も華やかな、生命の沸き立つ季節を迎える。

「これから、新任の先生を紹介します」

校長がにこにこしながら、四十歳過ぎのおとなしそうな眼鏡の教師を壇上に招き上げた。今年の新任の先生は一人だけで、春雄たち四年生の担任と決まっていた。

「こんにちは、三角です。今まで八台市の学校で教えていましたが、今度初めて県南を希望し、此処、湯の上町の古市小学校に来ました。今年は四年生を受け持ちます。皆さんと一緒に、勉強に遊びに頑張りましょう――」

新任教師としては型通りの挨拶が終わった。いかにも、大きな都市である八台市で教壇に立っていたらしく、そつのない挨拶である。

この学校はのんびりしたもんだと、窓の外に広がる山間

の美しい風景に見とれて、田舎暮らしを楽しむような安心しきっている顔つきである。

だが、父兄たちにはそれが四年生の教室に入るまでの、束の間の安らぎと知っているから、同情と哀れみの入り混じった複雑な目で見ている。

他の学年の担当教師たちは、緊張感の乏しい新任教師と四年生の並ぶ一帯を交互に心配そうに眺め、ついでに同僚達の顔を見回した。ここでは一学年、一学級だが、四年生は誰もが受け持ちたくなかった。だから、校長が新任に割り振ったときには、胸を撫で下ろした教師ばかりである。

しかし、県下でも大きな八台市の小学校で、バリバリ教えていた教師が、なぜこんな山奥の小学校に赴任してきたのか——校長に探りを入れた者もいたが、結局判らずじまいであった。

「大きな町から、偉か先生が来なったぞ。みんなしっかり勉強ばせにゃいかんバイ」

緊張した声で周りを見回し命令を下したのは、チョウジこと、古谷長次である。このチョウジこそが、四年生の父兄だけでなく村中の親たちを混乱の渦に巻き込み、その名を《悪童学級》と呼ばれて、今後の行く先が心配される子供たちのボスである。

この物語は、この一年前の三年生から四年生までを精一杯遊び学んだ、子供達と先生の格闘と愛情を記録したものである。

第一章　三年生　春

このクラスが、《悪童学級》と呼ばれ始めたのは、三年生になってすぐのことである。

昭和も三十年代に入り、もう戦後の面影は次第に薄れ始め、高度経済成長の名の下に日本中が浮かれ始めていた。湯の上町のような九州の片田舎にもその波は及び始め、古市でも分限者と呼ばれる何軒かの裕福な家庭では既にテレビを購入していた。

殊にこの年、皇太子ご成婚の様子をテレビで中継すると分かってからは、無理してもテレビを購入する家が増え、その当日はテレビのない家の子供たちや大人が寄り集まり、まるで黒山のような人だかりで、遠く離れた東京の荘厳な式典を不思議な思いで眺めていた。

だが、日が経つにつれ、最初は物珍しさでテレビに夢中になって見ていた子供たちも、ラジオや映画とは何かが違う、正体不明の不気味さを感じ、次第に離れて野山に帰っていった。

夏休前の梅雨空が残る鬱陶しいある日の出来事である。

三年生のクラスでは、担任の宮内先生が算数の授業を始めていた。本来なら掛け算がとっくに出来なければならない年頃に、まだ半分の子供達は足し算がやっとの状態なので、先生も必死に教えている。

宮内先生は〈ケイコ先生〉の呼び名で、子供たち、特に女の子たちに親しまれていた。今年で二十六歳の大柄な体を、いつも流行の洋服で包み、きびきびと学校中を動き回っている。古市小学校では今年から教えていた。

決して子供達をエコ贔屓（ひいき）などしない、誰にも優しくて明るい性格の先生だし、体育の時間には男の子たちと相撲を取って遊ぶ茶目っけもある。二週間前に、ケイコ先生と他の六月生まれの子供たちの〈誕生お祝い会〉をしたばかりである。

山上春雄もケイコ先生が大好きで、悪さをした子を叱る時の、大きくて悲しそうな眼をみる度に、（自分は先生を悲しませるようなことは絶対にしない）といつも心に誓っていた。

「チョウジ君、静かにしなさい！」

先生の厳しい声に室内がしーんと静まり返った。

チョウジは周りの四, 五人の仲間と小型ナイフの、〈肥後の守〉を見せ合って騒いでいたのだが、一人だけ名指しで叱られてむっとした顔をする。勉強が嫌いで、あまり成績

もよくないチョウジは、算数が大の苦手なのだ。

「先生、話しばしとったのは、俺(おい)ばかりじゃなかたい」

「人んことはよかけん、こっちに来んさい」

ケイコ先は怒るときには土地の言葉になる。元々が隣町の生まれで、いまも実家から小さなバイクを運転し、颯爽(さっそう)と県道を駆け登ってくる。

「うん・・・」チョウジは、渋々教壇の前に出た。

「算数はこれから大人になると、一番大事になるとよ。三年生で掛け算も出来んと笑われるっとよ」

教室に低い笑い声が起こった。チョウジは一番弱いところを衝かれ、又、みんなにも馬鹿にされた気がしていた。

「出来ん者な、他にも居るもん！」と、悔しい声で言い返す。

「言うことば聞かんね！」

先生はつい、持っていた黒板指し用の細竹でチョウジの頭をピシッと打った。

「何ばすっとね！」

チョウジは自分の席に戻り、先ほど周りに見せびらかしていた新しいナイフ〈肥後の守〉を振り回し始めた。肥後の守の端には落としても失くさないようにと、太い紐が括り付けてある。周りの子供はワッと机の下に隠れた。先生も突然のことに、立ちすくんだままで声も出せない。

「どげんな、怖(こわ)かろが！　怖(こわ)かろが！」

チョウジは調子に乗って、机の列の狭い空間を縫い、教

室中を走り始めた。手に持った肥後の守がブーン、ブーンと唸(うな)っている。

彼がこのクラスで、子供たちの大将に就任した記念すべき瞬間である。

「うわーん、わーん！」

呆然としていたケイコ先生が、突然大声で泣き始めた。教師という立場も、プライドもかなぐり捨て、怒りと悲しみの感情がほとばしっていた。

今度はチョウジが呆然としている。ナイフを持った手を上げたまま、じっと固まっている。

「先生ば泣かした。ケイコ先生が泣いとるがね！」

「チョウジ君が悪かと。先生は悪うなか」「先生、もう泣かんと」

女の子を中心に、机から這い出した子供たちが、一斉にチョウジを糾弾(きゅうだん)し始めた。当の本人は自分がしでかした事の大きさに驚き、じっと下を向いたまま黙っている。

「チョウジ君、先生に謝んしゃい！」

女の子のリーダー格の登美ちゃんこと、田本登美子が怒りに任せてチョウジに迫るが、手にあるナイフを見てドキッとして後退する。

そのときケイコ先生は、堪りかねたように教室から走り去った。教室は騒然としたままチョウジの周りに人垣が出来た。

「おいは、馬鹿にされたもんやから、腹立てただけたい･･･」

チョウジはしょんぼりと自分の机に座った。とんでもないことを為出(しで)かした思いと、どうしていいか分からずに途方に暮れた顔である。

「春雄君は学級委員だけん、職員室ば見てこんね」と、大柄できりっとした顔の登美子が春雄に命令する。

「うん、見に行ってくるばってん。登美ちゃんも一緒に行こうや」

春雄は、一学期の学級委員だったことを忘れていた。古市小学校では、民主主義教育の一環として、学期ごとに学級委員の正副が選挙で決まる。三年生の一学期の学級委員は、正が春雄、副に登美子が選ばれていた。学級委員といっても、先生が授業を始める前と終わりに起立、礼の号令を掛ける他は、昼食時に薄いスープみたいな牛乳を配る給食当番の手伝いくらいである。たまに先生が授業や父兄連絡用のガリ版を刷るときに、先生を手伝ったり、冬には職員室のストーブに石炭を運ぶこともあるが、あまり民主主義とは関係がないみたいだ。

登美ちゃんと二人で職員室を覗いてみると、ケイコ先生は校長先生の机の前でうな垂れている。他の先生たちは、まだ授業中なので誰もいない。

「春雄君、どうするね。なんか入りにくかなあ」

「うん、また後から来たほうがよかみたいやね」

春雄は、もう逃げ腰になっている。大体いつも大人しくのんびり屋で、勉強もあまり出来ない自分が、何で学級委員に選ばれたのか分からない。子供たちの選挙でも、時々おかしなことが起こる。大人の選挙でも、こんな変なことがあるのだろうか。

しかし、登美ちゃんと一緒に学級委員ができることは、春雄にとっても嬉しいことでもある。本当のところ春雄は、登美ちゃんが好きなのである。授業中もひそかに斜め前にある、登美子の席をぼんやり眺めていたりする。

体育の授業で一緒に用具室から道具を取り出す時に、体育着の登美子を間近に見たりすると、何故かドキドキしたりする。ケイコ先生に憧れるのとは違う、何か変な気分になるのである。だが、これが初恋だということも、まだ理解出来ていない。本当にのんきな性格なのだ。

でも、体も大きく頭も良くて、いつも威張って命令ばかりしてくる登美子に、このごろ閉口しているのも事実である。

その登美子も、今日の成り行きに不安になっているらしく、いつもの元気がない。

「でも教室の皆が先生のこと待っとるけん、もう少し此処にいて様子ば見ても良かやなか」

「うん・・・」と、春雄は肯く。

こういう時には、春雄はまったく逆らえない。仕方なくドアのガラス越しに室内を覗いてみた。

「うちにも見せてくれんと」登美子が隣に並んだ。

蜜柑の花みたいな香りが微かに漂ってきた。また、心臓がドキドキし始めた。

二人で仲よく並んで暫く覗いていると、校長先生が何かしきりに慰めている。ケイコ先生は後ろ向きで顔は見えないが、なんとなく泣いているように見えた。

「先生、泣いとるんやなか」と、登美子が聞いてくる。

「うん、なんか泣いとるバイ。校長先生に叱られたんやろか」

「校長先生は怒っとらんけん、よかごつ面倒見なすったい。・・・春ちゃん教室に帰ろ。でもケイコ先生が泣いとったこと、みんなに言わんごとね」

結局、昼休みまでケイコ先生は戻らなかった。昼食の間も皆黙って弁当を食べている。チョウジは、昼休み前から何処かに行ってしまった。

午後は国語から始まる予定だったが、教室に入ってきたのは意外にも田中校長だった。

「えー、宮内先生は、体の具合が悪くなったので昼から休みます。午後は私が授業をします」

校長先生はいつものようにニコニコしながら教科書を読

み始めた。古市小学校では、校長のほか、六人の学年担当しか居ないため、病気などで休んだ先生の代わりに、校長が自ら授業をすることはよくあるのだ。校長先生の授業は午後の二時限いっぱい続き、みんな神妙に教科書と睨めっこしていた。だが、チョウジはついに帰ってこなかった。

授業が終わり、子供達はめいめいにランドセルや風呂敷に教科書をしまって、帰り支度をしていた。

「春雄君、もう一度職員室に寄って見ようか」と、登美子が誘ってきた。

「うん、ケイコ先生どうしたんやろか」

二人が職員室のドアから覗くと、ケイコ先生の席は誰もいなくて、奥の方で田中校長先生が何か書類を読んでいた。ちょうど目を上げた校長先生が、二人を見つけてにこっと笑い、春雄たちに声を掛けてきた。

「二人とも、入ってきなさい」と、手招きをする。

二人はいつも慣れている職員室なのに、緊張した顔で入っていった。

「宮内先生は古谷君の家に行っているよ。さっき古谷君のお母さんが来たので一緒に出掛けたから。心配しなくてよいからもう帰りなさい」

「チョウジ君が居らんとです」と、登美子が尋ねる。

「ああ、古谷君は昼休みに家に帰ったんだ。それで、今日

のことをお母さんに話したから、さっき学校に来てくれたんだよ。よく話しておいたから、君たちはもう心配しなくてもよいよ」

先ほど職員室を覗いたときには、チョウジの母は居なかったから、その後に駆けつけたらしい。チョウジの家は、学校から歩いて二十分も掛からない距離にある。チョウジはどうしていいか分からず、昼食も食べないで家に駆け戻り、母親に報告したらしい。母親もさぞびっくりしたことだろう。何しろ、三年生の子供がナイフを振り回し、先生を泣かしてしまったのだから。

校門まで黙って歩いていた登美子が、思い切ったように声を掛けてきた。

「春ちゃん、チョウジ君の家に寄って行こうか」

登美子の相談は、実際は命令である。登美子の家は、学校のすぐ近くだからよいが、春雄の家はチョウジの家とは反対側の、南に三十分も歩く高橋集落にあるのであまり行きたくはない。

しかしチョウジのことが、何となく心配でもある。二人は学校から北の方、国見山に向かう少しきつい勾配の県道を、トボトボと登り始めた。

チョウジの家は県道の傍らの斜面に、石垣を積み上げて作られている。道路の下から覗いても家の中が見えない。

二人は何となく入りそびれて、少し離れた道路の角に佇んでいた。

「春ちゃん、覗いて来んね。チョウジ君、友達じゃなかとね」

「そんなこというても・・・・友達ばってん、少しだけたい」と、春雄は行きたくないので訳の分からない言い訳をする。

「じや、二人で入ろうか」と、登美子も折れる。

二人がチョウジの家の入り口まで来たとき、突然石段の上にケイコ先生が現れた。後ろからチョウジの母親が付いてきており、頻(しき)りに謝っている。その後でチョウジが項垂(うなだ)れている。

「お母さん、大丈夫ですから。ナイフは鉛筆を削るのにみんな持っているものですし、私もいきなり叩いたのが悪いのですから」

「そんなこた、なかとです。チョウジが悪かとですたい。父ちゃんが居ったら喰らわすとばってん、いま出稼ぎで居ないもんですけん・・・済ましぇん」

「チョウジ君を、あまり怒らないで下さい。明日は元気で学校に来てくれれば良いですから。お忙しいところお邪魔しました」

ケイコ先生は後ろ向きに挨拶しているから、下の二人には気付いていない。石段を降りかけて、ふと春雄たちに気付き、恥ずかしいような、嬉しいような妙な笑顔を浮かべた。

「二人揃って仲が良かね。デートなんね、それとも先生ば

迎えに来たんね」

「デートじゃなかと。先生が心配だけん来たとよ」

登美子が少し怒った声で答える。春雄は〈デート〉が何のことだか分からない。でも逆らうことができないので、ただ黙って肯(うなず)いている。

「ありがとうね、嬉しかたい。学校まで一緒に帰ろうね。お礼に、途中でアイスキャンデー買ってあげるバイ」

先生は上機嫌である。チョウジの母親との話し合いが、上手くいったのだろう。

春雄は後ろから付いて歩きながら、小声で登美子に囁いた。

「いま泣いたカラスが、もう笑ろうたバイ」

いきなり、登美子の長い足が脛に飛んできた。（あいたた・・・・）と座り込んだ春雄を無視して、登美子は先生に飛びつき手を握っている。

チョウジの家のある、松野集落の端の駄菓子屋で、約束のアイスキャンデーを買って貰い、学校までの下り坂を三人は元気に歩き始めた。

梅雨のどんよりした曇り空から、少し青空が見えてきた。濃い緑色に伸び始めた稲の穂を、湿った暑苦しい梅雨の風が、ザワザワと掻き分けて行く。先生と登美子は夏の歌を二人で唄いながら楽しそうである。春雄はお供のように後ろから歩きながら、やっぱりケイコ先生は好い人だと呟き、

前よりもっと好きになっていた。

学校の前まで来ると、先生は職員室に寄ってから帰るという。

「先生。何処にも行かんでね・・・・ずっとうちらと一緒に居ってね。――そうだ、夏休に入ったら学校の下の泳ぎ場で泳ごうね、先生、約束たい！」

登美子が努めて明るくしゃべっている。だが、眼には涙が光っていた。

「うん、何処にも行かんよ。夏休もみんなと一緒たい。明日からまた頑張ろうね」

ケイコ先生は、自分自身に言い聞かせるように二人に答えた。登美子は安心したようにいつもの笑顔が戻っている。

「先生、また明日ね。そんなら春ちゃん、帰ろうたい」

二人は笑い合いながら帰っていった。ケイコ先生は二人の後姿を、ずっと複雑な顔で見送っていた。

明くる日はチョウジも学校に出て来たし、ケイコ先生もいつも通りに授業を進めた。チョウジはいつものように周りのみんなと騒いでいるが、顔が少し腫れている。夕べは、きっと母親に大分ぶたれたのだろう。

この地域では農業が主体であるが、それだけでは生活が苦しく、田植えの後などの農閑期には、父親たちが出稼ぎ

に出かけることが多い。その間は母親が父親の代わりを勤めるし、一家の中心になって頑張るのである。

ケイコ先生もそこらの事情を理解し、ナイフの一件には触れなかったのだろう。

もう少しで子供たちが大好きな夏休みである。

第二章　三年生　夏

やがて夏休に入り、子供たちは奔放に遊び暮らし、夏休の宿題など何処吹く風である。日記や工作の宿題など最後の一週間で出来るし、最初から全くやる積もりのない横着な子もいる。

だが、実際は農作業など家の手伝いが、子供たちの重要な日課でもある。田んぼの草取りや、畑でのスイカ、ナス、キュウリなどの植え付けと水遣り。牛、馬、鶏などの世話が、子供たちの役目なのだ。暑い日差しの中では、これだけ働くと、くたくたになってしまう。

子供たちにとっては、これらの家業の手伝いこそが、学校の授業以上に大人になるための重要な人生経験になる。特に飼っている生き物は、一日面倒を見ないと死ぬことさえあるのだから、大変な責任を持たされている。

家の手伝いが終わったら、その後は、子供たちの待ちにまった自由時間だが、川での泳ぎ、魚取り、蝉取り、トンボ取りなどやることは山ほどある。だから宿題などの勉強は、とっくに忘れてしまっている。

七月末に最初の登校日があった。集まった子供たちは、体中がもう真っ黒であった。

「春雄君、どうして泳ぎ場に来んかった。先生と約束したやなかね」

春雄はいきなり登美子から叱られた。そうだ、チョウジの家から帰るときに約束したんだと、やっと思い出した。

「忘れていたバイ。今度来るけんよかやろ」

「ケイコ先生の今度の当番日は、来週の月曜日だけんね。良枝ちゃんや知子ちゃんも来るけん、春雄君は竹本さんば誘って来たらよかよ」

良枝と知子は、登美子の仲良しグループである。竹本夏子は二年下のまだ一年生だが、家が春雄の近所なので、小さい頃から何かあると春雄にくっ付いて来る。

「恵一君と健ちゃんも、連れてきてよかね」

「恵一君は良いけど、健二君おどっぱすやけん嫌たい」と、登美子が突き放す。

おどっぱすとは、この地方独特の言葉で、乱暴、意地悪の意味である。

恵一は去年の秋ころ、福岡のほうから両親の事情とかで、母親の親戚のある古市に移ってきた。頭がよくて背が高く、話し方も都会的なので、女の子に人気がある。登美子も憧れているみたいだ。春雄はライバルなのに、何も気付かず、のんきに誘う気でいる。

健二は普段おとなしいが、怒ると女の子でも叩いてしまう気の荒い子である。春雄は家が近いこともあるが、子供心にも曲がったことが嫌いな、男らしい健二が大好きでよく遊ぶ。登美子は前に一度、女の癖に出しゃばりだと言われ、殴られそうになったことがあり、大嫌いなのである。しかし、登美子を押さえ込むには、打って付けの友達でもある。

「そげんことはなかばい、よく言うとくけん、仲間に入れてくれんね」

春雄の粘りに登美子も渋々頷いた。

学校では校庭に並んだ全校生徒に、校長先生から夏休の注意があり、教室ではケイコ先生が、夏休の計画と宿題の話をして終わりだった。先生にサヨウナラを言うと、みんな、あっという間に教室を飛び出していった。

春雄はチョウジを捕まえ、来週の月曜日に学校の下にある泳ぎ場で遊ぼう——と持ちかけたが、母親と仕事の約束があると断られた。あの〈肥後の守事件〉以来、母親が毎日の生活に眼を光らせているらしい。

春雄が、真っ白な麦藁帽子をかぶった夏子を連れて、泳ぎ場にやっと着いたのは正午近くになっていた。夏子の家に寄り、準備が出来るまで、スイカやお菓子をご馳走になって、ゆっくりしていたからだ。

「春雄君、こっちたい、こっち！」

登美子が、泳ぎ場の水面から顔だけ出して手を振っている。ケイコ先生は、泳ぎ場の川上にある樹木のトンネルの下で、懸命に魚を探している。この泳ぎ場にはフナやコイの大きいのが生息し、夏休以外は釣り人の姿も多い。

〈泳ぎ場〉と呼ばれているのは、川に石積の堰を築いて水を貯め、下流の水田に用水路で配水する、小型の農業用ダムのことである。

川幅一杯に設けられた、石積み堰の長さは三十メートル近くあり、七十メートルほど上流に行くと水流は五メートルくらいの狭さになる。この範囲が子供たちの天然のプールとなっている。

元々は湯の上川の渓流を開削して、もう少し深く水を貯めていたのだが、長年のうちに土砂が溜まり、子供でも遊べるような浅さになったのだ。それでも流れがかなりあるので、泥は溜まらず、川底は石ころや砂が多い。

堰の天場近くの、一番深い所でも一メートルを少し超える位で、少し川上の場所は、夏子みたいな低学年の子供でも大丈夫な深さだ。

湯の上町の小学校には、まだ何処もプールが設置されていない。他の学校の子供も、川か海に泳ぎに行くのが当たり前の土地柄である。

「夏ちゃん、大岩の陰で早う着替えるバイ」

大岩とは天場から、湯の上川の右岸下流二十メートルほ

どの、県道側の川原にある。川原は岩だらけであるが、一段と大きくて高い岩が、でんと構えているのが大岩だ。泳ぎ場が出来る、ずっと昔からこの位置に座りつづけ、急流に晒されて来たため、岩の下のほうが削り取られているので子供たちが隠れるのに都合がよい。

最初に春雄が着替えるが、使い古しの短パンを細縄で縛っただけの手作り水着だから、すぐに済む。上着と弁当を入れたナップザックを、陽の当たらない岩陰に押し込み天場に戻る。

夏子には、着替え終わったら声を掛けるように言いつけてあり、ぼんやり泳ぎ場を向いて眺めている。天場の下流側は、二メートルほどの高さがあり、付近の岩を上手く使っても、小さい子供ではよじ登れないで、夏子を待っているのだ。

泳ぎ場の中ほどでは、恵一が知子や良枝たちにクロールを教えている。ここの子供たちはプールがないこともあり、きちんとした泳ぎの型は知らない。ほとんどの子は犬掻きみたいな、自己流の平泳ぎで泳ぐ。

クロールが出来る子でも、あまり息継ぎをしないで無闇に手足を動かしているだけだ。恵一はさすがに大都会の福岡で育っており、クロールも平泳ぎも、きれいな型で泳ぐ。

うっそうと茂る樹の葉の間を、キラキラと光が反射する

泳ぎ場の上流では、ケイコ先生が明るい緑色の水着を着けて、ガラス箱の水中眼鏡を使い懸命に魚を追っている。泳ぎ場に住む魚はコイやフナの大型種のほかにも、小型のアカハヤ、カワムツなどが泳ぎ回っている。砂地にはナマズ、ギバチが隠れていることもあり、石や岩場にはひょうきん者のヨシノボリが、目玉をきょろきょろさせながら張り付いている。

登美子は天場のすぐ上流にある、県道から続く急斜面が岩場に変わる川岸で、紺色の水着に真っ黒な体を包んで、一人で頻(しき)りに潜っている。時々水面に真っ黒な顔を出すが、まるで炭団(たどん)が浮いているようだ。

県道から続く斜面には、センダンやカエデ、ネムノキなどの落葉樹が薄緑の葉をつけて茂っており、川の傍にはサツキの群生が黄緑の葉を、これ見よがしにユラユラと光らせている。

樹木の枝に取り付いた、夥(おびただ)しい数のアブラゼミやミンミンゼミがジージージー、ミーンミーンミーンと鳴き続けている。喧(やかま)しい声が川中に響き渡り、天場を滑り落ちる水音もあまり聞こえない。

夏子が後ろから声を掛けてきた。振り返ると懸命に天場によじ登ろうとしている。

「夏ちゃん、危ないけん一人で上ったらいかんて、言うて

あるだろが！」

春雄は小言を言いながら、両手で夏子を天場に引き上げた。

「うん、分かっとるたい。だけど春ちゃんは、ボオーッとして上の空やけん、聞こえんかったやろ！」

「暑いけん仕方なか。早う水に入るばい、用意よかね」

「春ちゃん、泳ぐ前にはちゃんと体操せんばいかんとよ。夏休み前に校長先生が言うとらしたやろ」

夏子は天場に立ち、いーち、にーい、さーんと、珍妙な掛け声を出して手足を振り回し始めた。

夏子の水着は、白地に赤い花模様が可愛らしく入っている。夏子の家は裕福なので、今年も新しい水着を買って貰ったのだ。

天場に立った夏子の顔や手足は、もう真っ黒に日焼けをしており、白い水着が眩しいくらいよく似合う。春雄の汚い水着代わりの短パンとは大違いである。

春雄は勝手に腹から水に飛び込み、登美子のそばに泳いで行った。登美子の後ろから続いて潜って見ると、岩に張り付いているヨシノボリを懸命に眺めている。

ヨシノボリは五センチくらいの括(くび)れのないコロンとした体に、申し訳程度のヒレが付いている。体に似合わない大きな頭の先の口で、岩や石に付着している水苔を食べる。

小さな目玉で辺りをきょろきょろ眺め回す姿が、本当に滑稽である。

春雄がヨシノボリの顔の付近に手を伸ばすと、ひょいと岩の下に隠れてしまった。春雄は息が苦しくなってブワーッと水面に顔を出すと、登美子も同時に顔を出した。

「春ちゃん駄目ばい、ヨシノボリが驚いて逃げてしもうたやなかと！」

登美子は口を尖らして怒っている。大柄な登美子の体にぴったり張り付いた紺色の水着を見て、春雄は顔を赤らめる。

「よかたい、ヨシノボリは頭が良くないけん、すぐ元の所に帰るもん」と、照れ隠しに、怒った声で言い返す。

ヨシノボリは警戒心の薄い魚で、釣り糸にミミズなどを着けて投げ込むと幾らでも掛かる。春雄はウナギ釣りの餌にしたり、川原で火に焙って食べたりする。賢くはないが、実に有りがたい大切な魚である。

春雄と登美子は、また同じ場所に潜る。春雄の言ったとおり、もうヨシノボリは元の場所に戻り、大きな頭できょろきょろ見回している。

「本当やねえ頭が悪いのやろか、ちっとも反省しとらんね。どっか春ちゃんに似とるね」

登美子は余計なことを言うが、顔は楽しそうに笑っている。

まだヨシノボリを見るという登美子と別れて、斜面が岩場になっている岸を覗いて廻ることにした。

全体に右岸の川淵には岩場が多いためか、あまり大きい木は生えていなくて、ノイバラやクズが陣地を広げている。クズの葉が水面近くまで伸びており、所々に毒々しいほどの真っ赤な実が、赤いアイスキャンデーみたいに垂れ下がっている。その中にヤブツバキが一本だけポツンと生え、異彩を放っている。

左岸側は田圃(たんぼ)が広がり、青々とした稲の葉が風に揺れている。ずっと先は棚田となり、谷沿いに山の中腹まで伸びている。川岸の畦には、真っ赤な実を付けたナツグミが、疎(まば)らに植えてある。

泳ぎ場には幾分深いところもあり、岩や大きな石の下にはコイ、フナ、アカバチなどが隠れていることもある。この辺の子供は泳ぐことより、水に潜って魚を取ることの方が楽しみなのだ。中学生になれば大抵の子は、魚を突く手製のヤスを持っているくらいだ。

暫(しばら)くすると、登美子が大声で呼び掛けてきた。びっくりして振り向くと、緊張した顔で手招きをしている。急いで近寄ると、ヤブツバキが枝を伸ばしている先の岩を、黙って指差した。

「大きかコイがこの下に居るとよ！　岩の間に顔が見えるたい！」

春雄は半信半疑で、登美子と一緒に潜ってみる。岩が重

なり合った、暗い穴の奥を登美子が指差す。春雄が穴に顔をくっ付けて覗くと、最初は水に揺れている長い口髭が目に入った。

その奥で、ぎょろりとした目玉が春雄を睨んでいる。思わず後ろに下がりながら、目を凝らしてよくみると、今まで見たこともないような大きなコイである。胴体の半分は暗くて分からないが、頭の付近を見ただけで、大変な大物だということが分かる。

水面に勢いよく顔を出して登美子の方を見ると、大きく頷(うなず)いている。登美子もびっくりして、あまり声が出ないらしい。

「捕まえてみるたい。どの位大きんか分からんばってん、凄かコイやもんね」

「触ったら逃げるがね。このままにしといたらよかと！」

登美子の反対を押し切って、春雄はもう一度潜りなおした。登美子も付いてくる。大ゴイはまだ動いていなかった。

春雄がゆっくりコイの頭に手を遣ると、突然ブルッと体を震わせ穴からヌウッと出てきた。慌てて胴体を掴もうとしたが、大ゴイはバシッと手を振り払い、悠然と泳ぎ場の中央に消えていった。五十センチを遥かに超える大ゴイの堂々たる姿は、川の王様のような威厳と風格があった。

水面に顔を出すと、登美子が怒った顔で睨んでいる。

「春ちゃん、やっぱり逃がしたやなかね。あげん大きかコ

イば、簡単に捕まえられるもんね」

登美子の顔は怒っているが、目は笑っている。春雄の慌て振りが、よほど面白かったのだろう。

春雄は大ゴイを逃がしはしたが、それでも十分満足だった。あれほど大きくて王様のようなコイを、とにかく手で触れたことが嬉しかったのだ。手をバシッとはじいた時の重量感とヌルッとした手触りは、何時までも春雄の手の中に残っていた。

「春ちゃん、この穴に大ゴイが居るこたあ、他ん人に言わんで置こうね。黙っとけば、コイも静かに暮らせるたい」

「うん、きっとこの辺の川の主たい。王様みたいなもんやけん、何時までも居って欲しかもんね」

「来年も居ればよかね。コイの穴は、あの大きなヤブツバキの下たい、覚えとくね」

二人はもう他の魚は探す気がなくなり、下流にある六畳岩で休むことにした。六畳岩とは、着替え場所で使う大岩の少し先の、流れの真ん中にある平べったい低い岩のことである。名前の通り六畳ほどの広さがあり、子供たちは泳ぎ疲れるとこの岩で甲羅干しをして休む。

六畳岩で左右に分かれて流れる水流が、岩の先で合流し渦巻きながら淵を作る。アカハヤが群れを成して泳いでいるのが岩の上からも見える。

春雄と登美子が、六畳岩に寝そべり喋っていると、真夏の日差しが容赦なく照りつけてくる。体から滴る汗と水が、あっという間に乾いていく。春雄の隣に寝そべっている登美子が、紺色の水着から長い手足を伸ばしている。小麦色に日焼けした、伸び伸びした手足がまぶしくて、春雄は目のやり場に困りモジモジしている。

ちょうど二人の話が途切れた時、ケイコ先生がやって来た。

「二人とも、もう泳がんとね？先生も少し疲れたから、少し休みむたい。ちょっと、間に入れてくれんね」

ケイコ先生は二人の真ん中に腹ばいになり、下流に広がる風景を眺めている。長い髪が、川下からの風にそよいでいる。気持ちの良い匂いが、春雄の鼻をくすぐってきた。

南国の焼き尽くすような熱い日差しを受けて、山々の樹木もさすがにぐったりしている。泳ぎ場から流れる用水で、水をたっぷり貰った田圃（たんぼ）の稲だけは青々と茂り、沸き立つような生命をほとばしらせている。

しばらく六畳岩に寝そべっていると、左右を流れ下る渓流の冷えた風が心地よくなってきた。

晴雄が下流のほうをぼんやり眺めていると、一匹のトンボが川風に乗り、悠然と飛んできた。

「あっ、大きかオニヤンマが飛んでくるバイ。川の左側たい。もうそこまで来とるたい！」

最初に見つけた春雄が、興奮してオニヤンマを指差す。黒と黄の鮮やかな斑模様を震わせながら、セルロイドのような硬い羽で風を切り、春雄たちの上を滑るように飛んでいく。

「大きかトンボやねえ。先生も、こんなに偉そうに飛んでいるオニヤンマは、始めて見たバイ」と、ケイコ先生も目を見張っている。

春雄が起き上がって、オニヤンマの行方を捜していると、泳ぎ場の上をゆっくりと飛んでいく。子供たちが水しぶきを上げて遊んでいるのも、気にならないらしい。

「春ちゃんトンボはカやブヨば食べてくれるけん、大事にせにゃいけんよ」

ケイコ先生は体を捩って、オニヤンマの飛んで行った方を見つめながら言う。

「そんなら、泳ぎ場の虫ば退治してくれるんやろか？」

登美子が興味深そうに尋ねる。今まで春雄たちがトンボ取りしていても、一度も興味を示したことがないのにだ。だが、泳ぎ場で遊んでいる子供たちが一番困るのは、カやブヨなどの虫がいっぱいで、よく刺されることなのだ。

「そうたい、オニヤンマだけじゃなくトンボは皆、虫ば餌にするとたい」

春雄も、大きく肯きながらケイコ先生に追随する。

「ふーんトンボは偉いんやね、泳ぎ場の子供たちば護って

くれるもん。春ちゃん、もうトンボ取りはせん方がよかよ」

登美子は、春雄をトンボよりもひどい悪者にする。トンボ取りは、小さな虫を糸に縛って捕まえる。だから、男の子たちはトンボが虫を食べることを、とっくに知っているのだ。

「登美ちゃんは、ちゃんと春ちゃんが守ってくれるがね」

ケイコ先生は、二人の会話を羨(うらや)ましそうに楽しんでいる。長い髪が風に吹かれてフワッと舞い上がったが、チラッと見えた横顔が、何とも言えないように優しく笑っていた。春雄は五センチほど先生の方ににじり寄ってみた。吹いてくる風までが、甘く香るような気がした。

「春ちゃんは、頼りならんけんね。コイもよう捕まえきらんたい」

登美子はさっきのコイのことを、執念深く突っ込んでくる。

「二人はよかコンビたい。二学期も学級委員ばして貰うけん、よかよね。・・・先生も、誰か強か人に護って欲しかねえ」

ケイコ先生は、二学期の学級委員を勝手に決めてしまう。本当は、子供全員の選挙で民主的に決まるはずだ。大人の民主主義は、なんだか都合がよ過ぎるところがある。

「ねえ、先生が好きなのは、どげんタイプの人ね。しっかり護ってくれる人は、居らんとね？」と、春雄は無遠慮に聞く。

登美子が、先生の背中越しにきっと睨んでくる。しかし

春雄は、ケイコ先生が好むのはどんな男の人か、心から興味があったのだ。別に、ライバルとして知りたい訳ではないのだ。

「春ちゃんが心配せんでも、先生も好きな人は居るよ。でもねえ・・・本当に護ってくれるんやろかねぇ」

「先生は、まだその人と結婚せんと？」

登美子が女の子らしく、ケイコ先生の結婚話には興味が湧いたようだ。

「今度ね、その人のお母さんと会うとよ。でもどう成るんやろか・・・その人には、もう子供が居るしね」

ケイコ先生は、先ほどと違い、なんだか寂しそうな声になった。岩の下の小魚を飽きずに眺めている横顔が、艶(なまめ)かしいほどに白く見えている。

春雄は黙って眺めていたが、すぐ近くで見る先生は、いつも教室でみるより、ずっときれいだと思った。大人の人には、色々と複雑なことがあるらしいが、春雄は今のままのケイコ先生で居て欲しかった。

今度はさっきのオニヤンマが、下流に向かってゆっくりと飛び去って行く。もう泳ぎ場の虫退治は、終わったのだろうか。三人は黙りこくって、悠然と飛んでいくオニヤンマを見送っていた。セミの泣き喚く声は、山の方から絶え間なく降り続いている。

泳ぎ場で遊んでいた夏子が、ケイコ先生の姿を見つけて六畳岩に登ってきた。天場の端から何とか川原に降りて、石伝いに下って来たらしい。

「春ちゃん、ケイコ先生の隣に来てもよかね」

夏子は強引に、先生と春雄の間に割り込む。春雄は先生と少しでも離れるのは嫌だったが、夏子はそんなことはお構いなしだ。

「夏ちゃん、泳ぎは上手に成ったね。恵一君に教えて貰ろうたんやろ」

ケイコ先生が優しい目で尋ねる。夏子は自分の担任ではないくせに、ケイコ先生に懐(なつ)いていて、昼休み時間はよく一緒に遊んで貰う。

「うん、恵一さんは教えるとが上手かけん、夏子も大分泳げるように成ったとたい」

夏子は、春雄に当て付けるように、恵一を持ち出す。

「そうたい。春ちゃんたちは、あんまし上手に泳げんもんね」

登美子も笑いながら、春雄の弱いところを突いてくる。春雄は犬掻きでも、泳げさえすればよいと考えているので、あまり夏子に教えたりはしない。大体この辺の子供はクロールできれいに泳ぐより、水に長く潜って魚を上手く捕らえることが大事なのだ。

六畳岩から二百メートルほど下流に、赤く塗られた長い橋が掛かっている。古谷集落は川の右側にあるが、田圃（たんぼ）が広がる左岸にも人家が点在しているので往き来も多い。赤い橋は古谷橋という名前が付いているが、なぜか昔から橋桁から欄干まで赤く塗ってあるので、皆が〈赤橋〉と呼んでいる。

春雄たちも県道から赤橋を渡り、左岸に伸びている用水路に設けられた、草ぼうぼうの小道を通って泳ぎ場にたどり着く。

「春ちゃん、赤橋ば、米婆ちゃんが通って行くばい」

春雄が顔を上げて赤橋を眺めると、今朝、夏子の家で会ったばかりの米婆ちゃんが、魚を入れた大きな箱を背中に背負って、ゆっくり渡っている。頭には孫に買って貰った、自慢の青い麦藁帽子を、大事そうにかぶっている。

米婆ちゃんと呼ばれているのは、毎日のように古市の村を廻る、魚の行商人である。

米婆ちゃんは、六十歳をとうに過ぎているのだが、昔と変わらずに曲がった背中に魚を担いでやってくる。他にも、軽トラックで売りに来る魚屋もいるのだが、米婆ちゃんは、休むことなく毎日、毎日、新しい魚を安く持ってくるので、村人に重宝がられている。

「春ちゃんちは、この頃も米婆ちゃんの魚ば買うとると？うちらの近所では、もうあんまし買う人が居らんとよ」

登美子が、小さな声で内緒話をするように話し掛けてきた。

米婆ちゃんは水俣の近くに住んでいて、朝一番に魚市場で魚を仕入れ、湯の上駅まで汽車を使い、後はバスで古市に着く。最初に南端にある春雄たちの高橋集落を廻り、順に北に向かって歩いて商売をする。

売り切れたところで帰ってもよいのだが、律儀にも奥のほうに住む昔からの顧客には、少し魚を残して必ず立ち寄ってくれる。

だがこの頃は、米婆ちゃんの持って来る魚は危ないとの、噂が出始めているのだ。米婆ちゃんが買い付ける市場の魚は、水俣湾で捕れるものが大半だが、これが問題なのだ。

春雄にも詳しいことは分からないが、母親たちの話では、水俣で取れた魚は病気に掛かっていると言う。

この頃、水俣の漁港では、投げ捨てられた魚を食べた猫が、狂い死にしているらしい。悶え狂った猫がクルクル回って、海に飛び込むのを見たという人が大分出ているらしい。

「そうね、登美ちゃんの付近でも、もうそんな噂が流れとるとね。――悲しかことやねえ」

ケイコ先生が寂しそうな顔で答える。

「先生の家でも、魚はもう買わんとね？　うちは魚が大好きだけん、食べられんと困るたい」と、登美子が心配そうに聞いている。

登美子は何でもよく食べるが、魚が一番の好物なのである。

「毎日魚ばっかり食べとれば、病気に成るかも知れんばってん、少し食べるとは、きっと大丈夫たい。先生もよう食べとるよ」

「魚が何で病気に成るとか、誰か調べたんね？」

春雄は、なんで魚が病気になるか知りたい。そうしないと、何時までも魚が食べられないようになる。

「原因は、県とか国で調べるとるとやろが、まだ分からんらしかたい。偉か人たちは、大きな会社に遠慮があるとやろうね」

ケイコ先生も詳しいことは知らないらしい。いや、これまでにきちんとした調査報告はなされておらず、誰もが人の噂だけで怯えているのだ。周辺地域の住民たちは、薄々は水俣の大会社が流す排水が原因だと感じているが、国や県はたいした調査はしていないらしい。

「何が原因か分からんとに、米婆ちゃんはかわいそうたい。あげん年まで頑張って来たとに、今は皆に悪口ば言われとるもん」

登美子は、不条理な世間の噂に怒っている。村の人も悪気で言っている訳ではないのだが、原因不明の病気のことなので、見過ごしにも出来ないのだ。

「本当やね、噂だけで判断すっとは、よかことじゃなかたい。登美ちゃんや春ちゃんが大人になったら、噂だけじゃなく、ちゃんと自分で調べて判断するごつなって欲しか」と、

ケイコ先生が静かな口調でみんなに話す。

「うちは帰ったら、母ちゃんに、米婆ちゃんの魚ば毎日買うて呉れるように頼むたい」と、登美子は米婆ちゃんの応援団長になることを力強く宣言する。どうしても好きな魚を食べたいらしい。

「うちのお母ちゃんは、今朝も米婆ちゃんから魚ば買うとったよ。母ちゃんは、米婆ちゃんのことば、いつも心配しとるもん」

難しい話の時は、いつもは知らん振りをしている夏子が、話に加わってきた。子供でも興味を持つくらい、魚の病気の不気味な不安感が、段々とこの地方まで広まってきているのだ。それにしても、夏子の母は優しい人である。

「こん川は水がきれいやけん、ホタルがいっぱい居るとやろね？」

ケイコ先生は、子供たちをこれ以上心配させたくないのか、澄みきった川底を見ながらつぶやいた。カワニナらしい褐色の巻貝が、川の浅瀬に幾つか見えている。

「この前の晩に、赤橋の上で花火して遊んどったら、泳ぎ場の付近にホタルがいっぱい出とったとよ」

登美子がこの付近のことは、一番詳しいので現場担当者のような説明をする。赤橋は夜になると、子供たちがよく花火で遊ぶところなのだ。橋の欄干から花火を落とせば安

全なので、大人たちも許可している。

粗末で小さな花火だが、赤橋から水面にゆっくり落ちていく光は幻想的で、夏休みの夜は子供たちが夢中になる。

「今度、一度でいいから見てみたかなあ」と、ケイコ先生が呟く。

「先生の家の付近には、ホタルが居らんとね？」

夏子が不思議そうに聞く。高橋集落でも、夜になれば川にはホタルがいっぱい出ている。

「先生の家は町の中にあるけん、ホタルはたまにしか見れんたい」

ケイコ先生は、大きくなってからは都会の学校に行ったので、案外田舎の動植物に疎(うと)いところがある。

「うちも、泳ぎ場の夜は怖いけん見たことが無か。先生、今度みんなで見に来ようか」

登美子が早速先生に提案する。こういうことには学級委員としての手際がよい。

「そうやねえ、早ようせんとホタルの季節は終ってしまうもんね。今度の土曜日に、校長先生の家に泊まりに来るけん、そん時みんなで見に来ようかね」

ケイコ先生は、田中校長の奥さんの遠縁に当たるらしい。仕事で遅くなった時や休みの日などには泊ることも多い。

この辺のホタルは、六月の終わりごろから出始めて盂蘭盆(うらぼん)の前にはもう居なくなる。たぶん今週末が、ホタル

を見るには最後の機会であろう。

「春ちゃん、今度の土曜日ばい。又忘れたらいかんごと、ちゃんと暦に書いとかんとね」と、登美子が指示を出す。

春雄の都合に関係なく、当たり前のように参加を決められていく。ホタルは、高橋でも見られるので気が進まないのだが、ケイコ先生と一緒なら、と納得する。どっちにしろ、登美子の命令には逆らえないのだ。

「先生、うちも来てよかね」

思いがけずに、夏子も参加を希望する。夏子は夜八時頃には眠ってしまうから、いつもは夜中に出掛けるようなことはしない。その代わり朝は早いので、六時半のラジオ体操の前には必ず春雄を迎えに来る。

「夏ちゃんは小さいから無理たい、ホタルは高橋の川で見せてやるけん」

春雄は、夏子を何とか思い止まらせようと、真剣に説得を始める。連れてきたら最後、帰りは絶対に背負って帰ることになるだろう。

「春ちゃん、そげんこと言わずに、夏ちゃんも連れて来ればよかたい。うちが、ちゃんと面倒ば見てやるけん」

登美子は一方的に、夏子の参加も認めてしまう。

春雄は——これでは夏子が登美子に懐くはずだ。後の面倒は、全部負わせるくせに勝手過ぎる——と、思うが口には出せない。

春雄は、心の中で登美子と夏子を呪ったが、残念ながら胸の中にしまい込んだ。それに、夏子の母親にはよくお菓子を貰うので、意地悪されたと、言い付けられても困るのだ。

こうして、土曜日のホタル探検隊のメンバー選びになり、恵一、知子、良枝のいつも顔ぶれが指名された。

「チョウジ君も呼ぼうかね。用があるけん、先生が連絡しとくたい」

先生は楽しそうに頷いている。陽は少しずつ、西の山並みに近づいていた。先ほどのオニヤンマに代わり、真っ赤な胴体のナツアカネが、五, 六匹の編隊を組んで、泳ぎ場の虫退治に向かって行く。

土曜日は朝から晴れ渡っており、気温もどんどん上昇していた。この様子では、日中はかなり暑くなりそうである。春雄が牛小屋で餌の準備をしている時に、夏子がラジオ体操に誘いに来た。

古市では、夏休みには子供たちが各集落の公民館に集まり、集団で朝のラジオ体操をすることになっている。夏子は朝早く起きるので、待ち兼ねたように春雄を誘いに来る。ラジオ体操をすると、その後に食べる朝食が美味しいらしい。

春雄は、朝は家畜の世話で忙しいのだが、あまり断るとケイコ先生や登美子に言いつけられるので、不本意ながら

一緒に参加している。

「今日は夕方も晴れると、ラジオの天気予報が言うとったバイ。ホタル見物にちょうどよかね」

夏子は、朝からもう、うきうきしている。夏子は一年生も板に付き、みんなと遊ぶのが嬉しくて堪らないのだ。

「夏ちゃんは、夜遅うなると寝てしまうばってん、今日は家に帰るまで、ちゃんと起きとくんよ」

春雄は、無駄だと思うが一応念を押しておく。

「夏子はもう小学生やけん、子供のごと、すぐ寝たりはせんとよ」と、夏子が言い返す。

春雄は全く信用できなかったが、諦めて黙って歩いていく。

春雄が昼食を済ませ、母親に夜食のおにぎりを作って貰い夏子を迎えに行った時は、もう昼の一時を過ぎていた。

夏子は、おにぎりとお菓子の準備を母親に頼んで、自分は昼寝をしていた。春雄が朝方に大分脅かしたので、あまり早く眠らないようにと、朝食後から昼寝をしていたらしい。可笑しくて笑ってしまったが、何となく可愛くも思えた。

「春ちゃん、夏子はどげんいっぱい昼寝しても、暗くなればすぐ眠くなるから、早う連れて帰ってくれんね」

夏子の母は、おにぎりとお菓子をナップザックに詰めながら、冗談とも本気ともつかぬ笑顔で言う。やはり母親だから、子供の性格をよく知っているのだ。ニコニコしながら、

奥の部屋に夏子を起こしに行ってくれた。

春雄と夏子は暑い盛りの真っ昼間に、体中汗びっしょりになりながら、のろのろとした足取りで、みんなが集まる古市小学校を目指していた。道路わきの土手には、もうマンジュシャゲが真っ赤な輪状の花を付けている。マンジュシャゲが、何処までも果てしなく続いているのは、壮観な眺めでもあるのだが、子供心にもあまり気持ちの良いものではない。

暑いので二人は途中で休んでばかりいたので、学校に着いたのは三時をまわっており、ホタル見学隊では最後の到着だった。

「春ちゃん、やっと来たんやね。又、忘れとるんじゃなかかと、心配しとったんばい。うちらは、泳ぎ場の天場に敷くマットば用意しとくけん、裏山に行って除虫菊ば採って来てくれんね」

泳ぎ場に限らず、川の付近は夜になると蚊やブヨの天下になる。特に蚊は、ヒトスジシマカやセスジユスリカが、ブーンブーンと不気味な音を立てて飛び回り、ほんの少しの間にも、顔や手足が腫れ上がるほど刺されてしまう。トンボたちも、夜は虫退治をお休みするらしい。

この地方では蚊遣りとして、除虫菊をたまに使う。除虫菊を火にくべて燻すと、蚊だけでなくほかの虫も逃げてし

まう。除虫菊は、戦前までは農家が畑で栽培したらしいが、今では、その残りが自然に根付いて、畑の跡地などに残っている。裏山にもそんな畑の跡地があり、覆い茂る雑草に混じって、僅かだが除虫菊が生えているのだ。

春雄は、チョウジがすでに採集に行っていると聞いて、急いで山に登った。

「チョウジ君、大分採れたんやね。どの付近に、よう生えとると？」

春雄が着いたときには、除虫菊が山道の端に干してある。多少でも水分を取らないと、焚き火が消えてしまう恐れがあるのだ。

「畑地跡ば、よく探すとあるたい。俺が探しとくけんよかたい、春ちゃんは、取れたものば校庭に運んで、干してくれんね」

春雄は除虫菊の束を、校庭までえっちらおっちらと運んでいった。裏山の畑地跡は学校のすぐ近くだが、それでも何回か往復すると汗が噴出してくる。

春雄が校庭に帰って、採ってきた除虫菊を広げていると、夏子が校舎の横にある芝生にしゃがみ込み、地面をじっと見ているのが目に入った。

春雄が近づいてみると、夏子は真っ黒な顔を上げにこっと笑った。

「春ちゃん蟻さんがいっぱい居るとよ。この行列の先に、

巣穴ば見つけたばい」

夏子は大発見したみたいに、秘密めいて巣穴の在りかを教えてくれた。

「夏ちゃん、これはクロオオアリの巣たい。ほれ、この辺を歩いとる蟻と比べて、体が大分大きかろう」と春雄が偉そうに教える。なに、恵一からこの前教えて貰ったばかりなのだ。

「小さい蟻も歩いとるばい。これは何ね？」

「小さか蟻は、クロヤマアリて名前たい。どっちも、土の下に大きか巣ば作っとるたい」

クロオオアリは、地面に落ちている大小の虫の死骸を、せっせと運んでいる。校庭や芝地にはよく見ると、虫の亡骸（なきがら）がいっぱい落ちている。中には羽などを失くして、胴体の一部だけが残っていたりする。

「蟻さんの体は凄かたい！　胸とお尻がまん丸に膨らんどるし、腰はきゅっと括（くび）れとる。外国映画の女優さん見たいやねえ。夏子も、大人に成ればこげん風になるとやろか」

夏子は、子供にしても人を驚かすようなことを平気で言う。今まで、どんな外国映画の女優を見たのだろうか？　自分の母親を見れば、大人になったときの体型が分かるだろうと、教えたくなる。しかし、それもかわいそうだし、何より、夏子の母親の悪口は言いたくないので、春雄は黙って雲ひとつない蒼空を見上げた。

南国の、真夏の焼き尽くすような日差しの強さは、小さな虫にとって苛酷な環境なのだろう。しかし、死んだ虫も、こうして蟻が生きていく為の餌となり、その蟻はいつか微生物の餌となって、最後は大地に戻るのだから、生き物の世界はどこまでも複雑で面白い。

夏子は飽きることなく、顔中汗いっぱいにしながら、蟻の動きを眺めている。餌を探して歩き回ったり、餌を四,五匹のグループで運んだりしている蟻は、暑さにも負けず本当に働き者だ。

子供の遊びは、野山以外にも、どこにでも転がっているし、ことに生き物の活動の様子は、それだけで子供たちを夢中にさせてくれる。

チョウジは除虫菊のほかに、焚き火用の枯れ木を探しに奥のほうに登っていく。小さな鉈(なた)を持っており、器用に枯れ枝を切り取って蔓(つる)で束ねていく。

今朝、わざわざケイコ先生が尋ねてきて、ホタルを見に行こうと誘ってくれた時は、本当に嬉しかった。チョウジは久しぶりに心が躍った。だから準備は何でも遣るつもりで、家から鉈も持ってきている。

切り揃えた枯れ木を、春雄と二人で校庭に運び終えた時には、ぎらぎらと怒りの塊だった太陽は、もう川下に聳(そび)え

る山並みに隠れていた。

山と空の境界は茜色に染まり、黒々とした山並みの連なりが、屏風絵のように濃淡を描き出している。真上の空は、天空の果てまでも覆い尽くすような、クリスタルのような硬い青色で染めつくされている。

みんなが集まる校庭には、もう穏やかで柔らかい夕闇が迫っていた。

チョウジは一人で、枯れ木と除虫菊を泳ぎ場の天場まで運んでいく。泳ぎ場に着くと、もう子供の姿はまったく無く、水を湛えるダムの水面だけが、夕闇の中にキラキラと黄金色に輝いている。周りの木々に取り付き喧しかったセミも、クマゼミやアブラゼミからヒグラシに変わり、カナカナカナ、カナカナカナと、涼やかに鳴く声が心に染み込んでくる。

皆は校庭の桜の木の下で、先生を中心にして用意してきた夕食を食べ終わった。誰もが簡単な弁当か、おにぎりと水筒を持ってきていた。

昼から夜に変わる怪しげな時間帯が、もう、そこまで忍び寄っている。桜の木の上から降っていた優しいヒグラシの鳴き声も消えて、代わりにそこいら中の草むらから、マツムシ、スズムシたちの軽やかな合奏が聞こえ始めた。やがてケイコ先生が出発の音頭を取る。

「さあ、暗くなる前に出掛けるとよ。もって行くものば、みんなで手分けして調べてね」

懐中電灯、カンテラ、座布団代わりの小さなマット、ホタル捕獲用の虫網、虫刺さされの薬箱などを、全員で手分けして持つ。

ケイコ先生を先頭に、登美子、夏子、良枝、知子、恵一、春雄、チョウジの順で、ホタル探検隊は校門から行進を始める。

学校から泳ぎ場まではいくらも距離はないが、僅(わず)かの間に蚊やブヨに取り囲まれてしまう。県道沿いの草むらから聞こえていた、虫の音色がもう聞こえなくなるほどの、凄まじいブヨの大群が発生しているのだ。

赤橋を超えて用水路脇の小道に掛かる頃は、エンマコオロギやアオマツムシに加えて、田圃の住民であるカエルたちが、大合唱で迎えてくれる。

泳ぎ場は濃くなる夕闇の中でも、水面が仄かに光っている。泳ぎ場の上流を、木々がトンネルのように囲んでいる付近は、もう真っ暗闇で何も見えない。時々、バシッ、ピチャッと、魚が跳ねる音だけが聞こえてくる。

ホタル探検隊の一同は、天場の上に体育用のマットを何枚か敷き、その間に焚き火用の枯れ木を積んで蚊遣りの準備をする。天場の下の川原にも、余った枯れ木で蚊遣りを

作る。チョウジが、持って来たマッチで火をつけて廻る。皆は枯れ木が燃え始めると、少しずつ除虫菊を投げ込む。日ごろから、外で遊ぶことには慣れているので手際がよいのだ。

除虫菊の蚊遣りが燻り始めると、それまで煩わしかった蚊やブヨは次第にに退散していく。除虫菊の効き目は大したものだ。

みんなは、体育用のマットに足を伸ばして座り、夏休みのたわいない出来事をしゃべりながら、ホタルの出現を待っている。ここでも、登美子が一番よくしゃべる。

春雄はマットに寝そべり、ウトウトとしていた。天場の水落ち口から流れ落ちる、ザー、ザーと絶え間なく続く水音が心地よい。眠たい目の先には、どこまでも果てしない暗闇が広がり、妖しげな夜の世界に誘ってくる。黒々と聳えている山々に囲まれ、浮かび上がっている空には、もう僅かに残っていた夕焼けの色もなくなり、次第に青黒い色に変化していく。

赤橋はもう色が判断できなくなり、黒いシルエットが橋の存在を証しているだけだ。そのずっと先の人家には煌々と明かりが点いていた。

目を凝らしてよくみると、赤橋の下にポツン、ポツンと小さな光が見え始めた。眺め続けていると、段々と此方に

近づいてくる。

春雄は暫くして、やっとホタルだと気がついた。

「ホタルが出てきたばい！　赤橋のほうに居るたい」

春雄の言葉に、皆が川下のほうに目を向ける。橋の下の暗闇には、ホタルがピカー、ピカーと光っているのが見える。暫く経つと、光のリズムが忙しくなり、川原いっぱいに広がってきた。光の玉が次第に大きくなり、ホタルがすぐ近くまで来ているのが分かる。

この辺のホタルは、ゲンジボタルだと言われている。渓流の水がきれいなため、餌となるカワニナが数多く棲(す)んでいるので、ゲンジボタルの生育には都合がよく、たいていの年は大量に発生する。

「泳ぎ場にも、いっぱい出て来とるバイ！」

夏子の興奮した甲高い声で、後ろの泳ぎ場に目を向けると、樹木のトンネル付近の漆黒(しっこく)の闇に、ホタルがポカリ、ポカリとゆっくり浮かび上がっている。

皆は、ホタルの幻想的にほのめく光に、まるで魂を奪われたかのように、押し黙ったまま上流と下流を交互に眺めている。

よく見るとピカ、ピカと短く光る雄と、ピカー、ピカーと長く光る雌の区別も付くようになった。

僅かな時が過ぎ行く度に、ホタルの数はどんどん増えている。もう泳ぎ場は、ホタルだらけになっていた。水面近

くを照らしていたかと思えば、あっという間に周りの樹の上まで昇っていく。泳ぎ場の端から端まで、ゆっくりと横断するホタルの群れもいる。

程なくホタルは、光の塊となり、縺(もつ)れ合いながら上に駆け上がった。だが、塊は一気に分散し、ゆるやかな光の曲線を残して、水面に舞い降りていく。音もない漆黒の水面が、ホタルの光で微かな明りを得ていた。

春雄は今まで見たこともない美しい光の競演に、魂を吸取られたように呆然としていた。真っ黒な闇を背景に、緑色、白色、赤色の様々な光が織り成す曲線模様は、脳裏に残像を残すゆとりさえなく、絶え間なく変化していく。

舞い降りたホタルの光が照らす、水面の微かな輝きは、とても、この世のものとは思えなかった。ホタルたちが、来年も命が蘇るよう、水の神様に祈りを捧げているのだろうか。

ケイコ先生は、人が作りようもない美しい光景を見て、山や川に宿る神々の存在を信じかけていた。人々は自分達が手を下し、狂わせてしまう自然システムの脆弱(ぜいじゃく)さを、たくさん見て、聞いて、知っている筈だ。それでも、何もしようとしない人間の本質的な怖さと、未来に不安を感じていた。

この子らも、俗物的な世間的欲望に壊されず、いつまでも清らかで、心の豊かな人間に育って欲しい。この自然が持つ、永遠の美しさを忘れず、お金で購えない、本物の豊かさを掴んで欲しかった。

恵一は、母親にもこの光景を見せてやりたかった。いや、福岡にいる父と、三人で並んで見たらどんなに幸せだろうと考えていた。

両親が別れることになった事情は詳しくは知らないが、恵一はどちらの肩も持ちたくなかった。恵一が、よく似通っている母の美しさと優しさも、父の男らしさと決断力のある性格も、堪らなく好きである。

ここのホタルは、福岡の近くの公園でたまに見るのと、まったく異なる生き物に見える。もしかしたら、この村の子供たちも、都会の子供とは異なる種類の人間かもしれない。

恵一は、この土地の持つ美しい魅力に、だんだん引き込まれていくのが分かっていた。

登美子は、隣に座っている恵一のことも忘れていた。ただただ口を開けて、ホタルの舞い踊る姿を見つめているだけだった。

いつも赤橋で花火遊びをする時に、川原でホタルが飛んでいるのを見ていた。が、泳ぎ場でこんなに美しい世界を

作り上げているとは、夢にも思わなかった。

自分の身近にこんな美しい光景が潜んでいたことに驚いたが、見ているうちに嬉しくて、楽しい気分になっていた。

今日は見に来ていない友達を誘って、また来よう。今年が駄目なら来年来ようと、学級委員らしい気配りで考えていた。

夏子は、いつもなら眠くなる時間だが、今日は大丈夫だった。頭の上を飛んでいくホタルを、立ち上がって捕まえようと背を伸ばしてみたが、スーと両手の間をすり抜け、川下に消えていった。

夏子には、ピカーピカーと点灯する光が、まるで宝石のように思えたのだ。

ホタルをいっぱい集めて、乗り物にして空を飛んでみたかった。空の上でホタルたちと遊びながら、何処までも、何処までも遠くに行ってみたかった。

知子はこの前見た、映画のおまけのニュースに出てきたバレーダンサーを思い出していた。手足がゆっくりと流れて、しなやかな曲線を描いて踊る美しさが、ホタルが見せている光の残像とそっくりだと思った。

大きくなったら、踊りを習うのが知子の夢だった。

良枝は、この感動を早く誰かに伝えたかった。本当は、ホタルなどの昆虫には興味がなく、今日はあまり気乗りがしなかった。仲良しの、登美子と知子から誘われたので、付いて来ただけなのだ。

だが、こんな光景に出会えるなら、毎日でも来たかった。始めて、古市の山や川が素敵に思えた。

大人になっても、この土地から出る気がしなくなった。将来、この村を出ることがあっても、きっとこの土地に帰ってしまうだろう、と思い始めていた。

チョウジは、ケイコ先生が大好きだった。ナイフを振り回したのも、好きな先生にみんなの前で叱られたのが、悔しくて堪らなかったのだ。

今朝、先生がわざわざ呼びに来てくれて、こんなに美しいものを皆で見られた喜びに、涙がこみ上げてきた。

ホタルの美しい乱舞を、ケイコ先生と二人だけで見ている気がして、何だか嬉しくなった。

どのくらいの時が過ぎたのだろうか、春雄は無数に飛び交い、乱舞していたホタルが、少しずつ減りはじめたのに気づいた。

「ケイコ先生、なんかホタルが少し居なくなったバイ」

ケイコ先生も初めの頃より、ホタルの数が減ってきたの

に気づいていた。そして胸の中を、なにか悲しい風が吹き抜けていくような気分になっていた。

「ホタルはね、好きな相手が見つかると他の人に見られんように、光ば消して二人だけで楽しむとたい」

「ふーん、どっかに行ってしまったんじゃなかとやね」

登美子も感心している。ホタルはきっと照れ臭がっているのだと思った。

「うちらも、ホタルのデートの邪魔ばせんごつ、そろそろ帰ろうか」

ケイコ先生の言葉で、子供たちは仕方なく渋々と立ち上がった。本当は、何時までもここを離れたくなかったのだが、ホタルたちのデートの邪魔をしたくなかった。

春雄は、チョウジとマットを担いで帰る途中の赤橋で、泳ぎ場の方を振り返ってみたが、ホタルの光はどこにも見えなかった。

皆は、あまり口を開かずに学校まで歩いた。何かしゃべると胸に刻んだ美しい光景が、幻のように消えてしまう気がしていたのだ。

学校に帰り着くと使った道具を急いで片付け、校長先生の家に泊まるケイコ先生と別れて、それぞれの家路に着いた。

春雄は、登美子たちと一緒に泳ぎ場の上まで来たが、県道からは何も見えなかった。まるで先ほど見た美しい光景

が、夢の中の出来事だったようにに思えた。
夢でないのは、手を繋いで歩いている夏子が、こっくりこっくりと、眠そうに体を揺らしていることだった。辺り一面から、マツムシやスズムシの高く、低い軽やかな合奏が、また鳴り響いてきた。

登美子たちと古谷集落で別れて、暫く歩くと、夏子は本当に眠り込み始めた。春雄は、仕方がなく夏子を背負うことにした。ヨイショと声を掛け、このごろ重くなってきた夏子を背負い、砂利と土埃で夜目にも白く見えている県道を、よたよたした足取りで高橋に向かって歩き始めた。
途中で休みながら、ふと、夜空を見上げると、山並みに囲まれた狭い青黒い空間に、入りきれないほどの星が輝いていた。なんだか、先ほど見た泳ぎ場のホタルが、集団で夜空に駆け昇り、星になって輝いているようだ。天の川の、白い、薄ぼんやりとした流れが、奇妙に目に焼き付いた。
春雄は、明日も晴れて、暑い一日になりそうだと思い、げんなりしながら、また歩き始めた。

春雄は残りの夏休みを家の手伝いで忙しく過ごした。泳ぎ場には夏子と二回泳ぎに行ったが、昼間は子供たちの喧騒が響くだけで、ホタルたちはどこかに行ってしまったようだ。

大ゴイの棲家（すみか）を覗いてみたが、どこかで餌を探しているのか、もう居なくなったのか、二度と出逢うことはなかった。子供たちがバタバタと泳ぐのが煩くて、夏休みが終って静かになるまで、帰って来ないかも知れないと思った。

六畳岩で寝そべって川沿いを眺めていると、ナツアカネが一段と赤くなった胴体を、小刻みに振るわせながら編隊を組んで飛んできた。

空の雲も、盂蘭盆（うらぼん）の前とは異なり、かなり高くなっているのが分かる。そういえば、あれほど喧しかったアブラゼミやクマゼミの声は全く聞こえない。地中に卵を生みつけ、もう死んでしまったのだろうか。

セミは幼虫になってからも二、三年は地中で暮らし、地上に出て羽化してから、僅か二、三週間で死んでしまうという。その残り僅かな時間を、精いっぱい使って、恋人を探し廻り、鳴き続けるのだと思えば、あの煩い声もなんとなく許せるような気がする。

暑い日差しに、六畳岩で手足を伸ばしたまま、少しウトウトしていたら、夏子がやって来た。恵一に教えて貰った、クロールの練習を懸命にしていたので泳ぎ疲れたらしい。

「春ちゃん、こんな所で寝てはいかんよ。もうすぐ夏休みも終るんやから、元気出して泳がにゃ、損するたい」

何が損だか分からないが、夏子は今年に入ってから、風邪ひとつ引かずに走り回っている。とにかく、周りが疲れ

るほど元気な子供だ。

「夏ちゃんはもう泳がんとね？　クロールは、上手く息継ぎ出来るようになったとね」

「うん、ちゃんと出来るよ。今度は春ちゃんにも、教えて上げるたい」

やれやれ、夏子はもう、水泳コーチが出来る気分になっている。遠くから見ていたが、あんなに手足をバタつかせたら、春雄なんか疲れてしまい、十分も泳げなくなってしまうだろう。

春雄は、呆れながら黙って寝そべっている。夏子は丸々とした体を投げ出し、仰向けに寝ていたが、疲れているのかすぐに寝息を立て始めた。

春雄は、暫く夏子の寝顔を見ていたが、楽しい夢でも見ているのか、時々笑い顔を見せる。帰る時間まで、そっとしておくことにした。

川原を吹いてくる風が、火照った体に心地よい。もうすぐ楽しかった夏休みも終わり、二学期が始まることになる。

だが、今年泳ぎ場で出会った大ゴイの姿と、ホタルの乱舞する光景は、いつまでも春雄の胸に残り、大人になっても決して忘れることがなかった。

夏休みも最後という日になって、昼前に登美子たちが遊びに来た。

「春ちゃん、宿題終わったとね？　これから、町まで遊びに行こうや」

春雄は数日前から、夏休みの宿題と格闘するのに必死だった。だが、今日になっても、まだ苦手な算数が丸々残っており、食事もろくに食べず朝早くから取り組んでいた。母親たちも気を使って、そっと畑仕事に出て行ってくれた。

「誰ね、こんな時に呼びに来っとは！」

面倒な割り算の計算で、頭がボーとしたまま不機嫌な顔で、縁側に出てみた。

「春ちゃん、まだ夏休みの宿題ばしよっとね。学級委員のくせにちゃんと計画的にせんけん、今頃になって慌てるたい。そげん一夜漬けはやめて町の温泉に行くバイ」

庭先では夏子が、一段と黒くなった顔をくしゃくしゃにして、軽口を叩いている。庭に続く道路際の生垣の上には、登美子のほかに、知子と恵一、それにチョウジまでが、よく日焼けした顔を並べている。

「皆、どげんしたとね。もう宿題は終わったんね」

「そげんもん、皆ずっと前に終わっとるよ。春ちゃんは、ずっと遊び呆けていたとね？」

登美子がいつものように、厳しく突っ込んでくる。春雄は、（そりゃ家の手伝いもなく、毎日を自由に使えるのなら、宿題なんか簡単だろう）と言い返したかったが、いつものように言葉を飲み込んでしまった。どうも、登美子の前では

強く出られない。

「うん、まだ少し残っとるばってん・・・よかたい、今夜するけん。おいも一緒に行くたい」

春雄は急いで、ランニングシャツを他所行きの服に着替え始めた。と、言っても学校に行くのと、たいして変わらない服装である。自分の服を詰め込んだ箪笥（たんす）の上から、貯金箱を取り出し、僅かに残っているお金を取り出して、ズボンのポケットに押し込む。バス賃や風呂代、それに多少は買い物もしたいのだ。

「今からやと、昼のバスに間に合うたい。あっ、バスが下って来るのが見えるたい、バス停まで急がんといかんバイ」

登美子の号令で、春雄たちは田んぼ脇の小道を走り始めた。バス停に到着したときは、少し上手にある橋の向こうを、クリーム色の古ぼけたバスが下ってくるのが見えた。

梅雨時の長雨で、砂利もとうに流された凸凹道を、暑苦しい土埃を巻き上げ、鼻面を振りたて、重そうな車体を揺らしながら走ってきた。バスの胴体には、剥げかかった黒ペンキで〈サンコウバス〉と、書いてある。だが、埃にまみれて、今は読み取るのが難しい。

「あら登美ちゃん、団体さんで何所まで行くとね。まさか遠足じゃなかとやろ」

顔なじみの車掌さんが、切符を切りながら笑いかけてくる。登美子と同じ古谷に住んでいる、二十四、五歳のお姉

さんである。いつも愛嬌があるので、村の人たち、特に青年団の若者たちに人気がある。化粧も若い女らしく派手で、小柄で決して美人ではないが、丸々と太った安定感のある下半身で、車内をのし歩いている。春雄はバスに乗るとこの車掌さんに会うことが多く、いつも大人の女性の近寄りがたい色気に、なぜか圧倒される。

ケイコ先生と同年輩なのだが、全く化粧気のない先生とは違う、春雄にはまだよく理解できない、へんな魅力があるのだ。

このバス路線は、西九州一円をカバーしている、大手のバス会社が運営している。だが、古市のようなローカル区間は、始点である隣町から終点の岩間まで、一台でピストン往復をするため、運転手と車掌は出来るだけ地元の人間を採用して経費を浮かしていた。

現にこのバスの運転手も湯の上町に住んでおり、最終バスを終点である岩間集落の駐車場に停めた後は、バイクでトコトコと自宅まで下って行く。翌朝は、またバイクで登ってきて始発のバスを運転する。車掌のお姉さんは、古谷までバイクの後ろに乗せて貰っているようだ。

自家用車を持っている家は殆んどない古市では、バイクや自転車が主な交通手段だが、年寄りや、婦人、子供にとって、町に出るにはバスに頼るしかない。バスが単なる交通手段ではなく、道路や川、水道と同様、この村落共同体にとっ

て大事な生活形成要因の一つなのである。だから、子供たちも自然と運転手や車掌に憧れを持つようになる。

運転手や車掌にとっても、乗車する人たちはほとんどが顔馴染みだし、バスを運転している間でも、ずっと世間話を続けている。まるでバスの中が、寄合所か団体旅行みたいに賑やかである。また、年寄りは、バス停まで歩くのが面倒なので、自宅前で手を上げバスに勝手に乗り込んでしまう。もちろん、苦情などを言う人は一人もいない。

「チョウジ君、本当に夏休みの宿題は終わったとね」

春雄は、バスの後部座席に並んで腰掛けたチョウジに、小声で聞いてみた。前の席に座っている登美子に聞こえると、何かと都合が悪いのだ。

「うんにゃ、終わっとらんたい。ばってん、今年は全部の宿題ば、少しずつやったけんよかと。去年までにゃ、一つもせんかったけん、だいぶ進歩したたい」

チョウジは平然としている。母親の監視つきでも、勉強だけは頑張らない主義らしい。春雄はここ二, 三日ろくに眠らず宿題と取り組んだ自分が、何だか馬鹿馬鹿しく思えてきた。よくよく考えると、本当は、チョウジが一番まともな人間かもしれない。春雄はまだ残っている宿題は諦めて、今夜はゆっくり眠ろうと決めた。

バスは湯の上町の街中に向かって、一時間ほどの道のりを、ゆっくりと下っていく。何しろ、正規の停留所じゃな

くても、簡単に止まって客を乗せるし、トラックなどの対向車が来ると、その度にどちらかが待避所までバックしてやり過ごすのだ。車掌もいちいちバスを降りて誘導するから、時間も掛かるのだ。

町が近づいて来るにつれて、両側に迫っていた、濃緑色に溢れた山並みが次第に遠くに離れていき、道路脇を流れる川の幅が段々と広くなり、流れも緩やかになる。そして、バスに流れ込んでくる風が、淀んでムッとするくらい微湯(ぬる)くなった。

「春ちゃん、タオル忘れずに持って来たとね。最初に温泉に行くとよ」

後ろの席から夏子が声を掛けてくる。夏子はあまりバスに乗らないから、今までずっと窓の外の流れていく風景を、珍しそうに眺めていたのだ。だが、町が近づくに連れて、単調になる彩りに飽きてきたらしい。

「うん、ナップザックに石鹸とタオルば入れとる。ばってん、何所(どこ)の湯に行くとね」

「町営の温泉は混んどるけん、一番空いとる竹原湯に行くとたい。あそこは、いつも空いとるけんね」

この町は、温泉が豊富に出るため、旅館はもちろん、五つある公衆浴場もすべて天然の温泉湯である。

国道沿いにある町営浴場が一番大きいのだが、町の人だけでなく、車で通りかかる人たちも一風呂浴びていく。だ

から、いつも大人たちで混雑しているので、子供たちには不評なのだ。

「竹原湯なら、風呂の後で海ば見に行こうか」と、春雄がチョウジに語りかける。

竹原湯は街の端、海岸に一番近い場所にある。

「うん、久ぶりやけん開閉橋ば見たかね。潮が上がっとればよかとばってんね」

「うん、そうやね。ばってん潮が退(ひ)いとれば貝が取れるたい」

不知火海(しらぬいかい)が複雑に曲りくねって、幾つもの入り江となっているこの付近では、干潮と満潮の差が六、七メートルもあり、船が入ってくるのも満潮の時だけである。干潮のときは、船着場に太いロープでしっかり繋留された船は、斜めに傾き、今にも倒れそうな格好で、船底を見せている。

潮が堤防一杯まで上がる満潮も、見渡す限り砂浜になってしまう干潮も、春雄たち山育ちの子供にとっては、珍しくて飽きない景色なのだ。

「駅ば過ぎたけん、もうすぐ降りるたい。忘れ物んばせんごと、準備しんさい」

前の席から、いつもの口煩い登美子の声が聞こえてきた。ウトウトしながら、青々とした海の夢を見ていた春雄は、やっと我に帰った。昨夜もあまり眠っていないから、まだ頭がボンヤリしている感じだ。

バスは町の中心部にある、欄干から橋桁まで濃い青色に塗られた大きな橋の手前で止まった。小さな町には不釣り合いな、歩道まで付いた立派な橋である。夕方になると芸妓さんたちが、川の両側の温泉旅館に呼ばれて、カラン、コロンと駒下駄の涼やかな音を立てて行き交う姿が見られる。

湯の上川を隔てて、北と南に温泉旅館が立ち並ぶため、宿から流れ出る湯水が暑苦しい湯気を立て、小砂利だらけの川面に流れ込んでいる。

古市小学校三年生一行は、さすがに人通りも絶えた、真昼の日差しが照り返すコンクリート道を、行儀よく一列に並んで町外れにある竹原湯まで突き進んでいく。

竹原湯は、付近の旅館が駐車場代わりに使っている空き地の真ん中に、ぽつんと一軒だけ建っている。木造平屋の建物で、玄関を開け、少し広くなった板場で湯銭を払うと、右に男湯、左が女湯の入り口になっている。

いつも番台に座っている四十過ぎのおばちゃんは、チョウジと同じ松野集落から嫁いできた人で、春雄たちが顔を見せると、いつもニコニコと嬉しそうに迎えてくれる。

「おばちゃん、こんにちは。みんな同じ学級の子よ」

登美子が代表して、他所行きの、ぎこちない言葉で挨拶をする。

「登美ちゃん、久しぶりやねえ。あら、チョウジ君も一緒ね。あんまし勉強ばせんで、遊んでばっかりの子供たちやね」

「そげなことはなか！　時々はちゃんと教室で勉強もするたい」

登美子は、口を尖らせて言い訳するが、〈時々〉と言うのは何だか可笑しい。

「うちの学級は、毎日ちゃんと先生の言うこと聞いて、教室で勉強しとるたい」

夏子が後ろから、少し威張ったように言い放つ。春雄は夏子の頭を押さえつけた。どうやら、チョウジのナイフ事件は、古市の外にも大分広まっているらしい。

「一年生は、毎日学校に出て来るだけでよかとたい。・・・まだ何も悩みが、なかもん」

登美子が、お姉さんぶって夏子を抱き寄せる。三年生でも、そんなに深刻な悩みことがある筈はないのだが。

「さあさあ、暑くて汗ば大分かいたやろう。今日は男湯も女湯も空いとるから、早よう入りんさい」

おばちゃんにせき立てられ、子供たちは左右に分かれて風呂場に駆け込む。

春雄が脱衣所を覗くと誰もいない。衣類を入れておく竹籠は一つだけ誰かが使っている。湯垢に汚れて、曇ってしまったガラス戸の向こうから、年寄りの浪曲を唸っている声がワーンと響いてきた。

「春ちゃん、早よう入ろう。汗でベトベトたい」とチョー

ジが隣で服を脱ぎながら、弾んだ声で言う。

「うん、すぐ行くけん」

服を竹籠に放り込んで、湯船の入り口を開けながら後ろを振り返ると、恵一がモジモジしながら服を脱いでいる。きっと、こんな古臭い共同風呂には、入ったことがないのだろう。春雄は気を使い、知らぬ顔をして風呂場の湯気の中に駆け込んだ。

「こら！　坊主どもが、よう体ば洗うて静かに入れよ。静かにしとれば、おじさんが浪花節ば聞かしてやるけんな」

開け放った窓を背にして、薄暗いシルエットでも五十を過ぎていると分かるような、暗くて厳つい顔の男が睨みつけてくる。短く刈り込んだ頭に、薄汚れた手ぬぐいを載せている。

大体、こんな昼間から風呂に入っているような大人は、まともな人は少ないのだ。春雄は恐々と男のほうを見ると、肩から腕の半分まで、オドロしい蛇の絵の刺青が彫ってある。きっと、怖い商売の人だろう。

春雄は青年団の兄さんたちが、町には芸者さんや飲み屋が多いから、ヤクザ者も多い、と、話しているのを聞いたことがあった。だが、本物の刺青を見るのは初めてだった。春雄たちは、そうっと、少しずつ刺青おじさんから離れていく。

「おい、そげん怖がらんでよか。こら、前の方に並ばんかい。

今から、〈石松三十石船〉のよかとこば聞かしちゃる。虎造やぞ」

三人は言われた通りに、刺青おじさんの前の湯船に並んで座る。まるで、イガグリ頭のかぼちゃが三個、風呂の中に浮いているように見える。

刺青おじさんは、威儀を正して、体を揺すりながらうなり始めた。

「べん、べーんべんべん、いよっ、おうー」

口三味線を唸り始めた刺青おじさんは、目を閉じて、もう完全に自分の世界にはまり込んでいる。

「秋葉路やぁー、枳殻花（からたちばな）の茶の香りぃー、流れも清き大田川ぁー・・・・」

風呂場に、刺青おじさんのどら声がワーン、ワーンとこだまする。子供たちには、台詞もよく理解できないので、何所が虎造に似ているのか、見当も付かない。が、とにかく、刺青おじさんの石松は、どんどん進行していく。春雄たちは、緊張と湯の暑さで、だんだん頭が痛くなってきたが、身じろぎ一つ出来ない。

「お前の正直にぁー、馬鹿が付くぅー。・・・お釈迦様がついた嘘は、方便でぇー・・・・・」

石松が、清水の次郎長宅を早立ちする頃には、三人はもう汗びっしょりでフラフラだったが、浪曲はやっと金毘羅代参の名場面へ掛かったばかりだ。

春雄がそっと刺青おじさんの顔を窺うと、もう自分のヤクザ人生と、浪曲の石松との区分が付かなくなり、夢うつつで顔を真っ赤にして、思いっきり声を張り上げ唸り続けている。

「八軒屋から船に乗りぃー・・・・・」

やっと石松が大阪に帰り着き、三十石船に乗り込む場面に差し掛かると、さすがの刺青おじさんも声が出なくなり、湯船に倒れこんでしまった。

「あっ、おじさんが倒れたばい！　死んだかも知れん、早よう、おばちゃんば呼んで来るばい」

春雄は慌てふためき、裸で番台に駆けつけおばちゃんに報告する。

「又、源三さんか、困った人やねえ。大丈夫、ただの湯当たりたい。浪花節ば唸ると、いつものことたい」

おばちゃんは慣れた調子で湯船に入ると、刺青の源三おじさんを抱き起こして洗い場に横たえる。よく見るとおじさんはかなり小柄で、おばちゃん一人で楽々と運べるのだ。歳もどうやら、六十は越えているように見える。最初は恐ろしい男に見えたが、よく見ると顔は皺だらけだし、肌の色も衰え始めた、寂しい老人の姿だった。

「放って置けば、そのうち元気になるばい。大丈夫、大丈夫、気にせんで湯に入りんしゃい」

おばちゃんは大して気にする風もなく、番台に帰っていく。

「おじさん、息ばしとっとね？」

三人は、おじさんの傍に恐々と近寄り、そっと様子を窺う。まだ、茹で蛸みたいに真っ赤に染まった顔から、微かに息を吸い込む音が聞こえてくる。あまり陽の下で働かないせいか、刺青を彫ってない部分の肌は真っ白だ。だが、今は蛸のように真っ赤に茹で上がり、背中の刺青の大蛇の頭が、異様に浮き上がって見える。

「俺(おい)たちより、大分前から湯に入っとったけん、湯当たりしたとやろ」と、春雄は医者になったような顔で診断を下す。

「凄か声ば、張り上げとったもんね。俺も、まだ頭がグラグラしとる」

チョウジの体も、真っ黒に日焼けした肌が、赤黒く火照っている。

「何の浪曲か分からんけど、なんか迫力があったね」

やっと、普段の状態に戻った恵一が、ほっとしたような声で囁く。まだ、唸りながら時々睨みつけてきた、刺青おじさんの顔が恐ろしいのだ。

「まだ、蝉が鳴いとるばい。山に帰る皆(みんな)に、はぐれてしもうたんやろか」

風呂場の向こうは、夏草が蔓延(はびこ)る狭い庭の先が目隠しの高い板塀になっている。その外側には桐の大木が、二本植えてある。二、三匹のアブラゼミが桐の木に取りつき、夏の初めよりだいぶ弱った声でジイーー、ジイーーと、泣き続けている。

三人は窓を開け放ち腰まで湯に浸かりながら、窓辺に顔を並べてアブラゼミの姿を探したが、高い板塀と生い茂る桐の葉に隠れて、見付けることが出来ない。

「もう、夏も終わるのに、可哀想な蝉やねぇ。・・・まだ、家族ば探しとるのやろか？」

昆虫や植物のことなら、何でもよく知っている恵一が、なんとも寂しそうな声でつぶやく。三人は黙って、今年最後の蝉の声に聞き惚れている。喧しいと思った蝉の声だが、こうなると惜しい気がする。もう来年の夏までお別れなのだ。

春雄たちの赤く火照った体を、ぬるくて気持ちのよい微風が、スウーと、通り過ぎてゆく。汚れた手拭を頭に敷いて、おじさんは真っ裸で洗い場に横たわり、気持ちよさそうにスースーと寝息を立て始めていた。湯船から溢れたお湯が、おじさんの刺青を洗い流すように、洗い場の床を流れてゆく。

隣の女湯からは、登美子たちが騒いでいる喧しい声が、蝉の声を打ち消すように春雄たちの方まで響いてきた。

春雄たちは竹の湯を出て、湯の上川沿いの堤防に腰掛けている。まるで電線に並んだスズメのように、きちんと間を置いて一列に並んでいる。

「暑かねえ、汗がまだ出るたい」

「ばってん、風が吹くと気持ちんよかがね」

「やっぱり、温泉な寒い時期のほうがよかたい」

皆は勝手なことを言いながら、汗が退くのを待っている。石垣で組まれた土手には、僅かながらも草花が伸びており、カワラハハコグサの地味な白い花が、一面に咲いている。土手に沿って何匹ものナツアカネが、真っ赤な胴体を震わせて飛び交って行く。

竹原湯の少し上流には、歩行者専用の、紅色に塗られた半円型の木橋が掛かっている。温泉客が、湯の上川を渡るために設けられた、観光用の〈太鼓橋〉である。まだ陽は高いのに、少し酔っているような浴衣姿の客とともに、華やかな座敷着の芸妓（げいこ）が川向うから渡ってくる。昼の座敷に呼ばれたのだろう。

何だか楽しそうに笑い合っている芸妓を見て、春雄は違う世界に生きている人のようだと思う。古市では決して見ることのない光景に、他の子供たちも黙って興味深げに眺めている。ナツアカネの大群だけが、何事もないかのように、太鼓橋の下をスウーッと通り抜けて行く。

「きれいか人やなぁ、早よう大人になって、あんなきれいか人と歩いてみたかぁ」と、春雄が小声で隣のチョウジに囁く。

春雄の声を聞きつけ、二つ隣に座っている登美子が、濡れた手ぬぐいを投げ付けてきた。

「春ちゃんみたいな、色気付いた子は置いといて、町に買い物に行くバイ」

春雄とチョウジの二人を置き去りにして、登美子たちは町に向かって太鼓橋を渡っていく。二人は仕方なく、又渡って来るかもしれない芸妓(げいこ)を待っている。

「春ちゃん、なかなか来んねえ。・・・やっぱぁ、夕方にならんと駄目やなかと？」

チョウジが、まだ汗が退かない顔を橋に向けたまま、情けないような声を出す。

「うん、そげんたい。・・・潮も上がってきたけん、船が通るやろうから、開閉橋ば見に行こうか」

湯の上川を少し下ると川幅がいきなり広くなり、もう不知火(しらぬい)海に続いている。ちょうど海と川の境に掛かるのが、開閉橋である。普段は何処にでもある、人や車が往来する為の橋だが、満潮時には貨物船や漁船が河口の港に入れるように、青く塗られた真ん中の木造部分が跳ね上がる仕組みになっている。

「木材ば積んどる船が多かばってん、どこから来るんやろか」と、チョウジが春雄に聞いてくる。

「ずっと南の方の国から、運んで来るんたい。赤道の付近には、ラワンとか言うて、大きな木が一杯生えとるげな」

春雄は知ったかぶりして、チョウジに教えてやる。なに、ついこの前、父親と話していた森林組合のおじさんの受け売りである。そのときの話では、外国の木材が入り始めたため、この辺の木材は高すぎてなかなか売れなくなってい

るらしい。

「ふーん、こんな木も外国から運ぶんやねぇ。俺いも、大きくなったら外国に行って見とうごたる。春ちゃんも一緒に行かんね」

「うーん、あんまし船には乗ったことなかけんなぁ。まだ分からん」と、春雄は正直な感想を述べる。

「船はよかね、世界中、何処へでも行けるもん・・・」

チョウジは、腰掛けている堤防のすぐ足元まで、波が打ち寄せて来るのを暫く眺めていた。が、ふと顔を上げ、ずっと先の夕陽に染まり始めた黄金色の海を、眩しそうに見つめ始めた。

穏やかに上げてくる潮に乗って、青色や赤色の小魚の群れが堤防の近くまで寄ってきた。まるで揺れ動く波が、海の中の花園から花々を摘み取り、愛しそうに懐に抱いて運んできたように思える。海底の砂地までが鮮やかに見える、透き通るような海中を見ていると、次第に海に引き込まれそうな気分になる。

だが、押し寄せてくる波の上をよく眺めると、枯れ草や海草に混じり黒く変色して、ぼろ屑と見紛うような猫の死骸が浮いている。狂い死にした猫が浜に打ち捨てられ、上げ潮に乗り運ばれてきたのだろう。十二時間毎に、限りなく繰り返す満潮が運んでくるものは、幸せだけでなく、目を背(そむ)けたくなる、無残な死をも含んでいるのだ。

この遥か彼方の海から、湧き出るように押し寄せ、何もかもを飲み込み、そして融合させてしまう満潮も、あと六時間後には干潮を迎え、何もかも運び去ってしまい、やがて何事もなかったように見渡す限りの砂浜に変わってしまう。

九州本土と天草諸島に挟まれた、出入り口の狭い不知火海が自然に生み出す、この地方特有の激しい潮の満ち干きは子供心にも不思議でならなかった。

この時の春雄には、チョウジが、二十歳前に船乗りとなって外国に出てしまい、二度と故郷に帰らなくなるとは、まるで想像することも出来なかった。だが、大人になったとき、遠い海の彼方の風景を見つめ続けていた、チョウジの一番輝いていた顔を、今も時々思い出すことがある。

第三章　三年生　秋

二学期が始まったが、まだまだ焼きつくすようなぎらぎらとした陽射しは続いている。春雄は夏子を連れ、汗をびっしょり掻きながらダラダラとした足取りで、毎日毎日、学校までの緩やかな坂道を登っていく。

ケイコ先生は春雄たちののんびりした気持ちとは裏はらに、何とか遅れている学習の進度を取り戻そうと懸命である。チョウジはときどき仲間と教室を抜け出て裏山に遊びに行くが、教室にいる限りはおとなしくなった。と、言ってもほとんど居眠りしているだけなのだが・・・。

ケイコ先生から、二学期も学級委員を命じられた春雄と登美子は一学期同様にクラスの雑用に追われていた。それでも春雄は、学校が終わったあとの、遊びの計画に夢中の毎日である。

やがて山々は一年で最も楽しみな、山の神々の贈り物である、おいしい果物がたわわに実る深々とした秋色に変わっていく。

「あっ、春ちゃんや、うちも一緒に帰るバイ」

登美子たちと一緒に、西に傾き始めた陽射しを反射して、白く焼けた校庭を横切ったところで、夏子に目ざとく見つけられた。まだ、青々とした葉を纏っている桜の木の下で、一年生の友達と生垣に飛んでくるトンボやチョウを見つけて、眺めていたらしい。

「今日は、家に早く帰る用があるけん、夏ちゃんは、後からゆっくり帰ってくればよかたい」

春雄は、健二と遊ぶ約束をしていたので、今日は早く帰りたかった。健二が飼っているウサギに子供が生まれたので、見せて貰うのだ。子ウサギが丈夫なようなら、一羽分けて貰うつもりだった。

「そげんこと言わんで、一緒に帰ってやらんね。夏ちゃんはまだ一年生やけん、優しゅうせんと駄目たい」

「そうたい、こげん小さか子ば一人で帰したらいかんよ。おどっぱすなことば言うと、ケイコ先生に言いつけるばい」

登美子と良枝が次々に攻撃してくる。こういう時に備えて、夏子も日頃から登美子に懐いているので、すぐ助け舟を出してもらえる。何だか、最近大騒ぎになっている安保問題とかの、日本とアメリカの関係に似ている。女の子たちの総攻撃を受けて、春雄はとうとう白旗を揚げてしまう。

「そんならよか、一緒に帰ってやるけん！　夏ちゃん早よ帰ろ」

春雄は乱暴に夏子の手を掴み、引き摺るように早足で歩

き始める。

「春ちゃん、おどっぱすやねぇ。そげん、急がんでよかやろ」

夏子は引っ張られて、痛くなった手を振り解き、睨みつけて反抗する。だが、その目は悪戯っぽく笑っている。春雄はこの頃、（子供でも女は怖いし、世渡りに長けている）と腹の底から思い始めていた。

「今日は、健二君とこのウサギば、見せて貰う約束たい。夏ちゃんも連れて行くけん、早よう帰ろうや」

「うん、ばってんがウサギは、逃げんやなかね。こげん暑いけん、ゆっくり帰ってもよかたい」

たしかに、まだまだ陽射しは強く、焼け付くように道路の砂利を照り返している。道端の草木もげんなりした様子で、枝葉を垂れ下げているが、所々に残っているマンジュシャゲの真紅の環花だけが、妖艶で強烈な生命を燃え上がらせている。

二人が流れる汗を拭きつつ、とぼとぼ歩いて高橋までの長い道のりを下っていると、二、三台のトラックが、土埃を巻き上げて凄いスピードで通り抜けていく。上流の何処かで大きな工事でも始まったのか、この頃よく車の往来を見かける。春雄と夏子は、道路の一番端まで避けてやり過ごしたが、体中が埃まみれである。

日本の経済がだんだんと復興するにつれて、何もかもが忙しくなる世の中の勢いが、こんな山深い村までもう及び

始めている。大人たちは、色々収入も増えると喜んでいるが、子供たちにとっては大きな迷惑である。

「危なかねぇ、歩く人んことば、少しも考えんとやろか」と、夏子が、土埃を白粉のように振り掛けた顔で、大人みたいに文句を言う。

日焼けした真っ黒な顔が、汗と埃が混じりあい斑になっている様子は、水俣の町に時々廻ってくる、サーカスのピエロに似ているようだ。

「酷かなぁ、もう少しゆっくり走ればよかとに。これじゃ虫も草も木も、其のうちに皆埃まみれで死んでしまうたい」

「うちの母ちゃんたちは、日雇いで金が入るち喜んどるばってん、夏子は埃だらけん所に住みとうなか・・・」

「お金は大事だばってん、美しか山や川が、どんどん汚くなるのは嫌やなぁ。ほんと、夏ちゃんが言う通りたいなぁ」

又、一台トラックが登ってくる。二人が道路脇の畦道に避けてトラックを待っていると、スピードを緩めることなく砂利を跳ね上げて、猛然と通り過ぎていく。春雄と夏子は道路脇の小石を掴み、トラックの後に投げつけた。

春雄には、まだ世の中に仕組みはよく分からない。だが、物事が動くと善いことばかりでなく、裏には必ず悪いこともあるような気がしていた。メンコ遊びと同じで、勝つ子もいれば、負ける子もいるのだ。善悪の裏表の大きさが半分ずつだからこそ、世の中のバランスが取れているのだろ

う。と、ぼんやりとだが大人になった気分で考えてみた。
「春ちゃん、うちらを子供だと思うて馬鹿にしとるねえ。危なかトラックたい！」
「夏ちゃんも、一人で帰るときは気をつけんと行かんね」
「一人では帰らんもん、春ちゃんが送ってくれるんやろ。一年生には親切にせんと、ケイコ先生か登美ちゃんに言いつけるバイ」
春雄は夏子の頭を叩いてやりたくなったが、本当に言い付けられそうなので、黙って歩き始めた。

「健ちゃん、居るんかぁ？」
春雄が玄関に立ち、間延びした声で呼ぶと、モンペ姿のまま手ぬぐいで汗を拭き拭き、健二の母親が出てきた。たぶん、畑仕事から帰ったばかりなのだろう。
「あ、春ちゃんね、あら、夏ちゃんも一緒に来たとね。健二は、裏のウサギ小屋に居るたい。ほんにあん子は、この頃ウサギに掛かりっきりで、ちっとも家の手伝いばせんとよ。春ちゃん、全部貰ってくれてもよかとよ」
健二の母親は村でも一番の働き者で、いつも、畑や田んぼに出ている。健二もいつもは、母親にくっ付いて手伝いをしているときが多い。だから、春雄と家が近くても、なかなか遊ぶことができないのだ。
「おばちゃん、本当にウサギば貰うてよかとね。貰うたら、

大事に育てるたい」と、春雄は、嬉しさいっぱいの顔で答える。

「おばちゃん、うちも貰うてよかやろか」と、後ろに居た夏子も、前に出てきて名乗りを上げる。

「夏ちゃんも貰いたかとね。でも育てるのが面倒ばってん、よかね？」

「うん、毎日ちゃんと餌ばやるけん、大丈夫たい。うちが忙しか時は、母ちゃんに世話ば頼むもんね」

「そげん、人に頼ったらいかんよ。生き物ば飼うときは、自分で責任持って世話せんと、すぐ死ぬんよ」とおばさんは真剣な顔になる。

夏子は、おばちゃんに諭されて、珍しくしょんぼりしている。いつも誰かに甘えてばかりいるから、丁度よい小言になるだろうと、春雄は保護者でもないのに、後ろで大きく肯(うなず)いている。

「健ちゃん、ウサギば見せてや」と、春雄と夏子は家の裏に作ってあるウサギ小屋を覗く。

小屋といっても、一坪ほどの広さの三方を古板で囲い、屋根はトタンを打ち付けただけの、簡単なものである。入り口のある正面は金網を張ってあり、中の様子が見えるようになっている。健二は小屋の中でうずくまって、子ウサギの入っているみかん箱を眺めている。

春雄がもう一度声を掛けると、振り向いてニコッと笑った。

「春ちゃん、入って来んね」と、入り口の戸を空けてくれる。

「うん、ばってん狭かね。・・・子ウサギは驚かんとやろか？」

春雄と夏子は恐々（こわごわ）と小屋の中に入る。床には藁を敷き詰めてあり、板塀の角にみかん箱が伏せてある。よくみると、みかん箱の表側に二十センチほどの四角い入り口が切ってあり、その中でウサギの親子が寝そべっている。ウサギのねぐらだ。

「春ちゃん、子ウサギが四羽居るたい。触ってよく見んね」

健二が手をねぐらに突っ込むと、親ウサギが一羽飛び出してきた。大きな耳をピンと立て、赤い目をきょろきょろさせながら、小屋の中を敏捷（びんしょう）に走り回る。ふと、止まったかと思うと、餌箱の野菜を猛烈な勢いで食べ始めた。明るいところで見ると、毛は少し汚れているが白くて長いのが、この時期には不要なくらい密生している。飼いウサギなので、野山で見かける野ウサギより、大分大きい。

「春ちゃん、毛が少ないばってん、凄う柔らかかよ。猫より暖ったかいたい。見んね、見んね、うちの顔ば見て笑うとる」と夏子が呼ぶ。

夏子は、ウサギを直接触ったのは初めてなので、ウサギの迷惑も考えず、目を輝かせて撫で回している。ウサギが笑うとは変だが、確かに口をもぐもぐ動かしている顔付きは、人懐っこいものだ。

「健ちゃん、一羽貰ってよかね。大事にして育てるけん」

春雄は、どうしてもウサギを飼いたくなった。牛のような大きなものでなく、自分でも責任もって世話できる、小さな生き物が欲しかったのだ。決して可愛らしいからでなく、生き物と一緒に暮らす空間と時間を持ちたかった。

「うちも欲しか！　健ちゃん、一羽貰えんやろか」と、夏子も言い出す。

「夏ちゃんには、まだ無理たい。毎日毎日、朝と夕方にはいっぱい餌ば食うけん、世話が大変やもん。腹が減れば、藁でん、板でんみんな齧ってしまうたい」

健二は笑いながら、入り口付近の板塀を指差す。たしかに、板と柱が大分齧られたみたいで、穴が開きそうになっている。

「そんなら、春ちゃんが夏子の分も一羽貰うたらよかたい。うちも時々餌ば持って行くけん、一緒に育てればよかもんね」と夏子が勝手なことを言い出す。

「うん、春ちゃんが一緒に育ててくれるんなら、そいでよかばってん。春ちゃん、どうすっと？」

「俺(おれ)いも、まだ母ちゃんに、ウサギば貰うことは話しとらんけん、・・・二羽は無理のごたる」

「一羽も、二羽も一緒やなかね。ウサギ小屋ば作るとき、すこし手伝うけん、よかやろ」

春雄は、とても健二の小屋のような、立派なものは作って貰えそうもないし、まして夏子の手伝いも、邪魔になるばかりで要らないと思った。が、珍しく真剣な夏子の顔を

見ていると、邪険にはできなかった。

「うーん、母ちゃんがよかち言うたら、二羽貰うてもよかばってんが・・・」

「おばちゃんは、優しかけん大丈夫たい。春ちゃんが、毎日、ちゃんと言うこと聞いて、勉強もすれば許して貰えるたい。ねっ、頑張ればよかたい」

夏子は、自分勝手な理屈で春雄を説得に掛かる。大人になったら、手の付けられない女性運動家に成るのかも知れない。春雄は何とも言えない、うんざりした顔で、走り廻るウサギを眺めていた。

「春ちゃん、夏子のウサギはこの子に決めたばい。一番小さかばってん、顔つきが賢そうやし、毛も真っ白で可愛いかと。夏子に似とるもんね。健ちゃん、これよかろう、ねえ」

何処(どこ)が似ているのか？　―― 春雄と健二には全く判らないが、もう逆らう気にもなれなかった。健二は、ふと、そのうちに全部の子ウサギが夏子に持っていかれるような、不安な気持ちが胸の奥から湧き上がってきた。

「うちのウサギ、もう大きゅうなったね？」

後ろから、夏子のウキウキした声が聞こえてきた。春雄の、いや夏子のウサギも一緒に貰ってきてから、もう一月が過ぎていた。

春雄はあれからすぐ、両親にウサギを飼ってくれるよう

頼んだが、最近は家の手伝いもサボっていたので、なかなか許して貰えなかった。これからは、必ず手伝いもするし宿題も忘れないと、何度も何度も確約して、やっと小さいウサギ小屋を作って貰うことができたのだ。

「うん、もう毛が大分長うなったけん、よう餌も食べとるたい」

「そんなら、夏子のウサギにも、名前を付けんといかんね。何にしようか‥‥そうたい、春ちゃんが大事にするごと〈トミコ〉ち、付けようかね」

「そげん名前はいかんたい！ 紛らわしかけん、困るやろが」

「春ちゃん、なんば慌てとるとね。夏子のウサギやけん、どげん名前ば付けようと勝手たい、そげん〈トミコ〉ち名前な嫌いね」と、脅しを掛けてくる。

夏子はウサギの所有権を主張するが、小屋を作るときも手伝わなかったし、たまにニンジンや道端の草を持ってくるだけである。小屋の掃除や、朝晩の餌の世話は全部春雄の役目なのだ。

「ばってん、母ちゃんたちにも、夏ちゃんのウサギとは言うとらんもん。皆が変に思うがね」

「春ちゃんと、二人だけの秘密でよかがね。そうやねえ、登美ちゃんには教えとこうか？」

「そげんこつ、せんでよか！‥‥何言われるか分からんぞ」

春雄は、ある考えを思い付いていた。これから登美子に

意地悪されたら、帰ってからウサギの〈トミコ〉に毒づけばよいのだ。

（こらっ登美子！　悪さばっかりしてからに、もう少しおとなしゅうせんと、餌ばやらんぞ）

（登美子！　そんな喧しかことばっかり言うとると、大きゅうなっても嫁に行けんぞ）

（登美子、なんば威張っとるか！　女のくせに生意気だぞ。少しは優しゅうならんか）

―― 子ウサギが、実はオスなのを、春雄はまだ知らない。

春雄は、いく通りかの悪口を腹の中で呟いてみて、何だか嬉しい気分になった。ウサギには気の毒だが、これは中々気分がいいぞ。と、ニヤニヤしているのを、夏子が覗き込んできて、不思議そうな顔をしている。

「春ちゃんどうしたんね、一人でなんば笑うとっとね。夏が暑かったけん、頭が変になったんじゃなかろうね？」と、悪態をつく。

春雄は、ついでに〈ナツコ〉という名前も付けて、毎日、悪口を言おうかとも思ったが、取り敢えず〈トミコ〉で我慢することにした。

牛小屋の裏にある物置を、少しだけ片付けて作られた、一メートル四方ほどの粗末なウサギ小屋では、人間たちの思惑など知らぬ顔で、二羽の子ウサギが頭を寄せ合いながら、仲良く野菜くずを齧（かじ）っている。

「夏ちゃんのウサギは、元気がようなってきたばい。もう少しで俺いがウサギより、大きゅうなるかも知れんなぁ。もう少し大きゅうなったら夏ちゃんの家に、小屋ば作って貰わにゃいかんたい」

「そげん、余計なことば心配せんでよか、こげん仲良うしとるのに可愛そうじゃがね。こんままにしといた方がよかたい」

「そげん言うても、何時までもこん中じゃ狭かろうたい。どんどん大きゅうなるけん、きっと早う走り廻る場所が欲しかったい」

「春ちゃんたちの学級の子は、勉強もせんで校庭ばかり走り廻っとるけんね。春ちゃんのウサギも、飼い主の真似ばすっとやろか？」

春雄は夏子をウサギ小屋に放り込み、ウサギの餌にできる日のことを夢見て、やっと我慢した。夏子は実を言うと、母親にも子ウサギを飼っていることなど、まだ言っていないのだ。まして、春雄の小屋で世話までさせていると知ったら、きっとひどく怒られるだろう。

ウサギ小屋の庇（ひさし）の上では、柿の実が薄赤く色付き始めている。一枚、二枚と、黄色く枯れ始めた葉が風に吹かれては枝を離れ、ゆらゆら舞い落ちてきた。日差しが翳（かげ）ると、半そでシャツでは肌寒いくらいの気候になっていた。

二学期も半ばが過ぎ、忙しかった稲の刈り取りもやっと済んで、村も落ち着きを取り戻していた。

「春ちゃん、今度の日曜日にお祭りに行かんね？」

昼休みに、校庭でドッジボールで遊んでいるとき、登美子が声を掛けてきた。

「何処の祭りね」と、聞き返す。

この村では、取り立てて大きな秋祭りはない。

「町にある、お諏訪さんの祭りたい。春ちゃんは、行ったことなかと？」と、少し驚いた顔で、春雄を校庭の隅に引っ張っていく。

湯の上町には、この地方の鎮守である諏訪神社がある。子供たちには、社の謂れは勿論分からないが、かなり古いらしく壮麗な建物である。春雄は、正月にはよく父親に連れられてお参りに行くが、秋祭りは経験がなかった。

「人が一杯出るとやろ、子供だけなら母ちゃんが許してくれんもん」

「大丈夫や、ケイコ先生も一緒に行くとたい。ばってん、あんまし人数が多くなると、先生も面倒ば見きれんけん、春ちゃんとうちだけば誘うたんよ。だけん、みんなには内緒たい、絶対に黙っとるとよ」

登美子は、校庭隅の一番大きな桜の木陰に春雄を連れて行き、桜にも聞かれたくないのか、囁くように声を落として打ち明ける。

「うん、そんならよかたい。俺いも、一緒に連れて行って貰うばい」

「あんまし、喜び過ぎたらいかんよ。春ちゃんは単純やけん、すぐ顔に出るけんね」

春雄は、今日家に帰ったらウサギの〈トミコ〉に向かって、悪口を腹いっぱい言うことに決めた。

ケイコ先生とは駅前で待ち合わせることにして、登美子と春雄は昼のバスに乗った。この前、温泉に行った時と同じバスだ。当然ながら運転手も車掌も同じ組み合わせだ。

「日曜日ばってん、あんまし乗っとらんね」と、声を掛ける。

春雄は、一番後ろに座っている登美子を見つけ、バスの揺れに合わせてよたよた歩き、やっと座席に辿り着いたのだ。

「知っとる顔の人は、あんまし居らんね。空いとるけん、よかっとたい」と、話しているところに車掌さんが尋ねてくる。

「登美ちゃん、今日は日曜日やけん、彼氏とデートね」

「彼氏じゃなかもん！　今日は先生と一緒に、秋祭りに行くとたい」

折角この一週間の間、二人だけの秘密にしてきたことを、登美子が大声で公表してしまう。春雄は、今朝訪ねて来た夏子にも一切言わなかったので、機嫌を損ねてしまったほどだ。

春雄には、登美子がなぜ怒るのか、まだよく分かっていない。子供心に、女の子はなんだか複雑なことを言う、と思っているだけなのだ。

登美子は、駅前に着くまで黙ってしまい、そろそろ枯葉で彩を変え始めた、山や里の美しい景色をぼんやりと眺めていた。

「登美ちゃーん、春ちゃーん、こっち、こっちたい。こっち」

ケイコ先生は、黒のセーターに白っぽい上着を付け、長い足には茶色のスカートが纏わりついている。春雄は、人違いしたかのように、一瞬驚いている。頭にかぶった薄茶色の帽子を外したので、初めてケイコ先生だと分かり、眩しそうに見上げ、そして顔を赤らめた。

「先生、こんにちは。今日は本当に嬉かよ、ずっと一緒でよかとやろ」と、登美子はケイコ先生にしがみ付き手を握る。

「先生は、バイクばここに置いとくからよかばってん、登美ちゃんたちは、最終バスに乗り遅れんごとせんとね」

「うん、最終バスで帰るけん、時間まで一杯遊ぶたい。春ちゃん、よかよね」

ケイコ先生に手を引かれた登美子と、後ろからお供のように付いている春雄たちは、町の外れにある諏訪神社に向かって歩き始める。春雄と同じ年頃の子供たちが、二、三人連れ立って前を歩いている。声高に笑い合っているところを見ると、やはりお祭りに行くのだろう。

「春ちゃんは、何か見たいものがあるとね？・・・なんか今日はおとなしいね、遠慮しとるんじゃなか？」

ケイコ先生が春雄を振り返って、にこやかに笑う。帽子の陰になっている大きな目が、幸せ一杯な気持ちで輝いている。何か嬉しいことがあったのだろう。

「春ちゃんは、お諏訪さんの祭りは始めてじゃけん、上がっとるたい」と、登美子が横から口を出し、余計なことを言う。

「まあ、だからおとなしかったんね。そんなら、はぐれんように先生の後ろに付いて居ればよかよ」

春雄は心の中で大喜びしながら、ケイコ先生のお尻と長い足を眺めながら、人波の中を必死で付いていく。何だか妙に、胸がドキドキしてきた。何しろ、あまり背の高くない春雄の頭は、先生の腰の付近までしかないのだ。

神社の参道に入ると、赤や黄、緑の派手な幟（のぼり）が両側にずらっと並び、心地よく撫でてゆく秋風と、祭りのお囃子（はやし）に誘われて、ゆったりと翻（ひるがえ）っている。ふと上空を見上げると、楠の大木の向こうには、目に染みて痛くなるような真っ青な空が、何処までも何処までも続いている。

「春ちゃん、相撲ばやってるばい。見て行くね」と、ケイコ先生が振り返る。

先生は相撲好きで、体育の時間には、子供に混じって自分も夢中で相撲を取っている。

「春ちゃんは弱いんやから、よく見て研究ばせんとね」

登美子がやけに威張って、まるで先生のように指図する。しかし、登美子に相撲で負けてばかりいる春雄は、何も言えずに肯くだけである。

境内の中央に設(しつら)えた土俵では、五、六人の子供が大きな力士に向かっている。この地方は昔から相撲が盛んで、この神社にも土俵が常設されている。本殿に登る境内の斜面には、相撲見物用の客席が段々畑のように並んでいる。大相撲の地元出身の力士たちが、いつも本場所の合間に地方巡業で廻ってくる。今日も秋祭りに呼ばれ、大人や子供を相手に稽古をつけているらしい。

「やっぱり本物のお相撲さんは、大きかなあ。体が俺いの、十倍くらいあるたい・・・なんば食うとるのやろか」と、春雄は変な感心をして、人垣の隙間から懸命に眺めている。

「何んば言うとるね、お相撲さんはちゃんこ鍋ば食べるに、決まっとるたい」

登美子は、こういうことには思いのほか、詳しいところがある。きっと大人になったら、テレビや週刊誌の話題に夢中になるのだろう。

「春ちゃんも、あん子供たちのように土俵に上がってみんね？」

土俵では子供たちが次から次に、相撲取りに突っ込み、しがみ付いて、投げ飛ばされている。

ケイコ先生が、春雄の頭を撫でながら、前のほうに押し

出そうとする。登美子も面白がって、背中をやたらに叩く。

「春ちゃん、お相撲さんにちゃんと稽古を付けて貰うと、少しは強くなるかも知れんバイ」

「登美ちゃんの方が、相撲は好きやろう。登美ちゃんが先に出ればよかがね！」

「そんなら、二人とも行きんさい。怪我せんごと、しっかり取るんよ」と、先生は情け容赦なく、二人を人垣の前に押し出す。

ぽつんと、人前に立たされた二人は、顔を見合わせ観念したように頭を垂れて、子供たちの列の最後に並んだ。

「春ちゃんがさっさと出んから、うちまで引っ張り出されたばい。・・・恥ずかしかねぇ、女の子はうちだけたい」

登美子は小声で話し掛けながら、前に並んだ春雄の頭を小突いてくる。周りの見物客たちは、女の子が始めて出てきたので、大きな拍手で迎えてくれる。子供たちは一度に三、四人ずつ土俵に上がるので、春雄たちの番はすぐに廻ってきた。

「えーい、よいしょ」と、子供たちが相撲取りのマワシや足に、必死で取り付く。

「そうれ、どっこいしょ」と、相撲取りは右に、左にと子供たちを振り払う。

土俵の上で見る相撲取りは、髷もまだ結えないような若い力士である。だが、その真っ赤で恐ろしい鬼のような顔

を見ていると、春雄には寺の門に構えている仁王様が立ち塞がっている気がした。何だか、取る前から体がブルブル震えてくる。

春雄は、恐怖を振り切るように、大声を上げて突っ込み、マワシに手を掛けようと必死に縋(すが)り付くが、簡単に土俵の隅に振り払われた。少しだけ触った相撲取りの太股が、ガチガチで岩のように堅かった。

顔を上げて土俵を振り返ると、登美子が軽々と抱えられ土俵の外に運ばれている。短いスカートが風にヒラヒラ揺れている。さすがに、女の子を投げ飛ばすことは出来ないらしい。

観客からは、嬌声と拍手の嵐が湧き起こる。春雄たちは、係りの人から褒美の飴玉をもらい、やっと人垣の外に出た。

「二人とも、よう頑張ったたい。元気よかったよ、本当によか思い出になるがね」

ケイコ先生は笑顔一杯で、両手を広げて春雄と登美子を迎えてくれた。

「先生、酷かたい。女の子はうち一人やったけん、ほんなこつ恥ずかしかったバイ。・・・お相撲さんに、子供んごつ抱えられて悔しか！」と、登美子が本物の子供のくせに、妙に大人ぶって反抗する。

「俺いも手ば擦り剥いたたい。あのお相撲さんは、ちっとも手加減せんもん」

「よかやなかねん、子供がお相撲さんに触れば、一年間は病気にならんとよ」

春雄たちの抗議にも、ケイコ先生はニコニコ笑って受け流す。

「先生、うちら一生懸命やったんやから、なんか買ってね。ねっ、ねっ、よかやろ」

登美子は、転んでもただ起きない性格なのだ。いや、転んだのは春雄だが、代わりに何とか食いついてくれる。

「よかよ、何んでん買うてやるから、もう機嫌ば直しんさい」

「うん、そんならよか。春ちゃん、出店ば見に行こうたい」

「そんなに慌てんでよかやないね。そん前に、神様にきちんとお参りばせんといかんよ」

三人は山の中腹に鎮座する本殿に向かうため、長い石段をゆっくりと登っていく。石段の両側には、幟がずらっと並んではためき、お参りに登る人たちを華やかに出迎えてくれる。

秋もだいぶ深くなったようで、本殿の周囲に植えられたカエデやイチョウの葉が、風が吹くたびに参道の石段を赤と黄色のまだら模様に塗り替えていく。

春雄が石段の途中で振り返ると、先ほどの相撲場から一段と歓声が湧き起こる。どうやら、大人同士の取り組みが始まったようだ。その向こうには、刈り取りが済んだ田圃

が広がり、無数に群れ飛ぶアキアカネの領地となって、湯の上川の辺まで薄赤く揺れ動いている。

「春ちゃんは神さんに、何んばお願いしたんね」と、登美子が小声で聞いてくる。

「うん、勉強がよう出来るごとお願いしたたい」

「ふーん、神さんにお願いしただけで、成績がようなるんなら簡単バイ」

「そんなら、登美ちゃんは何んば、お願いしたとうね！」と、春雄が少し怒って聞き返す。

「そげんこつ、人に言うたら願いが叶わんごと成るとよ」と、登美子はにこっと笑い、平然と言い返す。

「ばってん、ケイコ先生はえらく長うお願いしとるね。お賽銭ば大分入れたんやろうか」と、小声で登美子に囁く。

身構える間もなく、バシッと登美子の足が飛んできた。

「馬鹿やねえ、先生は好きな人と結婚出来るごと祈っとるとたい」と、登美子が先生に成り代わって答える。

春雄は、やっと夏休みの泳ぎ場でのことを思い出した。今日、一段と美しく、輝いて見えるのも、きっと恋人との仲が旨くいっているのだろう。春雄は、何だか先生が遠くに行ってしまう気がして、心の中の夢が、だんだんと萎んでしまった。遠くの紅葉に彩られ始めた美しい景色も、最初こそ心を奪われたが、今は冷え冷えとして、やるせない気分が満ちてきた。

出店には、イカ焼きや茹トウモロコシ、綿飴などの食べ物に混じって、金魚すくい、的当てなどの遊戯や、ヒヨコ売りも出ている。

「春ちゃんは、ウサギば飼うとるんやろ。登美子は、ヒヨコば飼うてみようかね。上手く育てて大きくしたら、毎日卵ば食べられるたい」

「登美ちゃん、ここで売っとるヒヨコはみんなオスやけん、卵は生まんたい」と、先生が教える。

「そんなら、大きくなっても潰して食べるしかないとね。オスは詰まらんね、ねっ、春ちゃん。・・・そうたい、〈ハルオ〉ち名前ば付けて、散歩のときに曳いて歩こうかね」と、春雄の顔をニッと覗き込む。

春雄はドキッとして下を向いてしまった。もしかしたら、ウサギの〈トミコ〉のことを知っているのだろうか。明日にでも夏子を黙らせなくては、と秘かに決心する。

「登美ちゃん、そんなこと駄目たい。いつも春ちゃんば苛(いじ)めちゃいかんよ。学級委員は皆の手本だけん、仲良うせんとね」

「先生、春ちゃんな飼っとるウサギに〈トミコ〉ち名前ば付けて苛めとるんよ！」

「苛めとらんよ！　ちゃんと餌も遣っとるもん。大体あんウサギは夏ちゃんの物たい」

「餌ばやりながら、うちの悪口も言うとるがね。ちゃんと知っとるんよ」と、登美子が言い返す。

春雄は、女の子の口ほど、軽くて怖いものはないことを、この年齢で身にしみて教えられた。女の口は、誰も信用できないことを、大人になっても決して忘れることはなかった。

「春ちゃんも、変なことせんで直接言えばよかがね。でも、本当にそんなことしとるんね？・・・でも、春ちゃんたちは、おかしか子やねぇ。ははは」

ケイコ先生は笑い転げている。二人も何だかおかしい気がして、下を向いて笑いあった。

もう、だいぶ薄闇が広がり始めた窓の外では、ぽつん、ぽつんと家々に明りが灯っている。バスは、ガタガタの砂利道に揺られながら、古市を目指してゆっくりと登っていく。

いつもの運転手と車掌も、さすがにこの時間になると草臥れたみたいで、ずっと無言である。春雄と登美子は一番後ろの席に、今朝と同じく仲良く並んでいる。登美子の腕には、二羽のヒヨコが泣き声も上げず、小さな箱に蹲(うずくま)っている。

「ちゃんと、うまく育つやろか？・・・死んだら嫌やねぇ。春ちゃんも、時々様子ば見に来るとよ」

登美子は、先生に無理を言って買ってもらったくせに、

もう心配らしい。登美子も、自分ひとりで生き物を飼うのは初めてなのだ。最初は誰でも、飼っている生き物を死なせてしまうことが、なにより心配なのだ。冷たくて動かなくなった生き物を、現実に目の前にした時ほど辛いことはない。

「大丈夫やろ、オスやけん強かったい。きっと、大きゅうなるとばい。俺も時々見に行くけん」

春雄は、何の根拠もなく取り敢えず励ましを言う。二人の関係を見ていると、メスの方が強そうだが、今は登美子もヒヨコに夢中で反論もしない。

「うん、春ちゃん頼むね。大きゅうなるとが楽しみたい」

春雄の集落が見えてくる頃には、もう窓の外は真っ暗になっていた。

二学期はもう終わりかけている。春雄は、期末のテストで少しだが成績を上げ、母親を喜ばせた。三年生の学級自体が、ケイコ先生のおかげで、多少は学習進度も進み、校長先生も幾らかほっとしたらしい。

もう少しで楽しい正月を迎える。長い間、出稼ぎに出ている人たちも皆帰ってくるので、村全体が浮き浮きしている。なんといっても、一番嬉しいのは家族が全員揃って過ごせることなのだ。

正月が過ぎてしまうと、もう、あっという間に卒業式と

なり、春雄たちも四年生になってしまう。春雄は、何だかさびしい気分で、寒さが増していく早朝の坂道を、夏子と仲良く背中を丸めて登っていく。

第四章　四年生　春

四年生の教室は、慣例では二階の西端となり、東奥の講堂に向かって、五年、六年と続くのだった。だが、今年の四年生は、子供の数が四十八人に増えたため、やむなく学校で一番広い、一階の真ん中の教室になった。春雄たちは、これで三年間、同じ教室である。

古市小学校は、湯の上町で最も山奥に位置するが、通学区の面積はかなり広いので、生徒数は少ないが山の倉分校を持っている。山の倉地区は、戦後の開拓事業で山地を畑地に開墾して、農業を希望する人たちに貸し与えた地域である。

山の倉集落から古市小学校までは、子供の足で約一時間も掛かるので、三年生までの低学年は分校で授業を受ける。四年生からは、古市小学校に合流するが、中学生になると隣の水俣の学校に通う。越境通学だが、湯の上中学校は距離が遠すぎて無理なのだ。

今度、春雄たちのクラスに入った、山内ゆみ子たち五人とも、六年生までの三年間しか一緒には遊べないことになる。

入学式の明くる日から、通常の授業が始まるのだが、分校からの転入生徒も居り、また先生も新しくなったので、一時間目は全員の自己紹介から始まった。

校則の注意や年間行事の説明が終わり、恒例の一学期の学級委員選挙を行うことになった。

「私は、皆さんのことはよく知らないので、この人がよいと思う人が居たら、どんどん推薦してください」

新担任の三角先生が、クラス全員の子供たちををゆっくり見廻しながら呼びかけた。

「先生、去年は山上春雄君と田本登美子さんが、ずっと続けてやって慣れているけん、今年もこのままでよいと思います」

良枝が自分たちに廻ってこないように、友達甲斐もなくとんでもない提案を平気でする。すかさず、クラスの大半が大きな拍手で賛意を表す。

「先生、そげんこた酷(ひど)かよ。本当は、一学期ごと変わるのが規則たい」

春雄は、今年からもう学級委員を遣(や)らなくてよいものだと、勝手に思い込んでいたので、慌てて反論する。だいたい去年もケイコ先生が、二学期と三学期も続けるようにと、強引に頼んだから引き受けただけなのだ。

「先生も、学級委員はみんなで交代しながら、一学期づつ

勤めるのがよいと思いますが、他に推薦する人はありませんか」

「先生、恵一君が頭もいいし、よかと思います」

春雄は、煩わしさから逃げようと懸命に提案する。だいたい、一年間やって見て分かったのは、面倒なことばっかりだということだ。

他にはとうとう立候補も推薦する人もなく、選挙で春雄か恵一を決めることになった。女の子は登美子のほかには名前も挙がらず、無投票で決定である。

選挙は、テストの余ったザラ紙を小さく切ったものに、名前を書くだけの簡単なものである。特に演説などの選挙活動は行わない。友達にお菓子を上げるような、買収工作も皆無である。

結果は、残念ながら春雄の圧勝だった。恵一は頭がよすぎるのと、古市に来てまだ一年しか経たないので、親近感が足りなかったのだろう。頭がよすぎても、時には困ることもあるのだ。頭が悪くても、あちこち廻って世話を焼くほうが、信頼されるのだ。たぶん、大人の選挙も似たようなものだろう。

「エー。静かにしてください。それでは、一学期の学級委員は山上君と田本さんにお願いします」

三角先生の宣言で直ちに春雄と登美子の正・副学級委員が決定する。これから又授業前の号令や、給食の準備でわ

ずらわしいことになる。

「それではこれから教科書を配りますので、学級委員は職員室まで取りに来てください」

春雄は、ふてくされて頬杖を付いていたが、先生の呼ぶ声で立ち上がった。そうだ、今日は四年生になって初めての授業だから、国語や算数の教科書が配布されるのだ。

「春ちゃん、重たいけん、男の人ば何人か連れて来んしゃい」

さっそく、副学級委員が正学級委員に命令を出す。あーあ、これから夏休みが終わるまで又こき使われるのだ。春雄は、心のなかでげんなりしていたが、仕方なく恵一や健二たちを連れて職員室に向かった。

「春ちゃんになってよかったたい。うちも、春ちゃんに投票したけんね」

登美子が職員室の入り口で囁いた。幾ら威張っていても、恵一にはあまり命令することが出来ないからだろう。決して春雄を信頼したのではないのだが、女は子供の頃から男を操ることが好きなのだ。

教科書は先生の後ろの棚に積まれていた。他の学年に比べて数が圧倒的に多い。

「これ全部運ぶんは大変たい、もう少し手伝いが要るんやなか。春ちゃん、誰か呼んで来んね」

春雄は教室に急いで帰り、手伝ってくれる男の子を捜した。先生が居ないので、チョウジは周りの友達と騒いでいる。

皆なで教科書を教室に運び込み、先生を手伝ってみんなに配り始めたときに異変は起きた。

先に教科書を貰って中身をめくって見ていたチョウジが、いきなり破き始めたのだ。

「こらっ！　大事な教科書ばどげんすっとか！」

三角先生もあまりの驚きに、思わず土地の言葉で怒鳴る。春雄は先生の怒りを分からず、何となく親しみを覚え始めた。

「こげん、難しか教科書は要らんたい！　みんなも破かんか」

チョウジが周りの仲間をけしかける。池谷昌男や岩淵純たちが、面白がって破り始めると、教室中が大騒ぎになった。

「教科書がなくなりゃ、勉強ばせんでもようなるもん。こげん本な要らんたい」

チョウジたちは、周りの子供の本も破り始める。みんな勉強は嫌いなほうだから、男の子たちは後のことも考えないで、面白がって破き始める。

「こらあー、みんな止めんか！席に着かんか！」

三角先生は、チョウジたちのほうに突進していった。

「はよ逃げよ、窓ば開けろや！」

チョウジ、昌男、純たち三人は裸足で窓から飛び出した。窓の下は芝生になっており、今までも昼休みにはここから

飛び降りて、校庭に遊びに行くので慣れていたのだ。

三角先生は、校庭を逃げて去って行く三人を、ただ呆然と眺めているだけである。

「しょうがない子供たちだなあ・・・・」

三角先生は、独り言を呟くと諦めたように教壇に戻り、また教科書を配り始めた。

春雄は最近チョウジが、一段と荒っぽくなったことに気づいていたが、教科書まで破くとは思わなかった。自分のものは国語と理科だけ無事だったが算数は一番に破り棄てていた。男の子の教科書はもう全部がぼろぼろである。

「先生チョウジ君たちば、探しに行かんでんよかとですか？」

春雄は心配になって聞いてみた。最初の授業の日からとんでもないことになっているのだ。去年チョウジが、ナイフを振り回して暴れたとき以来の事件なのだ。

「まあ良いだろう、どうせ昼食の時間になれば戻ってくるけん」

三角先生は教科書を配り終えて、気を取り直したように国語の授業を始めた。先生が教科書の文章を読んで、その後を子供たちが復唱していく。

教科書を破いてしまった子供たちは、仕方なく、まだ持っている子の本を見せて貰いながら、口をもごもごさせている。

「今日は天気がよいから、午後はみんな外に出て勉強しようか」

二時限目の授業が終わる前に、三角先生がみんなに提案する。やはり、このまま授業を続けるのは、何とも気が進まなかったのだろう。

「先生、外でなんば勉強すっとですか」

学級委員としての責任感からではなく、面白そうなので春雄は聞いてみた。

「学校の周りに、どんな植物が生えているか探してみれば、理科の勉強になるたい」

「先生、今ならワラビもいっぱい出とるよ」

登美子が、珍しく学級委員の立場も考えずに、遊びと実益を兼ねた提案をする。

今のワラビは美味しいので、子供たちは休日になると野山の入り摘み取る。このワラビを乾燥させ保存することで、一年を通して煮しめなどの料理に使う。だから、何処の家でもワラビ摘みは子供の大事な仕事なのだ。

家で使いきれないほど、たくさん取れたときは、町から買い付けに来た業者に売ることもある。旬の頃は、かなり高い値段で売れるので、子供たちにとって重要な小遣い源になる。春雄も、春休み中、休むことなくワラビ取りに専念したので、大分貯金を増やしていた。

「ようし、今日はみんなで裏山に昇ろう。先生も、ワラビ

ばいっぱい取って、カアちゃんば喜ばしてやろう」

子供たちは大喜びである。なにしろ教室で机に座っているのは、本当に大嫌いな連中ばかりなのだ。

小学校の裏山は岩盤が多く、あまり土壌がよくないので、スギやヒノキの植林地は少ない。去年の夏、春雄たちが除虫菊を採った畑があるのは谷沿いだ。ここだけはスギの大木が、ずっと山頂付近まで続いている。後はクヌギやクス，カシなどの自然林がずっと生い繁っているのだ。

除虫菊の畑地跡の付近には、ワラビだけでなくゼンマイやフキがよく生えている。山菜料理の材料が、まるで人工栽培でもしてあるかのように、そこいら中に美味しそうな新芽を出している。

「山内さんたちも、春休みにはワラビば取りに行ったとね」

春雄は隣の席に座っている、分校から合流したばかりの山内ゆみ子に、小さな声で話しかけた。

「うん、山の倉には、もう使うてない桑畑がいっぱいあるけん、ワラビは何処にでん生えとる」

「そんなら、山にまで行かんでもいっぱい取れるがね。よかねえ、小遣いがいっぱい溜まるたい」

春雄は羨ましそうに頷いている。籠いっぱいワラビが取れると幾ら位になるか、頭の中で懸命に計算している。春雄は、算数は大嫌いだが、こういうことには夢中になる。

「そんなこたなかよ、山の倉は車が通れんから、買い付けの業者は来んのよ。町まで担いで行かにゃいけんから、なかなか簡単に売れんとよ」

「ふーん、面倒かね。今度いっぱい取れたら、学校まで持って来とけばよかたい。業者の人が来たとき、俺いが売ってやるけん」

「うん今度取れたら持って来るけん、山上君に頼んどくバイ」

とても小学生とは思えない、農産物流通の問題を真剣に話し合っている。しかし、古市では現金収入の機会が少ないので、子供たちも自分で小遣いを稼ぐ工夫をするしかないのだ。

子供たちは勉強があまり出来なくても、生活能力はしっかり身に付けている。それも、美しい野山がもたらす自然の恵みが多いからなのだが、まだ春雄たちは理解していない。

「ああー、腹減った。今日の給食は何ね」

三角先生が言ったように、チョウジたちは給食の時間にはしっかり帰ってきた。今朝の騒ぎが、なんでもなかったかのようにニコニコしている。

「チョウジ君、何処行っとたんね。みんな心配したたい」

春雄は少しむっとして問い詰める。なんと言っても、登

美子が後ろに付いているから心強い。

「春チャン、悪かったばい。ばってん、教室より外で遊ぶとが面白かもんね」

「うちらはもう四年生ばい、教室で勉強すっとが当たり前やがね！」と、登美子が言い返す。

登美子は本当に怒っているのだ。こういう時は、非常に心強い味方である。

「教室で勉強すっとだけが、勉強じゃなかろうもん。ケイコ先生のときは、野外授業とか遠足とか、いっぱい有ったやなかね」

チョウジは、自分が悪いことは分かっているのだが、一方的にやり込められたので反発する。野外授業とは、外で植物や昆虫を観察するため、村中の集落を廻ることである。と、言っても、実態は野山で楽しく遊ぶのが目的なのだ。

「去年は去年たい。ケイコ先生も言うとったけど、うちらは他の学校に比べて、大分、勉強が遅れとるんよ。中学校に行ったとき困るばい」

登美子が強硬に詰め寄る。学級委員に、無投票で選ばれる筈である。

「教室で勉強したいもんな、残ってすればよかがね。うちらは外で勝手に勉強するとたい」

チョウジは、小学生の身分も忘れて、滅茶苦茶なことを言い出す。小学生は教室で勉強するのが当たり前なのに、

先生に代わって、勝手に授業カリキュラムを作るつもりだ。町の教育委員会の偉い人たちが聞いたら、どんな顔をするのだろうか。

「それもよかばってん。教室にも来んと欠席になってしまうばい。欠席ばっかりやと落第して、来年も四年生ばせんといかんよ」

春雄はどっちの味方でもなく、大人みたいに現実的な提案を持ち出す。案外、学級委員は適任かもしれない。

「そんなら、朝一時間目と、給食の時間だけは教室に来るたい。欠席にはならんやろ？」

チョウジも多少は譲歩する。小学生がどんな基準で落第するのか、誰も知らないのだが、やはり少しは怖いと見える。それに、昼飯の魅力にも敵わないらしい。

「三角先生に言いつけるけんね。そげん勝手なことは、先生も許さんたい！」

登美子は、どうしてもチョウジの勝手が許せないらしい。確かにこのクラスは、学習進度がかなり遅れている。生徒数が多いこともあって、先生の目が全員に届かないことも一因だろう。

しかし周りの野山を見回せば、美しく、雄大で、そして豊かな自然の恵みに囲まれているのだ。教室に縛り付けて無理に勉強させ、少しだけテストの成績が上がったからといって、子供たちにはどれほどの財産になるのだろう。

古市の子供たちや親たちも、あまり学校の勉強には興味がない。田畑を耕したり、植林地を管理したり、土木業に従事するには、あまり役に立たないと考えているのだ。それより丈夫な体と、自然のあらゆる摂理を知ることのほうを、もっと大事にしている。

「チョウジ君、午後は野外授業になったと。だけん、みんなと一緒に行こうたい」

春雄は登美子の怒りも分かるが、チョウジを仲間外れにするのはもっと厭(いや)だった。漢字が書けなくても、算数の計算が遅くても、友達と一緒に居るほうが楽しいに決まっている。

昼休みが終わると、教室に集まり賑やかに準備を始めた。摘んだ山菜を入れるため、ランドセルの教科書は放り出してしまう。男の子は、鉛筆削りのナイフをポケットに入れる。去年、チョウジの〈ナイフ事件〉で活躍した、あの肥後の守だ。女の子は観察する植物のスケッチ用に、ノートと色鉛筆を用意する。

三角先生は分厚い植物図鑑と、摘んだワラビを入れる袋を持ってきた。なんだか、先生が一番ウキウキしているみたいだ。

「古谷君たちはどうした。帰って来んかったとかね」と、先生が春雄に聞く。

「チョウジ君たちは､先に裏山に行ったと｡ノイバラが繁っとるから、通り辛いけん、鎌で刈っとくて言うとった」

「じゃ出発しようか。みんな用意が出来とるな」

五十人近い子供たちが、それぞれランドセルを背負った格好で、裏山に続く細い道を登り始めた。

チョウジたちは野草が生え始めた、古い畑地跡で待っていた。途中で道に張り出しているノイバラの枝は、通り道の分だけがきれいに切り払われていた。

谷沿いにはキブシが、薄緑色の小さな鈴を連ねた花弁を、幾条にも垂れ下げている。赤黒くてテカテカ光る醜怪な枝の先で、慎ましくて清冽に芽吹く葉と花が、一体の樹木とは思えない不思議な取り合わせに見える。

尾根筋の岩が所々に露出した付近には、アセビが薄紅色の新芽で枝を精一杯飾り立てている。可愛らしい木の葉だが、毒を持っていて、家畜の餌にすると大変なことになることを、男の子は皆が知っている。

「さあ、ここで植物の名前を調べるけん、知らない野草や珍しい花があれば、先生んとこに持って来んね」

三角先生は、植物図鑑を振りかざして子供たちに呼びかけた。さすがに、いきなりワラビ採りを始める訳にはいかないらしい。

「先生、ついでにワラビも採って来てよかと？」

登美子は植物の名前より、もうワラビが気が掛かっている。教室でチョウジに詰め寄ったときとは、言うことが大分違っている。

「うん採ってもよかばってん、生えてる様子ばノートに書いとくと、後で勉強になるたい。ノートばもって来た人は、植物の名前が判ったら、形とか色とか書いときんさい」

「はーい。行ってきまーす」

子供たちは、勝手に方々へ散って行く。三角先生は畑地跡にある、日当たりのよい平たい岩を見つけ腰を降ろし、子供たちを待っている。

「先生、こげんきれいか花がいっぱい咲いとる」

登美子や良枝たちのグループが、小さな紫色の花を手に持ってやって来た。

「何やろか、スミレとは色が違うし、花弁も繋がっとるたい」

三角先生は、花と葉の形で厚い図鑑を引きながら、何かぶつぶつ言っている。あまり植物には詳しくないらしい。

「これが似とるたい。オオイヌノフグリと言う名前らしか。何処に生えとった？」

三角先生は、図鑑を持って登美子たちの後を付いていった。

「先生、ここら辺にいっぱい生えとるよ」

良枝が指差す付近を見ると、尾根に向かう小道の脇や低い枯れ草の間に、濃い緑色の草が茂っている。よく見ると

密集した葉の先に、可憐な瑠璃色と紫色の混じった、小さな花が一面に咲いている。

「やっぱりそうたい。横に地面を這っとる茎も図鑑に似とるけん、間違いなかやろう」

「先生、オオイヌノフグリて変な名前やねえ。どげん意味があっとね？」

登美子が少し興味を持って、変わった名前の由来を聞く。

「うーん、図鑑には犬の陰嚢（ふぐり）て書いてあるたい。陰嚢て男のキンタマの意味たい」

登美子たちは、顔を赤らめ花を投げ捨てた。別に、花には罪はないのだが、持っているのが恥ずかしかったのだ。こんな可憐な花に犬のキンタマなどと、とんでもない名前は誰が付けたのだろう。友達に教えてあげる時にも困るのに、と、登美子は名付け人を恨んだ。

「オオイヌノフグリは、横に這うのが多いが、茎がまっすぐ立って花も少し大きいのがタチイヌノフグリ、と、書いてあるぞ。そこら辺にないか？」

三角先生は、女の子の気持ちなど無頓着に、図鑑の説明に夢中である。

「そげん花は知らん！」

登美子たちは怒って山をまた登り始めた。早くワラビが生えやすい場所を探さなくては、他の人がみんな採ってしまう。

三角は仕方なく元の岩に戻り、腰を下ろして周りを眺め始めた。子供の頃から八台市の街中で育ったので、こんな山深い学校の子供たちとは、始めての出会いである。すべてが新鮮で興味深いのだが、今朝のような事態には、教師としてどう対応すればよいのか、見当も付かない。またここ数年は、三角自身が、教師生活に悩み続けていた。

「先生、この花は何て名前ね。山の倉分校の裏にもいっぱい生えているけん、よく押し花にするとやけど？」

今度は分校から来た、山内ゆみ子と春雄が尋ねてきた。手には二十センチほどの茎に、楕円形の柔らかい葉が付いた草を持っている。花は白くて細長い三角の花弁が、六枚に分かれ、可憐で寂しそうな風情がある。

「これはユリに似ているようだな、よし、調べてみるたい」

三角先生はユリ科のページを開き、花の形で一つ一つ眺めていく。

「これらしいぞ、花の形と葉の付き方が図鑑とそっくりたい。名前は、チゴユリて言うみたいやね」

「チゴユリて名前は可愛いかねえ。この花にぴったりたい」

春雄が、納得したみたいに頷いている。三角先生も、先ほどのイヌノフグリという名前とは、えらい違いだと思いながら、名前の由来の項目を調べてみた。

「えーとね、漢字で〈稚児百合〉と書いてある。子供の百

合に見えるから、名前が付いたらしか」

野山に美しく、ひっそりと咲いている花、艶やかに咲き誇っている花も、こうして図鑑を眺めながら調べていくと、面白いものである。

名前ひとつで、愛らしく思えるものもあれば、思わず笑ってしまう花もある。だが、それぞれの植物は、自分を周りの環境に合わせ、必死に生きて、種の子孫を残そうとしているのだ。

「先生、これなんて名前ね？」

次々と、子供たちが花や草の葉っぱを持って来る。三角先生は、図鑑のあちこちを開いて大忙しである。

子供たち一人一人は、我儘（わがまま）でも乱暴に見えても、おとなしくて無口であっても、それなりに懸命に、何かを覚えようとしているのだ。

三角は、何かここの子供たちとの付き合い方が、少し分かったような気がして、気が楽になった。

「先生、ワラビのいっぱい生えているところ知っているけん、採りに行くバイ」

春雄は、ゆみ子の分校仲間である、次男や春江たちと先ほどまでワラビ取りしていた、奥の草地に先生を誘う。分校からきた子どもたちは、まだ本校の子には慣れないので、一緒に固まって行動している。

春雄だけが、ゆみ子とよく話をして、色々と小まめに面倒を見ている。三角は、学級委員選挙でなぜ春雄が票を集めるのか、分かったような気がした。子供は子供なりに、人柄をよく見ているのだ。

「皆もそこに集まっとるね？」

三角先生は、春雄たちと一緒に山道を歩きながら、周りで遊んでいる子供たちを確認していく。花が咲いている草や樹木を、一生懸命スケッチしている子や、ワラビ、ゼンマイを探している子が山いっぱいに広がっている。

「みんな勝手に色々んな事ばしとる。登美ちゃんたちは、ずっと山の上のほうまで行ったバイ」と、春雄が答える。

この学級は人数が多いので、一人一人が何をしているのか、など、気に掛けていられない。どうせ、大声で呼べばぞろぞろ出てくるし、帰り道は一つしかない。

次男や春江たちは、大きなクスノキが数本生えているが、割りと緩やかな草地で待っていた。クスノキは赤や黄色の新芽が吹き出し、下から眺めても色鮮やかな樹冠を見せている。枝葉の間から差し込んでくる、暖かい春の陽射しが地面まで届き、草花の葉を鮮やかに輝かせている。

「先生、草の間にフキが出とるけん、採ったらよかよ」

春江が先生に、フキのあるところを教える。フキの古い大きい葉っぱで見えないが、茎の根元を掻き分けてみると

柔らかい、もっこりとした新芽がたまに出ている。この付近では天ぷらにして食べるが、季節の初めのフキはなんとも美味である。

「八海市では八百屋でしか見んけど、フキてこんなところに生えとるとね。美味しそうやね、いっぱい採ってよかやろか」

三角先生は、嬉しそうに探し始める。しかし、まだこの季節には、美味しい新芽はなかなか見つからない。

春雄は、柔らかい草の上に寝転び、頭上を飛び交うさまざまな鳥の声を聞いていた。ウグイスがすぐ近くのヤブツバキの枝で、美しい声を聞かせている。遠くの空ではホトトギスが、けたたましい声で〈テッペンカケタカ〉と鳴いている。

山の所々で、まだ花を僅かに付けているヤマザクラから、青白い花びらが風に乗ってフワー、フワーと舞ってきた。花びらに混じって白い羽も、フワフワと浮いている。よく見るとモンシロチョウが数匹、花びらと戯れながら舞い交っているのだ。

春雄は、春の暖かい日差しが心地よくて、少しうとうとしていた。

「こんなところで寝込むと、風邪ば引くたい」

ヤブツバキが固まって生えている傍らの小道から、突然

声がした。首を回して見ると、登美子が良枝や恵一と一緒に笑っている。

「ワラビは、いっぱい採れたね」

「うん、もうランドセルがいっぱいだけん、降りて来たたい」と、良枝が答える。

「三角先生も、一緒だったばってん。さっきから、フキの芽ば探して、上のほうに行っとる」

「春ちゃんはもう採らんとね？」と、登美子が不審がる。

「うん、次男君たちがいっぱい採ったけん、少し分けて貰うたと」

春雄は起き上がり、ランドセルの中を見せた。ワラビやフキがパンパンに入っている。

「ここで、フキが採れたんね？」

登美子も欲しそうな顔をする。ワラビに夢中で、フキの芽は採っていないのだ。

「もうここは、採ってしもうたけんなかとよ。・・・うちのば、少しあげる」と、後ろから声がする。

ゆみ子が春雄の後ろから、おずおずとランドセルを開ける。まだ慣れていないのか、登美子に圧倒されているみたいだ。

「ありがとう山内さん。せっかく採ったのに悪かね。そん代わり、ゼンマイがいっぱい採れたけんあげるたい」

「先生が帰って来たら、みんなですこしずつ交換したら、よかとやがね」と、春雄がふと思い付いたことを口にする。

たしかに、同じ物をいっぱい持って帰るより、みんなで色々交換したほうが、今夜の食卓が賑やかになりそうだ。

「うん、そうしたがよかね。春ちゃんも、たまにはよいこと言うたい」

登美子の前では、春雄はいくら名案を出しても形なしである。学級委員の面目も、モンシロチョウと一緒にどこかに飛んでいった。

「先生が帰って来なったバイ」

良枝の指差すほうを見ると、谷沿いの藪を掻き分けて、疲れた顔の三角先生が登ってくる。

「ここの場所が、分からんようになってしもたけん、谷まで一度降りて来たい」

三角先生はふうふう言っている。頭は藪の中を掻き潜ったので、クモの糸や枯葉で色取り取りになっている。

「 先生、フキはいっぱい取れたね 」

春雄が尋ねながら、先生の買ったばかりの赤いナップザックを覗いてみる。

「 うん、採れたぞ。谷沿いで大きかとば、大分見つけたたい 」

自分で、山菜など採ったことがない三角先生は、大収穫に大喜びである。

「先生、ワラビとかゼンマイも要るやろ。皆で交換せんね」

春雄の名案をちゃっかり頂いた登美子の提案に、最初は

迷っていた先生もしぶしぶ頷く。よほど自分が採ったフキが大事で、持ち帰って家族に自慢したいのだろう。でもよく考えてみると、色々な山菜を持って帰った方が、家族は喜ぶだろうと思い直して、交換に応じた。

「ようし、みんなも、取ってきた物ば出して見んさい」

みんなは先生の言葉で、ランドセルから今日の収穫物を取り出した。

「子供市場みたいやね。朝市の物々交換たい」

登美子たちも面白がっている。春雄たちは、自分の山菜と相手のものを、交換比率を交渉しながらやり取りしている。本物の市場みたいな、騒々しい風景になっていた。

春雄は、ゆみ子から貰ったフキを、登美子のゼンマイと交換した。次男たちからワラビを大分貰ったので、先生に少し分けても、ランドセルの中はまだ山菜でいっぱいである。

「交換したら下に下りるぞ。他の子たちが、待っているかも知れんけん」

三角先生の言葉で、春雄たちは大分時間が経ったことに気づいた。そろそろ、陽は西の山々に近づいている。

古い畑地跡に着いてみると、子供たちが思い思いに遊んでいる。女の子たちは採取した草花を押し花にするため、形を整えノートに挟み込んでいる。

恵一は、野山で植物を見るのが好きなので、生えている形を丸ごと上手にスケッチしている。あまり、ワラビは取らなかったみたいだ。春雄は、後で少し分けてやるつもりでいる。

「春雄君、チョウジ君とみんなば集めてくれんね」

先生の頼みで、二人は谷沿いの道を登りながら、大声で怒鳴っていく。

「おーい、もう終わりやけん、降りてこんかあ」

「もう帰るぞう、早よ来んばあ、置いて帰るぞう」

遠くのほうの尾根の樹林から、おう分かった、と答える声がする。たぶん誠たちだろう。誠の家も開拓集落の尾奈山にあり、勉強よりも野山で遊ぶことが得意である。

近くの竹藪から、岩淵純がニイーと笑って顔を出した。小さな頭と体が枯葉と埃まみれである。

「こんなところでなんば採っとるとね。大分汚れとるよ」

春雄は純と仲がよいので、笑いながら聞いてみた。

「この上にメダケの林があるけん、筍ば採りよったんたい」

ランドセルを開けてみると、出始めの柔らかい筍がいっぱい入っている。

「大分採れたんやね。俺いも少し欲しか」

「そんなら、欲しかだけあげるけん、取ればよか」

春雄はランドセルに手を突っ込み、十本ばかりの筍を取

り出した。竹の皮は薄茶色で、白い産毛が生えているように見える。手に持つと、薄くてしっとりした柔らかい皮の感触が、中に包まっている筍の美味を保証している。

「下の畑地跡に、もうみんな集まっとるよ。採ってきた物んば交換しとるたい。こげん柔らかな筍なら、みんな欲しがるばい」

「欲しい者んが居ったら、あげるたい。俺いは、少し持って帰ればよかもん」

岩淵純の家は、国見山の懐に抱かれた奥深い谷筋にあり、体は小さいがすばしっこいので、どんな運動でも得意である。気は強いのだが、あまり物に拘らない、のんびりとした性格の子である。

春雄は、純と気が合うのでよく遊ぶ。遠くて帰りが大変なのだが、学校の帰りに、何度も純の家に遊びに行ったことがある。

尾根筋や谷筋から、湧き出して来るように子供たちが集まったところで、三角先生は点呼を取った。先生は、まだみんなの顔を覚えていないので、春雄と登美子が手伝い全員を確認する。

「これから皆で教室に帰るけん、足が滑って怪我せんように気をつけて歩くんぞ。走ると危ないけん、ゆっくり歩くとばい」

先生の言葉が終わらないうちに、チョウジたちは仲間と走り始めた。

古市の子供たちにとって、野山や川は一番の遊び場所であり、どこが危ないかは判り過ぎるくらい分かっているのだ。

山道を走るくらいはいつものことだし、滑りやすくて危険な箇所は十分気を付けてゆっくり歩く。

教室での勉強はあまり出来ないが、野山のことは何でも知っているのだ。

教室に戻り、子供たちが浮き浮きとして今日の収穫を自慢し合っていると、三角先生が入ってきた。

「今日は、これで勉強は終わるばってん、明日の一時間目に、山で採った山菜や植物とか花の事ば、何でんよかけん作文にまとめるたい。スケッチでも押し花でもよかけん、なんか書いて出して貰うばい」

三角先生は、大きな町の小学校で教えていたので、こういう遊びでも勉強に繋げるのだ。たぶん、植物観察のレポートとか呼ぶのだろう。子供たちは、今まで遊びと勉強を一緒に考えたことがないので、なんだか騙されたような気がして、先ほどまでの楽しさも半減した。

四年生の教室は、四月が過ぎ五月になっても、少しもおとなしくはならなかった。

相変わらずチョウジたちのグループは、一時間目の点呼が終わると窓から校庭に、元気よく飛び出していく。野山や川に向かうことが多いが、校庭が空いている時には、ドッジボールや相撲を取って遊んでいる。

天気のよい日には、大半の男の子が教室に居なくなる時もある。春雄にしても、三日に一日は飛び出して行くくらいだ。

当初は、校長先生も心配して、教室の後ろで授業を見学することもあったが、そんな日には誰も教室から逃げ出さない。教科書がなくても、隣の子に見せて貰い、先生の話をおとなしく聞いている。一応、三角先生の体面は保ってやるのだ。

子供たちにすれば、決して三角先生が、嫌いとか憎いとか、でやっているのではないのだ。

ただ教室で受ける授業より、野山や川の方が、何倍も刺激的で魅力があるだけなのだ。だから、雨や風の強い日は、ちゃんと教室に残っている。

「三角先生、今日の授業が終わったら、私の家に寄ってくれませんか」

田中校長が昼休みの時間に、一人職員室に残っていた三角に話し掛けてきた。

「ハア、何か用があるのですか？」

「いえ、用と言うほどのことはないのですが、先生も古市にも大分慣れた様子ですので、ゆっくり話をしてみたいと思いましてね。学校より私の家の方が、気兼ねなく話せるのではないかと思いましてね」

校長の家は、教員住宅として校庭の南端に、一戸建てが用意されていた。家族の住居兼、教員たちの宴会場としても利用されている。

古市には飲食店の類が全くないので、歓送迎会や大きな祝宴などは、湯の上町の旅館や飲食店でするしかない。しかし、古市周辺に間借りしている若い教員もいるので、酔ってから帰ってくるのも面倒だし、世間体もある。そのため、仲間内の簡単な飲み会は、校長宅で行う場合が多い。

校長も奥さんと二人暮しだし、若い教員が立ち寄ってくれるのが、何より楽しみでもある。遅くなるとそのまま泊まっていく、図々しい教員もいる。

今年の春に転出したケイコ先生は、奥さんの遠縁とかで、何かあるとよく泊まっていた。

「私は構いませんが、奥さんが迷惑じゃないでしょうか」

「実は今日、家内は親戚のうちに出掛けていて、留守なんですよ。何も、もてなし出来ませんが、そのつもりで気軽に寄ってください」

「そうですか、お邪魔でなかったら寄らせてもらいます」

三角は笑顔で承諾したが、内心複雑な気持ちだった。今朝の授業中に、四年生の父兄代表が校長を尋ねてきて、職員室で暫らく話し込んでいたらしい。新学期以来、三角の授業について教員仲間からも、色々批判が出ていることは知っている。

当然、三角の授業のやり方が、子供たちの父兄にも知れ渡っていることだろうし、不安を持っているのだろう。あまり教育熱心ではないはずの、古市小学校の父兄が騒ぐのは余程のことである。ＰＴＡ会長の古田は、教頭兼任で六年生を担当している最古参（さいこさん）の鈴木に、大分苦情を言っているらしい。

午後の授業は国語と工作で、チョウジたちもおとなしく教室にいた。工作の時間には、竹とんぼや凧などをみんなで作る。チョウジの得意分野でもあり、いつも先頭に立って材料準備から工作方法まで、先生を手伝っている。

三角は明日の授業の下準備を済ませ、四時過ぎには校庭を横切って校長宅に向かった。五月が終わるとこの地方はもう梅雨の季節で、南国らしい、蒸し暑い日々が始まっていた。すこし、埃にまみれていたサクラも、昨日の雨で勢いを取り戻して、むせ返るような濃緑の葉っぱが、湿った風に揺れている。

小学校を取り囲む高い石垣の上には、緩い土手が築いて

あり、校庭との境には大人の背丈を越えるカナメモチの分厚い生垣が続いている。子供たちが、石垣の上に出ないようにするのが目的である。また、校庭でソフトボールやドッジボールなどをして遊ぶときに、ボールが下の道路に落ちるのを防ぐ役目もある。

十数本のサクラの古木は、生垣の内側にぽつん、ぽつんと植えられ、校長の家の先まで、不規則に並んでいる。カナメモチの途切れた間から、向こうの景色を覗くと、すでに田植えが始まっており、賑やかな掛け声や笑い声が、湿った弱い風に乗って聞こえてくる。

校長の田中は、もう涼しげな半そでに着替えており、台所で酒のつまみを用意していた。日ごろから、いつもニコニコした笑顔で周りに親しみを与えているが、今日は特に和やかな態度である。

「どうも家内がいないと何も出来ない口で、漬物くらいしかないのですが良いですか」

田中はビールと漬物が入った皿を両手に持ち、三角が畏(かしこ)まって座っている居間に笑いながら入ってきた。

「どうも、奥さんがお留守のときに、お邪魔して済みません」

三角はビールを受け取り、卓袱台(ちゃぶだい)にコップを並べながら恐縮している。

「さあさあ、まず一杯どうぞ」

田中と三角は、互いのコップにビールを注ぎ、一気に飲み干した。

暑さに汗ばんだ体が、スッと冷えていくような気がする。二人は黙って、又、ビールを注いで飲んだ。

蒸し暑い梅雨の湿った空気を、新しく買ったばかりの扇風機が、ゆっくりと掻き回している。開け放った障子の向こうには、アラカシの生垣に囲まれた広い庭が見える。ヤブツバキやカエデに混じって夏ミカンが植えてある。つつましい白い花が、化粧を覚えたての少女みたいに、恥ずかしそうに咲いている。

生垣の向こうには、校庭との間に大きなサクラが五, 六本植えられているので、その先にある校舎は全く見えない。

「桜が満開の頃は、花見に格好の場所ですね」

三角が、羨ましそうに校長に話しかける。

「ええ、ここは田舎なので楽しみはあまりありませんが、桜の季節だけは別です。親戚の桜好きが、春休みには泊りがけで遊びに来ますよ」

「私は、八海市の街中で生まれ育ったものですから、花見は近くのお城跡が多いのですが、毎年、人出が多くて大変な騒ぎです」

「先生も来年の花見には、ぜひお出で下さい。少し寒いくらいですが、部屋に吹き込んでくる花を肴に、熱燗の酒を

飲みながらの花見は格別です」

三角は、来年までこの学校で、教師生活が出来るかどうか、と思いながらも、ここでゆっくりと満開のサクラを眺めてみたくなった。

「ええ、花見の頃に、ぜひ一度お伺いしたいものです」

外ではスズメがサクラの木に集まり、チュン、チュン、チュンと、喧しく囀っている。

「三角先生、実は今日、父兄の方が見えられましてね。四年生の勉強の進み具合を、心配されていました」

「はあ、そうですか・・・・」

「この学級は生徒数が多くて、三年生のときから、進度が多少は遅れ気味だったものですからね。でも、私は、そんなに気にしている訳ではないのです。しかし、父兄にとっては大分心配のようです」

「四年生の、学習進度が遅れていることは事実です・・・」

「三角先生は、今後の方針はどう考えているのですか。出来ることなら、協力を惜しまない積りです」

「実は私も、最初は、もっと厳しく指導する積りだったのですが、子供たちに接してみると、何だか無理が出来なくなってしまいました」

「どうしてですか？」

「私が、今まで教えていた学校の子供たちとは、目の色が

違っているような気がしているのです」

「――？」

「町の子の目は、テストの点数が良かった時だけは輝いていますが、普通はおどおどとして、いつも私の顔色を窺っていたような気がします。これでも私は、八台の学校では、スパルタ教師だったものですから・・・」

「古市の子供たちはどうなのですか？」

「たいていの子供は、テストの点数なんか、大して気にもしていません。大体、古谷長次たちはテストを受けることさえしませんから。それに、他人の顔色を窺うような子供は、一人も居ないのです。いつも澄んだ目をして、真っすぐ見てきます」

「その古谷君に、学級中が掻き回されていませんか」

「いや、他の子供は、自分なりに行動している筈です。決して古谷君の言い成りになっている訳ではありません」

「うーん、なかなか面倒ですね。それじゃあ、普通の授業に戻すのは難しいでしょう」

「古市には、子供たちが教室より外で遊びたいだけの、魅力ある豊かな自然がいっぱいあります。校長先生、あの子たちの素直で豊かな心を、何とかそのまま伸ばしてあげるのは無理でしょうか？」

三角は、自分でもこんなことまでしゃべる積もりはなかった。しかし、古市で教壇に立った最初の日の出来事から、ずっ

と驚きの連続の体験が、此の項は自分の心の奥深くで、何かを発酵し始めたような気がしていた。

「しかし先生、子供たちの将来を考えてみませんか。やはり四年生として、ある程度の学習水準は必要ではないですか。中学生になったとき、古市の子供だけが、全員授業について行けなくなりますよ」

田中も、校長としての立場がなかったら、三角の言っていることは十分理解できるし、応援もしたい。自分も子供たちの豊かで素直な気持ちを、勉強という名で、ねじ曲げたくはないのである。

「子供たちが、やる気にさえなってくれれば、すぐにも追いつけると思いますが・・・どうすればよいのか・・・まだ判りませんが、何とか、勉強に興味を持ってくれるよう頑張ってみます」

「三角先生の子供を思う気持ちは、本当によく分かります。私もあの子供たちが、素直で正直なまま、大人になって貰いたいのです。しかし、とにかく、午前中だけでも教室にいるように、努力して貰えませんか」

田中は、ＰＴＡからの圧力は、今後も大きくなるだろうと思っている。教頭の鈴木たちも、もっと喧しく規律や管理のことを言い始めるだろう。

それに、教育委員会などの町の有力者たちが知ったら、大きな騒ぎになるかもしれない。それでも田中は、三角の

やり方を頭から否定する気にはならなかった。

「まあその話はこのくらいで、今日はもっと飲みましょう」

田中も、久しぶりに同僚の教師と、腹を割って話しをし、ゆっくり飲んでみたくなった。

「どうも、ご心配ばかり掛けてすみません。この歳で、青臭いことばかり考えて、自分でも嫌になります」

三角は、心の底から頭を下げた。校長の気配りは、痛いほど分かっているのだ。

「いや、そんなことはありませんよ。三角先生のやっていることが、本当は正しいのかもしれません。最近は誰もが、形通りの授業を、計画通り消化しているだけなので、かえって新鮮で面白いですよ」

「どうも私は、外れ者なんですよ。今までは、子供たちを厳しく指導するのが、教師の役目だと信じていました。そのためには、子供を大分殴っても来ましたが、前の学校でそれが問題になりまして・・・結局、追い払われたようなものです」

「でもここでは、子供たちに好かれていますよ」

「そうですかね。もっとも、同僚からは怠け者だと批難され、父兄には大分心配掛けている訳ですから、せめて子供たちには好かれたいですね、ははは」

二人は大笑いしながら、ビールを飲み干した。三角が食

事をご馳走になり、酔いを覚まして校長宅を辞したのは、もう夜もふけて、時計の針は次の日に変わっていた。

三角は、古ぼけたオートバイで夜道を帰りながら、校長の意見が有難くて、涙が出そうになった。しかし、このまま騒ぎが収まる筈はないし、三角の教師としての評価も、決して高まることはないだろう。教師生命も、多分そんなに長くはないような気がしてきた。

夜空を見上げると梅雨空の為か、月も星も全く見えず、漆黒の闇がどこまでも広がっていた。

三角が隣町の借家にたどり着くと、妻の洋子はまだ起きて待っていた。読んでいた分厚い本を閉じながら、眠いせいか、不機嫌そうな顔で迎えてくれた。

「お帰りなさい、大分遅かばってん大丈夫？・・・すこしお酒の匂いがするけど、飲み過ぎはいかんとやなか？」

妻の洋子とは、八台市の小学校で同僚として知り合い、結婚してからもう十五年を超えている。洋子は最初の子供が生まれたときに、教師をやめ、子育てに専念していた。元来、おとなしい性格で、外で働くことより、家事の方が好きな性格であった。今でも料理が好きで、毎日の献立も豊富である。

「うん、校長先生と話が弾んだもんやから、晩飯もご馳走して貰うて、なんか遅うなってしもうた。浩たちはもう寝

たんやろ」

「浩は、まだ期末試験で勉強しとる見たいやけど、緑は、部活が大変やからと、早よう寝たみたいやね」

子供は、浩が中学三年生で、緑は今年から中学に入ったばかりである。浩は、もう高校受験の準備に、小さな学習塾に通っている。母親に似て体も細く、おとなしい子であるが、勉強は好きらしく、いつも遅くまで机に向かっている。緑は、バレーボール部に入っているので、練習の後はいつもクタクタになって帰ってくる。期末試験が近付いても、部活の練習休みなどは無いそうだ。

「今夜、早い時間に、八台市の秋山さんから、電話があったとばい。忠君の､耳の具合はまだようならんらしか。まだ、病院に大分掛かるて言うてたばい」

秋山忠は三角が、去年の夏に、叱責の代わりに顔を叩いた時、打ち所が悪くて耳を傷めた子である。

非は、体罰をした三角にあるのだが、忠がいつも弱い者いじめをするのが、許せなかったのだ。特に今回は、生まれつき足が悪い子をからかっていたので、つい怒りが爆発して、手を上げてしまったのである。

三角が、治療費の全額負担をすることを条件に、校長が間に入り何とか内密に処理して呉れたが、もう治療費もかなりな金額になっている。

「まあ、完全に直るまで、こちらが頭を下げるしか、仕方

なかばい」

三角は悔しさが込上げてきたが、どうにもならないので諦め顔で答えた。三角はこの事件以来、人が変わったみたいに子供を叱らなくなっていた。

「又、夏のボーナスが消えてしまうたいね」

「済まんなあ、俺が馬鹿だったもんで、みんなに辛い思いばさせてしもうて」

「そげんこったよかばってん、今度の小学校では我慢してくれんね」

「うん、今度は大丈夫たい」

努めて明るく答えながらも、憂鬱（ゆううつ）な思いが、余計体の奥に沈みこんできた。

第五章　四年生　夏

七月も半ばが過ぎ、鬱陶しかった梅雨が明けると、古市はいきなり焼き付けるような、真夏の陽射しが照りつけてくる。子供たちは、あと僅かで楽しい夏休みを迎えるため、心が浮き立ちそわそわしている。三角先生の悩みや心配事など何も知らない。

学校を取り巻くサクラの木には、朝からクマゼミやアブラゼミが大群で取り付き、喧しい声を競っている。暗い地下でじっと二年、三年を過ごしても、地上での命は僅かに十日あまりの儚(はかな)さを、懸命に生き、精一杯嘆いているのだろうか。しかし、聞かされる方では堪らないほどの、煩(うるさ)い鳴き声である。

「みんな夏休み前のテストば、明日と明後日にやるけん、ちゃんと学校に来るとバイ。チョウジ君、分かっとるね」

三角先生は、朝一番でまだみんなが教室にいる内に，テストの宣言を下した。

都会であれば、子供たちは目の色変えて、どんな問題が出るのかを聞いてくるのだろうが、ここでは誰も興味を示

さない。

「先生、そしたら時間割はどうなっと？」

登美子が、一応学級委員としての務めを果たす。

「みんなも、よう聞いときんさい。明日は一時間目が国語、二時間目が算数のテストたい。明後日に理科と社会のテストばするけん」

「先生、そしたら明日の午後は休みね」

春雄は目を輝かせて質問する。もう心の内では、どこに遊びに行くか考え始めている。

「休みには成らんたい、午後は普通の授業たい」

三角先生は当然のごとく、春雄の淡い夢を打ち砕く。何しろ、校長や教頭の目が光っているのだから仕方ない。

「そげんこつ、先生ズルかよ。テストの後は、いつも授業は無したい」

春雄は食い下がる。ここの子供はテストで午前中に頭を使ったら、もう勉強は終わりだと勝手に決めている。

「分かったバイ。そんなら、明日テストば受けた者んな、午後は野外授業たい」

三角は、何とか全員にテストを受けさせようと、午後の授業を取引に使う。テストを受けない子が多いと、一学期の通信簿作成も出来ないのだ。

「はーい。そしたら、今日はテストの勉強ばするけん、早よう帰ってよかと？」

春雄の質問に、みんなが盛大な拍手で支援する。早く帰っても、勉強などする筈がないのに、とにかく一人前のことを言うのだ。

「今日は、一日中ちゃんと勉強たい。そん代わり、午後は体育と自習に変えるバイ」

子供たちは、ワアーと歓声をあげた。体育なら、女の子もみんな好きだから、誰も文句は言わない。人数が多いので、二組に別れてドッジボールをして遊ぶだけだが、このクラスの子供たちは一年中飽きずに楽しんでいる。この遊びは、男の子も女の子も同じように楽しめるから、人気があるのだ。

あくる日のテストは、国語の読み取りと書き取りから始まった。

春雄は全く出来なくて、時間いっぱいを、ボーとして過ごした。三角先生は、八台の学校で使っていた問題集から出したのだが、春雄たちにはレベルが高すぎたのだ。

春雄の国語の教科書は、かろうじて残っているもの、破ってしまった子に見せているうちに、落書きされたり、汚されたりで散々な姿になっている。だからという訳ではないのだが、自分の家で開けてみたことがない。学校では、時には外に飛び出して、村中の山や川を駆け回っているし、家に帰ると親の手伝いで忙しいのだ。

三角先生は、二日間のテストの採点をしながら、白紙に近い用紙の山に頭を抱え込んでしまった。みんなが、テストを受けてくれたことだけでも前進したと、無理やり自分を納得させるより、もう仕方がなかった。

三角先生が、一人で岩本恵一の家を訪問したのは、その数日後の夕方である。恵一母子は、学校のすぐ近くにある古谷集落の一番奥に住む親戚の、大きな家の離れを借りて住んでいた。登美子の家とは、そんなに離れていない。

幸い母親はまだ夕食の支度前で、恵一は今日の授業の復習をしていた。それでも恵一の学習力は、廻りに引き摺られて、以前より落ち始めているようだ。

「今日は突然お伺いして、本当に申し訳ありません。お母さん、実は、面倒なお願いことが有って参りました」

「私どもは、まだ古市に来て一年余りで、学校も土地の様子もあまり詳しくありませんが、何かお役に立つのでしょうか？」

母親の千香子は、三十半ばを過ぎたくらいの、背の高いスマートな美人である。よく見ると、恵一そっくりの賢そうな顔立ちをしているが、なんとなく、気の強そうな感じもある。

元々は、隣町で生まれたのだが、小さい頃から都会で育ったので、言葉にも土地の訛りは全くない。ＰＴＡの集まり

でも、土地育ちの母親たちとは、一人だけ違った雰囲気を醸し出して、すこし浮いているようだ。

ＰＴＡの父親たちにとっても、興味の的ではあるが、高嶺(たかね)の花過ぎて、あまり話し掛ける人は居ないようだ。

「お願いごとは、恵一君の学級のことなのです。恵一君から聞いていらしゃるかも知れませんが、学習水準があまりにも低いのです。いや決して、知能レベルが低いのではなくて、学校の勉強に興味がないだけなのですが・・・」

「私も、恵一の話で、心配はしていたのですが・・・私どもが、何かお手伝い出来るのですか？」

千香子は心配そうな顔で尋ねる。ここでは余所者であり、家庭の事情からも、あまり出過ぎたことはしたくない。

「恵一君に、夏休みだけでも、あの子達に勉強を教えて貰いたいのです」

「恵一がですか？　―― そんな先生のような真似は、とても出来ませんよ」

「いや、あまり大げさに考えないでください。正式な家庭教師という訳ではないのですから。子供たちと一緒に、遊びながら勉強して貰えばよいのです」

「遊びながら、ですか？」

「ええ、遊んだ後に、ここで夏休みの宿題を、みんなと一緒にして欲しいのです」

「私どもの家で、みんなが勉強するのですか？」

三角の唐突で変わった頼みに、千香子は驚いていた。普通は、課外授業、補習授業などは学校でやるものである。すぐ近くに学校はあるし、夏休みも当直の先生がいるのだから、難しいことではない筈だ。

「学校でさせるのが当たり前ですが、あの子達は教室に入るのは、生理的に嫌がるのです。そこで、恵一君の家なら友達同士で、気楽に遊びながらでも、勉強するのではないかと考えた次第です」

「・・・・・」千香子は、無言で三角を見詰める。

「まことに勝手なお願いであることは分かっています。夏休みは、こちらの事情もおありでしょう。恵一君が、都合の付くときだけで構いません —— 何とかあの子達に、素直な心のままで、勉強の楽しさも教えたいのです」

「この家は、私共も間借りしていますので、あまり騒がしいと困るのですが・・・人数が少ないようなら、何とかご協力します」

千香子は、三角のあまりの熱意に負けたように承諾した。父兄たちの噂では、同僚の教師たちからも〈怠け先生〉と呼ばれ、あまり教育には熱心ではないと聞いていたが、全く違う面を見せられて、心を打たれたのである。

「有難うございます。本当に助かります。私も、出来るだけの協力はする積りです。・・・それから申し訳ありません

が、報酬は払えないと思いますが・・・」

「いえ、そんなことは構いません。恵一も去年の夏休みに、宮内先生や春雄君たちに誘われて、泳ぎ場のホタルを見たのが、本当に嬉しかったみたいです。やっと、仲間になれた、と喜んでいました。だから皆さんが、家に寄ってくれるのは嬉しいのです」

「そうですか。子供たちも、恵一君を決して他所者扱いしている訳ではないのですが、もっと仲良くなれたらいいですよね」

三角は、このまえ田中校長と約束した、子供の目を勉強に向けさせる手掛かりが、やっと見えて来たような気がした。

「先生、午前中は泳ぎ場で遊んで来るけん、勉強は午後からでいいですか。・・・それと裏山でワラビ採りしたとき、先生が使っていた植物図鑑を夏休みの間、ずっと貸して貰えませんか」

部屋の隅で黙って聞いていた恵一が、話に加わってきた。恵一にとっては、古市での夏休みは二年目になるが、もう少し詳しく、この土地の植物を調べる計画を立てていた。今まで住んでいた福岡と違い、圧倒的な種類の多さに、とても興味を深めていたのだ。

「ああ、よかよ。植物図鑑は図書室にあるけん、いつでも貸し出してあげるたい」

「一学期の初めに、恵一がランドセルいっぱいのワラビや

らフキやらの山菜を、持って帰った時はびっくりしましたが、自然の恵みが多くてよい所ですよね。あれ以来、ときどき花やら雑草やら持って帰り、細かくスケッチしているのですよ」

三角は、この学校で最初の授業の日に、みんなで裏山に登ったことを思い出した。あの時みんなは、山菜採りに夢中だったが、恵一だけは一生懸命に、植物のスケッチをしていた姿が印象的だった。あの日の午後は、決して無駄ではなかったのだ。三角は少しだが、勇気が湧いてきた。

外では、ヒグラシゼミが裏山のあちこちの木に停まり、カナカナカナ、と気品はあるが何か寂しそうな声で鳴いている。三角は何だか千香子に似ているような気がした。

西の空は夕陽が落ち掛けており、山々の頂と天空が同じ黄金色の光りで染まり始めている。やがて空は茜色から赤紫色に変わり、山間の村はすぐにも夕闇が濃くなるだろう。明日も晴れて暑い一日になりそうだ。もう夏休みが目前である。

古市小学校の夏休みは、今年も、子供たちのウキウキした笑顔で始まった。通信簿の中身など、誰も気にしていない。どんなに成績が悪かろうと、誰も子供たちの夏休みを取り上げたりはできない。

春雄の夏休みの一日は、朝五時の起床から始まる。今年

の朝が特に早いのは、隣に住む昭ちゃんに、ウナギ釣りの仕掛けを教えて貰っているからである。

昭ちゃんこと昭雄は、春雄より四つ年上で中学生なのだが、小さい頃からよく可愛がってくれる。春雄も兄弟がいないので、いつも昭雄を、兄のように慕っている。野山で山鳥を捕まえたり、川で魚釣りをしたり、色々な遊び方を教えてくれるのも昭雄である。

高橋集落で流し針を仕掛けるのは、小学生の高学年から、中学生までの子供である。大人は、川中に竹製のウナギ籠を仕掛けるが、湯の上川は水流が早いためか、うまく行かないようだ。

流し針とは、川中のウナギの通りそうなポイントに、夕方餌をつけた針を流しておき、朝方に掛かったものを引き揚げに行くのだ。

針に掛かったウナギは、簡単には逃げられないので、朝はゆっくりでもよいのだが、子供同士の競争が激しいのだ。この地方では、流し針の仕掛けをする子供は多いので、みんな朝早く川に出て来る。

何も、人の針に掛かったウナギを、盗むのではない。そんなことは、夢にも考えない子供たちだが、よく掛かるポイントを知られると、次の日に先に針を仕掛けられてしまう。湯の上町川は、みんなの共同漁場であり、何処のポイントに針を仕掛けるかは、早い者勝ちなのだ。

「おはよう、春ちゃん。眠か眼ばしとるが、ちゃんと起きとるとか。早よう眼ば醒まさんと、川に嵌るばい」

昭雄は、家の入り口で春雄が来るのを待っていた。手にはウナギを入れる、竹で編んだ大きな魚篭を持っている。春雄は魚篭を持たないので、古ぼけた小さなバケツを持ってきた。

「眠かねえ、ウナギの顔を見るまでは、眼が覚めんたい」

春雄は、まだ早起きに慣れていないので、必死に眼を擦っている。今年の夏休みに入ってから始めたので、まだウナギが掛かったことはない。

「早う行かんと、他ん人に仕掛け場所ば見られてしまうたい。夕べは、春ちゃんは何本仕掛けたとね」

「夕べは、餌のヨシノボリがいっぱい取れたけん、三十本くらい仕掛けといた」

「そげんいっぱい仕掛けて、大丈夫ね？　全部覚えとかんと、駄目バイ」

「うん全部覚えとる。国語の読み取りは駄目ばってん、こげんとは、よう覚えるたい。ばってん、一尾くらいは掛かっとらんかなあ、いつも空振りばっかりたい」

二人は眠いが、大漁のウナギを夢見て、足早に湯の上町川に向かって下って行った。

夏でも、朝早く川辺に降り立つと、爽やかな空気が流れているので、少し肌寒いくらいだ。周りを見回したが、誰

も見えないので、どうやら今日は一番乗りらしい。朝靄（あさもや）が風に運ばれて、ゆっくりと流れて広がり、上流の方は霞んで見え難くなった。

聞こえるのは川のせせらぎと、どこかでまだ鳴いているコオロギの小さな声だけだ。春雄は、やっと眠い眼が覚めて、早起きもよいもんだ、と、年寄りみたいな台詞を呟いた。

「春ちゃん、俺（お）いは川上から先に廻るけん、終わったらここで待ち合わせたい。ウナギが掛かっとれば、外してあげるけん、バケツはここに置いとけばよか」

昭雄は、川中から飛び出している石を、軽々と伝って上流の靄（もや）の中に消えた。

春雄は、夕べ仕掛けていたポイントを、すこしずつ思い出しながら、ウナギの姿を探していた。もう既に十本ほど引き上げたが、何も掛かっていない。短いシノダケの先から延びている、一メートルほどの釣り糸と仕掛け針だけが、川底から何の手応えもなく上がってくる。

十五本目のポイントは、水田を護る緩い傾斜の石垣がある、川の右岸だった。石垣の間に生えているネコヤナギが、大きくなり過ぎて川面まで伸びている。川に転がる大石に阻まれ、本流から分かれた浅い水の流れが溜まり、そこだけ淵になっているところだ。

春雄は水流も細く、本流からも離れているので、あまり期待も持たず、残っていた針を適当に仕掛けた場所だ。

最初に目に入ったのは、細長い葉が瑞々しく繁り、川面に垂れ下がったネコヤナギの枝に巻き付いている、白くて細長い紐だった。石垣に差し込んで置いた、流し針の付いた竹竿の姿は、どこにも見えない。

「あっ、掛かっとる！　ウナギが掛かっとる！」

周りに誰も居ないのに、春雄は驚いて大声を上げてしまった。

白い紐に見えたのは、ウナギの腹だったのだ。五十センチほどの丸々とした大ウナギが、水中に垂れたネコヤナギの枝に絡みつき、腹を見せたり背を出したりしている。流し針に掛かった大ウナギが暴れているうちに竹竿が外れ、ネコヤナギの枝に引掛ったのだろう。

春雄は大急ぎでバケツを取りに戻り、水を一杯に張って、ウナギを針が付いたまま入れ込んだ。ウナギが大きすぎて、春雄にはとても針が外せないのだ。それに、ウナギはバケツの中で暴れて、針が付いていなければ、今にも飛び出しそうだ。

しばらく、バケツの中のウナギを眺めていると、川上からようやく昭ちゃんが下ってきた。

「昭ちゃん、早よう！　早よう来てくれんね！　大きかウナギが、掛かっとったばい」

春雄は興奮して、大きな声で呼び続ける。初めて掛かったウナギが、とんでもない大物だったのだから仕方ない。

昭雄が飛んできて、バケツの中を覗き込んだ。

「うわあ、本当に大きかねえ。よう針が外れんかったね」

「ネコヤナギの枝に、引っ掛っておったけん、外し切らんかったとやろ」

春雄の説明を聞きながら、昭雄が針を外してくれた。ウナギはおとなしくバケツの底に沈み、草臥れたように丸くなって泡を吐いている。

春雄たちは、残りの流し針を引き上げに行くので、傍に生えているクワの枝葉を採って、バケツの上に被せて置いた。

春雄の、残りの仕掛けは全部外れであった。急いでバケツに戻り、クワの枝葉を払い除け、ドキドキしながら中を覗いた。居る、居る！　大ウナギは先ほどと変わらず、バケツの底に静かに横たわっている。

「よう掛かってくれたもんたい。大事にするけんね」

春雄は、ウナギに向かって話し掛ける。捕まったウナギにとっては大迷惑なのに、もう友達になった気でいる。

何で春雄が、こんなに早起きまでして、ウナギ釣りに熱心かといえば、湯の上町の温泉旅館に売って、小遣いを稼ぐ為なのだ。湯の上の宿は、不知火海の新鮮な魚と、山菜が名物だが、湯の上川で取れる天然ウナギも、型が大きくて客に好まれるのだ。

ウナギは産卵のため、普通は海に帰るのだが、何年も川

に住み付いているものは、驚くほど大きくなり脂も乗っている。だから、かなり高値で売れるので、高橋集落の付近では、子供たちの小遣い稼ぎの一つである。だが、ここから上流の集落では、不思議にあまり取れなくなる。その代わり、最上流部にはヤマメが多く棲んでいる。

取れたウナギは大きな竹篭に入れて、春雄の家の傍を流れる谷川の淵に浸けておくのだ。春雄と昭雄のウナギで一杯になれば、業者を呼んで引き取らせる積りなのだ。すでに昭雄のウナギは、六尾入っている。

暫くして、昭雄が下流から嘆きながら昇ってきた。

「アーあ、今日は春ちゃんのに、大きかウナギが掛かったけん、俺いが竿には、小さかとしか掛からんかった」

仕掛けを縄で縛って肩に担ぎ、魚篭を手に提げている。魚篭を開けると、小さなウナギが二尾滑り出した。二人とも空振りの日が多いのだから、昭雄も二尾取れれば、まあ大漁の日である。

二人は、今朝の収穫に満足しながら坂道を昇って帰る。夏休み中に、ウナギが何尾取れるか、子遣いがどれだけ増えるかを考えて、春雄はうきうきした心持である。

家のある高台まで歩くうちに、汗が出てきた。裏山のクリやカキの林では、もう早起きのニイニイゼミがシイーー、シイーーと独特の声を張り上げている。今日も晴れて暑い

日になりそうだった。

春雄は今年の春から、父親に牛の世話を手伝わされていた。春雄の家では、農耕用の牛を一頭飼っているが、今年の冬に子牛が生まれたのだ。残念ながら雄牛だったため、何時かは売られてしまうが、それまでは朝夕の餌や牛舎の掃除などを任されたのだ。

春雄にとって自分が世話する生き物は、三年生のときに健二から貰った、ウサギが一羽しかいない。いや、夏子が所有する〈トミコ〉も、まだ居座っているから二羽である。だが、ウサギの餌は、付近に幾らでも生えている、ヤブマオなどで済むし量も大して要らない。

しかし、牛の世話となると餌は大量に必要だし、寝藁（ねわら）の交換も子供には楽ではない。親牛と子牛は、簡便な柵で囲ってあるが、餌は一緒に食べさせなくてはならない。大量の稲藁を細かく切ってやったり、青物を好むので、時にはチガヤやススキの若葉を刈って来たりするのが、夏休みの日課となっている。

春雄は二人分のウナギを、家の脇の谷川に浸けてある竹籠に放り込むと、急いで牛とウサギの餌を準備し始めた。牛の餌は稲藁を束ごと裁断機で刻むだけだが、子供にとっては大仕事である。

牛の親子の飼い葉桶に、刻んだ藁と、昨日採っておいたカヤの若葉を混ぜて食べさせる。そのあと春雄は、裏山にウサギの餌になる草葉を探しに行った。田圃の近くの草は、最近はこの地方でも、繁茂に農薬を散布するので使えないのだ。ヤブマオなどのウサギの好物は、山の草地に幾らでも生えている。

牛舎の裏に父親が造ってくれた、小さなウサギ小屋がある。二羽の兎が脇目も振らず、熱心に餌を食べる様子を見ていると、後ろからお馴染みの声がした。

「春ちゃん、もう六時半たい。ラジオ体操が始まるばい」

振り向くと、夏子がもう真っ黒に日焼けした丸っこい体に、体操着を着て立っている。ラジオ体操なんか十分程度で終わるのに、いつも本格的な運動の格好で出かける。

今年から、春雄の家の近くにある鎮守の森の傍に、新しい公民館が出来たので、子供たちのラジオ体操の場所になっていた。そのため、毎日夏子が迎えに寄るのだ。

春雄は心の中で舌打ちし（このラジオ体操娘が！）と、怒りたかったが、口には出さなかった。夏休みのラジオ体操は、子供たちの義務なのだ。

何しろ夏子は、小さい時からいつも一緒に遊んでいるし、何かある時は、いつも後ろに付いて来るから一人っ子の春雄にとっては妹同然なのだ。怒ると泣いてしまうし、時には学校で登美子に言い付けたりするが、可愛いところもある。

「夏ちゃん、俺いは今日は忙しかけん、体操には行かんバイ」

これは本当のことなのだ。朝飯もまだ食べていない。大体、ウサギの世話は夏子がやるべきなのだ。

「春ちゃんは、休んでばっかりやけん、体操のスタンプが真っ白ばい。校長先生も、ラジオ体操は夏休みの宿題ち、言わしたやろ、守らんといかんよ」

夏子も二年生になり、自分にも下級生が出来てお姉さんになった所為か、大分口煩(うるさ)くなってきた。春雄は、なんだか登美子が二人居るような気になる。

「ばってん、朝飯も食べとらんもん。今朝は忙しかったたい」

「春ちゃんのおばちゃんは、ラジオ体操が終わってから食べさすて、言うとったバイ」

夏子は先に母親に会って来たらしい。母親に朝飯を催促しても、これでは駄目だ。

春雄は、仕方なくスタンプカードを持って、夏子と公民館に急いだ。

「春ちゃん、今日は泳ぎ場に行くとやろ、うちも行きたいけんよかやろ」

「今日は、三角先生が泳ぎば教えてくれるち言うけん、行くとたい。夏ちゃんはまだよう泳げんけん、無理たい」

「怠け先生は、泳ぎが上手かっとね。そげん風には見えんばってんね、誰でん、一つくらいはよか所があるとやね」

夏子は、三角先生が聞いたら、泣き出すようなことを平気で言う。先生の苦悩など全く知らないから、〈怠け先生〉などと、渾名（あだな）で呼んでいる。このごろは、父兄たちも陰では、渾名で呼ぶようになったから、子供も真似し始めるのだ。

「それに泳いだ後は、先生と夏休みの宿題ば、せんといかんとばい」

「夏子の宿題も、面倒見て貰いたかね。やっぱ、付いて行くたい。見ているだけなら、よかやろ」

「うーん、邪魔せんとならよかばってん。遅うなるときは、夏ちゃんが一人で帰るんぞ」

春雄たちの夏休みの宿題は、国語、算数などの問題集を、三角先生がガリ版で作ってくれた。かなりの量があるので、子供たちは先生に文句を言ったが、出来る所だけでよいと逃げられた。

春雄たちは、それなら安心してサボる積りだった。だが、先生が泳ぎの後に、みんなで一緒に勉強しようと言い出したので、断れなくなったのだ。

鎮守の森に着いてみると、社を囲むように高く茂ったクスノキや杉の枝葉を通して、薄暗い境内に、朝の柔らかい陽射しが差し込んでいる。高い木々に取り付いた、ミンミンゼミ

やニイニイゼミが、無遠慮に大合唱を繰り広げている。

「よい子の皆さーん、今日も元気に体操を始めましょうー」

公民館に据え付けられた大きなラジオから、お馴染みのフレーズが流れ始めた。今日の当番の、谷中のゴン爺さんが、ラジオから流れてくる大きな声に合わせて、一生懸命に腕を振り回し始める。

朝のラジオ体操の当番は、集落の年寄りが順番で勤めている。年寄りは、朝起きるのが早いし、特に忙しい用もない。それに、孫の年齢くらいの子供たちが大好きなので、喜んで引き受けている。どこの地域でも年寄りと子供は仲の良いコンビなのだ。

集まった二十数人の子供たちも、ラジオの音声に合わせて、思い思いに体操を始めた。なかには勝手に手足を曲げたり、伸ばしたりしているだけの子もいる。テレビと違い、ラジオの掛け声だけでは、子供たちにはどんな動作をすればよいのか、分らないのだ。

だいたい、指導員である筈の谷中のゴン爺さんが、めちゃくちゃに手足を振り回しているだけなのだ。春雄は、こんなラジオ体操は、子供より年寄りが元気になるだけだと思った。

春雄たちは、当番のゴン爺さんにスタンプカードを差し出し、出席確認の印を押して貰った。ゴン爺さんは、タバコの脂で黒くなった疎らな歯をむき出し、春雄の頭をゴツ

ンと叩いた。春雄のカードは空白だらけなのを叱ったのだろう。それにしても、夏子のカードは、夏休みの初日から真っ赤な印で埋まっている。雨の日でも、公民館の中で十分出来るので、ラジオ体操に休みはないのだ。

ゴン爺さんは、集落名の元になっている高橋という名の、長い木橋の傍に住んでいる。ゴン爺の家の裏は、湯の上川の土手となっており、シノダケやマダケの林が続いている。小さい子供には、釣竿を作ってくれたり、魚釣りを一緒にしたりするので人気者だ。

夏子と二人で、鎮守の社の境内を帰っていると、美しい蝶が数羽、社の裏に植えてあるサザンカの周りを飛び交っている。近くに寄ってよく眺めてみると、クロアゲハチョウである。真っ黒な大きな羽と、腹から尻に掛けての鮮やかな紅色の体で、薄暗い境内を妖しく舞っている。まるで社に住む神の使いのような、美しい蝶の飛び廻る姿を二人は無言でしばらく眺めている。境内中に響いている蝉の声も、この美しい空間では全く耳に入らなかった。

春雄は、朝食を食べ終わると、急いで今夜と明朝分の牛の餌を採りに裏山に出かけた。牛は、新鮮な青草を喜ぶので、雨の日以外は午前中の日課になっていた。

春雄が、汗だくになって青草を担いで戻ると、白い麦藁

帽子を目深にかぶった夏子が、濡縁にちょこんと座って待っていた。真夏の暑い日差しが、がんがん照りつけているにも拘らず、畑のほうをじっと眺めている。夏子の目の先では、キュウリの薄黄色の花の上を、モンシロチョウが白い羽をヒラヒラ動かし、上に下に飛び廻っている。やはり、今朝方に鎮守の社で見た、クロアゲハチョウの美しさが忘れられないのだろう。

母親が作ってくれた、昼食用のおにぎりは、台所に新聞紙を被せて置いてあった。母親は、多分田圃の草取りに出かけたのだ。稲はもう大分大きくなって、小さな穂をふっくらと付け始めている。

暑い日が続くようになると、雑草も無遠慮に蔓延(はびこ)るので、農家にとって草取りが大事な農作業になる。古市のように南九州の土地では、米に限らず農作物を育てると、なによりも雑草との戦いが限りなく続くのだ。

春雄が、夏子と連れ立って泳ぎ場に着いたのは、もう日は真上に昇り、正午も少し過ぎていた。あまり暑いので、道草を食いながらのんびりと歩いてきたのだ。泳ぎ場の天場に立って、誰が泳いでいるかを眺め回してみる。

「春ちゃん、遅いたい。昼から勉強やけん、早よう泳ぎんしゃい」

早速、登美子から叱られた。他には恵一、知子、良枝の顔が見える。

怠け先生と呼ばれ始めた三角も、小さくてあまり泳げない子供たちの手を取り、ちゃんとした平泳ぎを教えている。

春雄は夏子と水着に着替えて泳ぎ場に戻り、一人で勢いよく水面に飛び込むと、ヒヤッとした水温に体が一瞬縮こまる。天場では体操娘が、ここでも入念に準備体操を繰り返している。

「春ちゃん。こっち、こっち！」

登美子が手招きしながら呼んだ。見ると、去年大ゴイを見つけた岩の付近で泳いでいる。春雄が行き着く前に、登美子がさっさと潜ったので、春雄も急いで頭から水中に潜っていった。

登美子が水中で指差す先は、やはり去年の見つけた大ゴイの棲家だった。春雄も近づいて、濁った水の向こうに目を凝らした。奥からギロッとした目玉と長くて太い口ひげが、こちらを向いてじっと睨んでいる。

春雄は水中で（去年の大ゴイたい！　やっぱりここに棲んでいたんばい）と、水中の目顔で登美子に告げた。

春雄と登美子は、息が苦しくなり同時にパアーと水面に浮上した。二人は興奮気味に顔を見合わせた。

「コイの王様が帰っとるね」

登美子が、内緒話をするように近寄って囁いた。このコ

イのことは、二人だけの秘密なのだ。

「やっぱり、去年のコイたい。逃げんかったばいね」

「昔から、泳ぎ場にずっと棲みついとるとやろか？」

「台風で大水が出ても、ここの穴に隠れとればよかけんね。虫も木の実もいっぱい落ちてくるけん、棲み易かとやろ」

去年は、九月に大型の台風がこの地方を襲い、大水で低い場所にある田んぼはかなり水浸しになった。泳ぎ場にも土砂が大量に流れ込み、去年より浅くなっている。子供たちが大勢で泳ぐと、足元の土砂が巻き上がり、すぐ濁るようになってしまった。

「コイの王様の家やけん、ここの岩はお城やろね。家来のコイは居らんばってんが、寂しくなかとやろか」

登美子は、大ゴイのことを親身に心配している。春雄たちを、顎でこき使うときとは違い、こんな時は優しい面を見せる。コイより、人間の方を心配して貰いたいが、とりあえず黙っていた。

「王様か女王様か分からんばってん、そのうち子供が出来るたい」と、春雄が慰める。

「そうやね、どっかに逃げてしまわんごと、そっとしといてやろね。ここんことは、誰にも言わん約束だったバイ。春ちゃんよかね？」

登美子は約束を強要してくる。春雄も最初は何とか捕まえて、小遣いを増やそうと思ったが、コイがあまりにも堂々

としているので，勿体ないが諦めていた。

「誰にも言わん。時々は見に来るばってん、悪戯はせんごとする」と、春雄は誓う。

二人は又潜って、棲家の穴から少し離れて、コイの様子を眺めることにした。

昼食を、泳ぎ場の下流にある、平たい六畳岩で取ることにした。三角先生も、家で弁当を作って持ってきていた。六畳岩は陽射しで熱くなっているが、川風が心地よく吹いて来る。

夏子の弁当はいつも豪華なので、春雄はおかずを分けて貰い、おにぎりにかぶり付いた。今日は今朝から大忙しだったので、幾らでも食べられる気がしていた。春雄の顔からは、止めどなく玉のような汗が噴出している。

「先生、午後はどこで勉強すっとね？」

春雄はおにぎりの残り粒を、六畳岩の下を泳いでいるアカハヤに投げ込みながら、三角のほうに顔を向ける。米粒は水の流れに揉まれて、白い曲線を描くがすぐにアカハヤの餌になってしまう。

「学校で勉強すると皆が嫌がるけん、今日は恵一君の家で、一緒に勉強するたい」

三角は何でもないことのように、のんびりした口調で答える。子供たちを、何とかして勉強する気にしたい。そん

な場所に連れて行きたいのだ。

「ふーん、恵一君の勉強部屋ば、見せて貰うともよかたい」

登美子が、嬉しそうな声で応じる。以前にも、恵一の家には何度か遊びに行ったことがある。だが、いつも恵一の母親からお菓子を貰い、居間で話をしただけなのだ。恵一は頭がよいから、きっと立派な勉強部屋を持っているのだろう、と、一人合点している。自分も親にねだって、恵一と同じ勉強道具を揃えて貰いたいのだ。

「うちの勉強部屋は狭いけん、縁側の座敷ば使こうてもらうたい」

恵一は照れているのだろうか、少し恥ずかしそうに答える。

「みんなも、他所の家にお邪魔すっとやけん、行儀ばようせんといかんよ。騒々しくすれば、もう寄せて貰えんばい」

三角は、とにかく初日がうまく行ってくれるよう祈っている。最初が楽しければ、きっと勉強に興味を持ってくれるはずだ。古市の子供たちを勉強する気にさせるのは、本当に難しいものなのだ。

「さあ、昼飯食べ終わったけん、そろそろ出かけるばい」

三角の言葉で、みんなは食べ遺した物を袋に詰め込み、ヨッコイショと声を掛け起き上がった。

夏休みに入ってからの空は、絵具を絞り出したままのような濃い青色が広がり、焼き尽すような日差しが照りつけている。だが西の空には、少し灰色掛った雲の塊が幾つか

浮かんでいる。遅くなると、夕立が来るのかもしれない。

三角と恵一を先頭に、登美子、知子、良枝、そして春雄と夏子が一列に歩いていく。高台にある、恵一の家に繋がる細い砂利道を登り、やっと辿り着く頃には、皆の顔は汗でいっぱいだった。裏山のアブラゼミが、うだるような暑さをわざとかき回すように、一段と喧しく鳴いている。

「こんにちは。お母さん、今日は大勢でお邪魔しますばい」

三角が吹き出る汗を、真っ白なハンカチで拭きながら、千賀子に向かってにこやかに挨拶した。

母親の千賀子は、古谷集落と田圃(たんぼ)が見下ろせる、景色のよい縁側で待っていた。

「こんにちは、おばちゃん」

「お邪魔します」

皆がバラバラとだが、丁寧に挨拶する。登美子以外は恵一の家にはあまり来たことがないので、少し緊張しているみたいだ。

春雄も、恵一の母親は、授業参観日に遠くから見ただけである。ほっそりした体と、知的だがどこか強(きつ)く暗そうな顔つきが、春雄の母親たちとは何かが違う、街の人独特の雰囲気を持っている。近くで見ると、にこやかに笑う時の顔が、映画の女優みたいな別の世界の人に見えた。

三角が、子供たちの一人一人を紹介する。春雄は顔を赤

らめて、深々とお辞儀をした。皆は縁側に並んで座り、千香子が出してくれた冷たいお茶を飲んでから、やっと緩やかな風が吹いているのに気付いた。

「登美ちゃん、久しぶりやなか。このごろ遊びに来てくれんから、おばちゃん寂しかったとよ」

千香子は登美子が来てくれたのが嬉しいらしく、笑顔で話しかけた。

「おばちゃん、堪忍たい。お母ちゃんの手伝いが忙しかったけん、来れんやったもん。今日から恵一君と勉強するけん、分からんことがあればすぐ聞きに来るたい」と、登美子が応じる。

登美子も、遊びに来る理由が出来て嬉しそうである。千香子の美しさとセンスのよさは、こんな山奥の女の子には、眩しいほどの憧れなのだろう。傍に居るだけで、自分も優越感を持てるらしい。

夏子は初めて会うので、恥ずかしそうに春雄の後ろに隠れている。

「この小さい子供さんも、同じ学級なの？」

夏子を見て、千香子が不思議そうに恵一に尋ねる。

「いやいや、この子は二年生ですたい。春雄くんの妹みたいなもんで、いつも一緒に居るとです」

三角が、あまり要領を得ない説明をする。三角も、どうして夏子が春雄といつも一緒に居るのか、よく分かってい

ないのだ。最初のうちは、夏子が春雄の本当の妹と、勘違いしていたくらいだ。

「そんなら、お姉さんたちの勉強は難しいたいね、おばちゃんと一緒に遊んでいようか」

夏子は、人懐っこい笑顔で千香子の傍に行く。春雄は、夏子の面倒を見なくて済みそうなので、少しほっとしたが、ちょっぴり寂しい気分にもなった。

「さあ、さあ、上げて貰ろうて勉強ば始めようか」

三角の声で、子供たちは縁側に靴を脱ぎ、ぞろぞろと座敷に上がりこんだ。部屋の隅には新しい扇風機が置かれ、静かな風を送っている。

三角は、テーブルと卓袱台を借りて細長く並べている。子供たちはめいめいに座り、ガリ版刷りの夏休みの宿題を取り出した。

「最初に、国語の読み取りから始めるばい」

三角は最初の問題から、丁寧に教えていく。難しい漢字には、意味や使い方も併せて説明するので、春雄も何とか附いて行くことが出来た。教室より進み方は遅いが、子供の数が少ないので、三角も全員が判るまで根気よく教えていく。

千香子と夏子は縁側に座り、生垣の近くに飛んでくる、チョウやハチを眺めてはしゃいでいる。低いコメツツジの生垣の上には、ナツアカネの群れが、赤い胴体を震わせ、ちょっとじゃれ合いながら飛んでいる。縁側には、品のよ

い青色の胴体を震わせる、シオカラトンボが一匹、いつの間にかじっと止まっている。

やがて二人の声が途絶えたので、春雄がふと振り返ってみると、夏子は千香子の膝を枕にして寝込んでいる。朝早くから体操や泳ぎに頑張ったので、疲れてきたのだろう。千香子は、優しい笑顔で、気持ちよく寝込んだ夏子を眺めている。春雄が最初に感じた、寂しそうな暗い顔は、もうどこにもない。

子供たちは、教室と違う雰囲気の勉強会が、段々と面白くなっている。春雄も分からない箇所は、何回も三角に質問するようになっていた。学校の教室では、こんなに一生懸命になったことは今までなかった。

何だか分からないが、漢字を覚えることが楽しくなったのだ。

三角先生と子供たちの勉強会は、段々と活気に溢れて休むこともなく続けられている。

外の空は、先ほどから一気に暗くなり、やがて強い雨が降り始めてきた。やはり夕立が来たのだ。古市を取り囲んでいる、緑色の絵具を幾重にも塗りたくったような、色の濃い山々が、今は白く揺れる雨のカーテンで朧(おぼろ)に霞(かす)んでいる。雨のカーテンは、南の川下から国見山に向かって、次から次へと揺れながら流れていく。。

家の中に居ると、屋根や庭に叩きつける、絶え間ない雨

音だけが聞こえてくる。そこいら中に溢れていた、昆虫や鳥も、大急ぎで雨宿り先に隠れてしまったようだ。

やっと勉強に疲れを覚えた子供たちは、千香子が用意してくれたお菓子を食べながら、激しく降りしきる夕立の先の、ぼんやり霞む山々を眺めている。

「おばちゃん、明日も来てよかね」

登美子が、千香子に向って楽しそうに尋ねる。春雄たちも同じ気持ちになっていた。

「恵一も、皆と一緒に勉強できるのを、楽しみにしているのよ。遠慮しないでいつでも来てくれんね」

「明日は、夏休みの自由課題の植物採集ばするけん、みんなも一諸に行かんね」と、恵一が照れながら誘う。

恵一は夏休みに入ってから、少しずつ近所に生えている野草や花を集め、スケッチしたり、標本にしたりして楽しんでいた。三角から借りた植物図鑑で、名前や生態の特徴を調べているが、半分ほどは名前がまだ分からない。

恵一には、父と母の仲が今どうなっているのか、教えてもらえない。うまく元に戻れば、又、父のいる福岡で暮らすことになるのだろう。八月の盂蘭盆会（うらぼんえ）には、父に会いに母と二人で福岡に出掛けることになっている。

いつまで古市で暮らすのか、予測も付かない不安定な生活は、恵一の気持ちを次第に暗くしていた。しかしその一

方では、野山に囲まれた暮らしに、限りない魅力と好奇心が湧き出している。

恵一は、古市の四季ごとの美しさや、自由に動き廻る生き物たちの多さ、複雑な自然の営みに、目眩(めまい)がするくらい心が高揚していた。

だが何よりも、ここの子供たちの、自由奔放で自分勝手ながらも、優しくて真っすぐな、気持ちのよい心根に惹かれていた。次第、次第に、自分の胸の中にも、優しさと、逞(たくま)しさが沁みこんで来るのを感じていた。出来れば、ここの子供たちと、何時までも一緒に遊び勉強したい気持ちにもなっていた。

春雄たちの、恵一の家での勉強会は、夏休み中なんとかずっと続いている。三角は最初の頃には顔を出していたが、順調になってからは子供たちだけに任せて、来なくなっていた。

春雄たちは、親が用意してくれたスイカやキュウリなどの野菜や、たまにはお米などを、お礼代わりに持参することもあった。夏子は、自宅の畑で栽培している白菊の切花を、一抱えも持ってきた。もちろん、重い荷物を担いで恵一の家のある古谷集落まで、汗びっしょりで運ぶのは春雄の役目である。

盂蘭盆（うらぼん）の頃には、恵一母子は福岡の父親のもとへ、一週間ほど帰っていった。が、他の子供たちは、家族や親戚の人たちと先祖様を迎える準備で大忙しだったため、誰も知らなかった。

春雄も、家の傍にある墓地の掃除や、仏花の準備で追われていた。

春雄の家は、祖父母や叔父たちの墓の他に、先祖から伝わる一族の氏神を持っている。氏神は、正月と盂蘭盆には境内を掃き清めて，供え物をして祀らなければならない。

春雄の一族だけでなく、古市に古くから住んでいる家では、どこでも夫々の氏神を祀っているのだ。

山上家の氏神は、高橋集落から岩山集落に向かう途中の、山の奥にある。岩山集落への道は、湯の上川の支流に沿ってくねくねと続く狭い山道である。もちろん自動車は通れないが、リヤカーはやっと通行できる。食料や木炭などの重い荷物は、荷車やリヤカーを牛馬に引かせて運んでいる。

春雄は父親と二人で、盂蘭盆（うらぼん）の前日に氏神さまの清めに向かった。氏神さまの祀りの準備は家族だけで行う。明日から親戚がお参りに来るので、今日中に清掃と飾り付けを済ます必要があるのだ。

谷川沿いに続く山道は、杉の巨木の薄暗い中をきつい勾配で曲りくねりながら続いている。周りの木々が高過ぎる

ためか、どこでも喧しく鳴いているセミの声は、ここでは全く聞こえない。

細い谷川の岩が小さな滝をつくり、サラサラと、緩やかに滑り落ちる水音だけが響いてくる。外の暑さも、ここまでは届かないので、山道を登るにしては大した汗も掻かない。

氏神さまは、岩山集落に続く道を一時間ほど登ってから、右手に広がるヒノキ林の傍の、細い小道を辿ることになる。父は、最近は人が通った形跡もない小道を、持ってきた鎌で雑草や蔦を切り払い、後から通る人が歩き易くしていく。

十分ほど登ると、ヒノキ林の左手に目指す森が見えてくる。森といっても、カシとシイがその区画だけ鬱蒼と茂る雑木林なのだ。

雑木林の中央付近に、大きな蛤を半開きにしたように、二枚の大きな石が地面から突き立っている。これが山上一族の神聖な氏神さまの姿である。

二枚の大石の間には、太いしめ縄が張ってあり、その奥に小さな祠を祀ってある。森はカシ、シイ、クスノキなどの大木で覆われているが、氏神さまの周りだけは、榊の木が植えてある。

二人はまず祠に向かい、拍手を打ってお参りをする。それからカシの根と岩の間に設えてある、道具置き場の覆いを外して、箒や鎌を取り出した。

「春雄、落ち葉ば石舞台に集めて燃やしてくれんか。藪蚊が多うて堪らんばい」

氏神さまの前方の一段低い平地が石舞台である。斜面を削り取った土砂の上に、平たい石が敷き詰めてあるので、石舞台と呼ばれる。

春雄は、十畳ほどの広さがある石舞台に落ち葉を集め、持ってきたマッチで火をつけた。薄暗い湿った林の中の落ち葉は、燃え上がることもなく黒っぽい煙を、濛々と燻し出し始める。

三つの落ち葉の山を燻すと、上手い具合に煙が周りに立ち込め、藪蚊の大軍は目に見えて退散していく。春雄たちも煙くて仕方ないが、藪蚊に喰われるよりはマシである。

石舞台は、はるか昔に造られた当時は、名前の通り平たい石が敷き詰められており、年に一度の氏神さまを祝う日には、一族が集まり宴を開いたと言われている。今は、土砂も大分崩れて、舞台の半分ほどはむき出しの土になってしまった。

春雄の親戚も、正月や盂蘭盆（うらぼん）には必ずお参りするが、一族が一同に寄り集まることはもうない。

春雄は氏神さまの周りを掃き清め、父が背負い籠で持ってきた、しめ縄の張替えを手伝った。父は瓜や盆菓子を祠に備え、長い間手を合わせて拝んでいる。

周りからはツクツクボウシの声が、見上げるようなクス

ノキの上から降ってくるだけである。時には、山鳥が羽ばたく音も聞こえてくるが、姿は全く見えない。

雑木林の薄暗い小さな空間は、神の霊魂があちこちに宿っているのか、静かで神聖な佇(たたず)まいを見せている。この神域の全ての生き物や岩石、草木に神が宿り、春雄に話し掛けてくるのを感じることがある。

春雄はこの大きな石の氏神が、自分の家とどんな関わりがあるのか全く知らない。父に聞いても、昔からそうだと言うだけで、細かいことは教えてくれなかった。多分、もう誰にも分からないのだろう。

ただ、一族として祖先を敬うというより、祀らずには居られないような、強い惹き付ける力があるのは事実だ。

この森にお参りを繰り返すと、不思議に先祖たちが氏神に託した厳粛な思いが、分かるような気がするのだ。気の遠くなるような長い時間をかけて、代々の先祖たちが願いを込めた、祈りの力が渦巻いているのだろう。

地域の守り神である鎮守さまとも、全く性格の違う氏神の森は、父が老いて春雄の代になり、又、その子の代になっても、ずっと祀り続ける責任があるような気がする。

春雄の、ウナギの流し釣りは、湯の上川が大雨で増水したとき以外は、休みなく続けられている。盂蘭盆(うらぼん)の期間も、遠くの親戚が、泊りがけで遊びに来ているにも拘らず、夕

方には流し針を仕掛けに出る。その翌朝の五時には、もう仕掛けを引き上げに、川に飛び出していく。

そのほかにも子牛の世話もあり、朝夕の餌や寝藁の交換で、午前中はてんてこ舞いの忙しさである。

恵一の家での勉強会も、参加する子供の数は変化したが、何とか夏休み中続けられた。春雄はいつもだと夏休みの宿題は最後の二、三日で無理やり遣っ付けるのだが、今年はもうとっくに済んでいた。

第六章　　四年生　秋

楽しかった夏休みが終わり、体中、真っ黒になった子供たちが古市小学校に帰ってきた。子供たちは、楽しい思い出だけを胸に刻み込んできたのか、どの顔もキラキラ輝いていた。

「夏休みの宿題ば集めるけん、まず国語と算数から前に持って来んさい。学級委員は箱があるけん、順番に入れてくれんね」

三角は一人、一人の日焼け具合を見て声を掛け、ガリ版刷りの宿題の中身を確認して受け取る。春雄と登美子は、国語、算数と書かれた段ボール箱に、アイウエオの名前順に片付けていく。

「春ちゃん、チョウジ君の宿題は真っ白たい」

登美子が小さな声で、驚いたように春雄に囁く。

「先生がちゃんと見たんやけん、よかやなかと。みんな少しずつ頑張ったんたい」

春雄はいつもに似合わず、毅然とした目で登美子を黙らせた。夏休み中に、少しは成長したらしい。

春雄は今年の夏休み中、ずっと家の手伝いで明け暮れた。

朝、晩と、それこそ目の回るような忙しさを送ってきただけに、チョウジが、あまり宿題をして来なかったことも理解できる。家事の手伝い、農作業の手伝い、それに自分の小遣い稼ぎが、宿題より大事だと思っているのだ。

春雄だって、恵一の家での勉強会がなかったら、宿題は同じ程度で終わっただろう。チョウジは、父親が田植えの後に出稼ぎに出ていたから、もっと家の仕事が忙しかったはずだ。

古市小学校の子供たちにとって、夏休みはちょっぴり大人びた、自由と責任もある生活なのだ。子供だからと、勉強だけが大事な訳ではないのだ。夏休みが過ぎると、皆が少しずつだが大人になっていく。

「次は自由課題たい。作ってきた人は、名前順に前でみんなに見せるごとしようか」

自由課題とは、三角が家の仕事が忙しくても出来るように、親に手伝って貰ってもよいからと、自分のアイデアで何か作らせることにしたのだ。

皆がそれぞれ工夫を凝らした、自分の自慢の作品を披露する。

登美子は手袋の編み物を持ってきた。何で焼け爛れるようなこの暑い季節に、手袋なんか編むのか、と皆が不思議がる。だがよく見ると指の部分が変てこである。まだ、出

来上がっている訳ではないらしい。

三角先生がそのことを聞くと、登美子は平然と答える。

「まだ手袋は使わんもん。寒うなる頃には、きちんと出来とるたい」

夏休みの宿題なのに、登美子の大傑作は、冬まで待たなければ使えないらしい。それも、ほとんど母親が作るのだろう。

春雄も人のことは言えない。ウナギの流し針を仕掛けるポイントの図と、何匹掛かったかのデータだけだ。要するに、来年のウナギ釣りの準備を兼ねて、今年の釣果をまとめて書き出しただけなのだ。ほかの子供の作品も、似たようなものである。

そんな中で、恵一の植物採集の標本はすばらしかった。画用紙を半分に切ったものに、生えている状態をスケッチしたものや、葉や花の標本、そして図鑑に載っている正式な名前、生態の特徴などが書き込まれている。

恵一にとっては、宿題として作成したというより、自分がここで暮らしたことを、何かに残したかったのだ。父母の確執で、今まで住んでいた土地を離れ、まったく知らなかった遠い田舎で暮らすことは辛いことであった。父母への、目に見えない反抗もあった。

都会で育った恵一には、最初は子供たちが話す言葉も分からず、疎外感ばかりが強くなり、母親に愚痴る毎日だった。

たぶん顔つきも段々と暗くなっていたのだろう。

そんな中で春雄はよく話し掛けてきたし、他の子供たちも自由奔放に力強く生きている姿が、だんだんと魅力的に思われてきた。とにかくみんなが素直で、裏表のない正直な子供ばかりなのだ。乱暴者に見えたチョウジも、本当は優しい心を持っていることが分かり、この頃は親しみを覚えていた。

だが、恵一が最も心を惹かれたのは、国見山に連なる山々や、裾野に広がる木々や草花の美しさだった。縁側から見える、春夏秋冬、刻々と変わりゆく風景の色彩の豊かさは、南国特有の油絵の重厚さを思わせる。

「ここは、一年中いつも美しかねえ。福岡とは違う国に来た見たいやね」

今年の春に、千賀子が恵一と並んで縁側に座り、桜が咲き始めた山々を眺めて、溜め息混じりに呟いたことがあった。恵一の母もここの隣町で生まれたが、幼い頃に都会に引き移ったので、美しい風景の思い出は全くない。

「お母さん、僕、いつまでもここに居てよかよ」

「恵一は、お父さんと一緒のほうが、本当は嬉しかとやろ？」

千賀子が寂しそうに笑っていた。色の白い面長な顔立ちの母は、ヤマザクラの白い花が一番似合っている。どこの

母親より美しい、と思っているので、何時までも、二人だけで暮すのも悪くない。

この美しい野山の生き物にとって、厳しい環境条件があることは、植物を細かく調べて始めて分かった。可憐な花々を持つ小さな草木などは、夏に蔓延(はびこ)るクズなどの獰猛(どうもう)な蔦類に、完全に覆われ枯れてしまう。

暑くて湿気の多いこの地方では、植物でも、強いものが弱いものを飲み込み、強烈な繁殖力を見せている。

チョウジの作品もみんなを驚かせた。子供たちが見たこともないような形の凧(たこ)を作ってきたのだ。それもかなりの大きさであるが、折りたたみが出来るのだ。

父親が、関西方面に働きに出掛けた折、土地の子供たちが作っているのを覚えてきたらしい。古市小学校の子供たちは、今まで凧といえば、奴やイカのような平面の形しか知らなかった。

チョウジの凧は、三〇センチ四方の柱みたいな立法形で、長さが七〇センチほどもある大きなものだ。細い竹骨を四本、四方の角にたて、その内を十字型のつっかい棒で固定してある。このつっかい棒を取り外すと、ぐにゃっとした状態になり、細く丸めて持ち運びが出来る。

そして、四面に薄い紙が張ってある。紙は上下の両端だけに張ってあり、中央部分の二〇センチほどが空いている。

紙には、役者絵の出来損ないのような、変な顔が書いてある。チョウジは絵も下手なのだ。凧糸は、竹骨の上下の両端に四箇所結び付け、二メートルほど先で絞ってある。

「こんな凧は、先生も始めてみたたい。チョウジ君、揚げて見たんね？」

三角もびっくりした顔で聞いた。みんなもこの凧が、どんな風に揚がるのか見当がつかない。

「家の近くで、揚げて見たことがあるたい。よう揚がるけん、校庭で試してみるけん」と、言うより早く、チョウジと昌男たちは窓から飛び出して行った。

何しろ、窓から校庭に飛び出るのは馴れたものである。三角も苦笑して見送っている。

チョウジは、昌男たちに手伝わせて凧糸を器用に操りながら、凧を田圃（たんぼ）から吹きつけてくる夏風に乗せ始めた。凧は縦のままで、勢いよく揚がり始め、校庭の端に並んだ桜の頂（いただき）よりだいぶ高くなった。ほかの学級の開け放った窓からも眺める子供たちも出始めた。

「チョウジ君の凧は、よう揚がるねえ。変な凧ばってん、面白かっとたい」

登美子も、先ほどの国語や算数の宿題のことは忘れて、だいぶ感心している。

「足の代わりに、長か紙ば下げれば、もっと上がるとやなか」

図工が得意な健二が、自分も作りたそうな声で言う。凧揚げは、冬になってからの遊びだから、これから子供たちの間で、十分改良が加えられそうだ。

今までは、自分たちの村の中での遊びしか、知らなかった子供たちも、他所にはその地方特有の、色々と面白いものがあることを知り感心する。出稼ぎの親たちが持ち帰った、文化の交流を目を開いてしっかり受け止めている。きっと、今度の正月は、子供たちの凧揚げも、色々な種類が増えて楽しいものになるだろう。

二学期の始業式のころは、まだ真夏の暑さが続いていたが、それも次第に弱まり、秋は段々と深くなる。春雄たちの学級も、どんどん授業が進んでいく。校庭の桜も次第に枯れて色づき、真夏に見せつけていた、圧倒するような命の輝きを失い始めた。野山では、次の世代に命を繋ぐための準備として、あらゆるものが実を結び、今年の命は終焉の時を迎えていた。

チョウジたちのグループは、天気がよければ相変わらず外に飛び出して行く。野山には、おいしい果物がいっぱいあるし、泳ぎ場は、子供たちが居なくなって、魚がよく釣れ始めている。

三角は特に止めることはしないし、時にはみんなを引き連れ、チョウジたちと一緒に遊んでいる。怠け先生の本領

発揮である。田中校長も父兄からの苦情と、同僚教員たちの突き上げで、悩みは尽きない。

だが、春雄たち大半の子供たちは、もうあまり外には出なくなっていた。なんとなく三角の授業が、面白くなり始めていたのだ。登美子たちも同じように、一学期よりは熱心に教科書と取り組んでいる。

「春雄、牛に餌ばやったんなら、少しは勉強もせんか！」

今日も、母親の厳しい小言が飛んでくる。いつもなら、ウサギと子牛に餌をやる振りをして、遊びに飛び出してしまう。外が雨の日は、牛小屋の二階の寝藁に包まって昼寝するのが普通だが、最近は素直に教科書を開けてみることが多い。

夏子が遊びに来て、時々は一緒に勉強することもある。最近は、夏子もこれ幸いと、宿題を持って遊びにくる。夏子は、算数の計算が苦手なので、宿題が出ると春雄が頼りなのだ。

「春ちゃん、これ分からんけん教えてくれんね」

「この計算方法は、この前教えたのと同じたい。ちゃんと教室の授業ば聞いとるとね」

春雄は今度は母親みたいなことを言う。最近は自分の勉強をしたいので、付きっ切りで、夏子の宿題の相手は出来ないのだ。

「夏子は、引き算もよう出来んとに、掛け算が始まったら、どげんすればよかとやろか？　算盤ば習えば、少しは出来るごと成るやろか」と、夏子は真剣に悩んでいる。

「そのうち便利か道具が出来てくるけん、心配せんでよかと」

夏子の付き合いで、算盤まで習わされたら堪ったものではない。だいたい不器用な夏子が、算盤を上手く出来る訳がないのだ。

「春ちゃんたちの学級は、いつも外で遊んでいたばってん、この頃は、ちゃんと勉強ばするようになったとね？」

夏子は、この頃はちょっぴり大人びた言い方をする。春雄は、余計な心配をする前に（算数の勉強をしっかりせんか）と言いたいが、やはり言葉を飲み込む。

「そげんことは、夏ちゃんが心配せんでもよかたい」

「けど泉先生が、怠け学級の真似は絶対せんごと、いつも言うとるもん」

とうとう三角先生ばかりか、子供たちまで怠け者にされてしまった。

泉先生は若い女の先生だが、鈴木教頭の腰きんちゃくで、いつも言い成りになっているそうだ。規律のことには口煩（うるさ）いので、子供たちにはあまり人気がない。

「三角先生は怠け者じゃなかもん。うちらの学級は、少し元気が余っとるだけたい」

春雄は、口を尖らせて言い返す。夏子相手に怒っても仕方ないのだが、三角先生の悪口は許せないような気がした。夏休み中も、何とか勉強が出来たのは、やはり先生のお陰だと思っている。

でもこんなに、怠け先生、怠け学級と周りに言われ始めたら、先生も、これからの授業を厳しくするのだろうか。三角先生は、きっと校長先生に叱られるのだろうと、春雄はなんだか心配になった。

十月も半ばに入ると、湯の上川から吹いてくる風も大分冷たくなり、野山の景色は、もう完全に秋一色になっている。

春雄が昼食を食べ終え、校庭の桜の下に座っていると、山内ゆみ子が近寄ってきた。

「春ちゃん、ここから見ると空が狭かねえ。ときどき、息が詰まるごたるたい」

春雄も、言われて初めて上空を見上げてみた。細長い校庭の山側は、急峻な斜面が続くため、樹木に隠れて頂上は見えない。山ごと、覆い被さってくるような気がする。また、校庭を取り巻いている桜の古木が、重なるように並んでいるので、周りの風景は遮られている。桜の樹幹の隙間から、川下の山々が少しだけ覗いている。

「俺の家の付近も、山ばっかりで空はよう見えんたい」

春雄たちが住む高橋集落も、湯の上川に沿って、谷底み

たいな平地に固まっている。だから、空は本当に狭い。春雄の家も、急峻な裏山に遮られて、夏でも午後三時を過ぎると陽は隠れてしまう。冬など、布団を干す時間は、三、四時間ほどしかない。

「山の倉の分校からは、夜はきれいか星が全部見えるたい」

「北斗七星とか北極星も全部見えるとね」

春雄の家からは、北斗七星が半分しか見えないし、北極星はまったく見えない。星はいっぱい見えるが、星座の形が丸ごと全部見えることはあまりないのだ。特に北極星は、名前だけは皆も知っているのだが、一年中いつも北側にある国見山の高い山稜に隠れているので、春雄たちはまだ見たことがない。

「北斗七星は、柄杓の形ばしとるたい。・・・春ちゃん、今度の土曜日に、天気がよければ山の倉に遊びに来んね」

「うーん、学校が終わってから、純ちゃんとアケビ取りに行く約束ばしとるたい。夕方でよかなら行けるばってん」

「岩淵君の家からは、山道ば通って来れば近かよ。国見山に登る時に、よう通る道たい」

「そんなら、純ちゃんに聞いてみるたい。ほかに誰か誘うて見るね」

「田本さん達は来んだろうか。分校の池田先生に頼んで、芋鍋ば作って貰うけん」

芋鍋とは、サトイモやジャガイモなど、その時期に取れ

る野菜を、味噌仕立ての大鍋で煮ただけの簡単な料理だが、稲刈りの後など、大勢で食べる時によく作る。

「登美ちゃんは、食べ物があれば来るたい。探しに行ってみようか」

春雄は、登美子の都合を聞いてみなければと思う。登美子は、自分が知らないことがあるとすぐ怒る癖があるので、急いで探し始めた。春雄は、登美子にはどうしても強く出られないのだ。

登美子は、二階の講堂の奥にある小さな図書室で、知子や夏子たちと本を読んでいた。

「登美ちゃん、山内さんが今度の土曜日に、天気がよければ山の倉に遊びに来んか、と言うてるばってん、どうするね？」

「山の倉に行けば、帰りは夜遅うなるがね」

「分校から、きれいか星空ば眺めるとやけん、少しは遅うなるたい。夕飯の代わりに、分校の池田先生が、芋鍋ば作ってくれるとばい」

「芋鍋は、今頃美味しいかやろうね。そんなら行くたい」

登美子は体が大きい所為か、この頃は食欲が一段と旺盛になっている。春雄の作戦は、一先（ひとま）ず成功である。

「春ちゃん、うちも芋鍋ば食べたいけん、連れて行ってくれんね」

夏子まで食べ物に釣られて行きたがる。

「山の倉は遠かけん、小さい子は駄目たい。夜遅うなったら、夏ちゃんのお母ちゃんに怒られるもん」

「うちのお母ちゃんは、春ちゃんと一緒に帰るち言えば、大丈夫バイ」と、夏子が食い下がる。

「ばってん、夜中に暗か道ば歩いて帰るけん、やっぱり無理たい」

春雄は、去年のホタル見物のように、夏子を背負って帰るのはもう嫌だった。それに、夏子も去年よりだいぶ大きくなっているし、高橋までは一時間半くらいの時間が掛かるのだ。

「夏ちゃんは大丈夫たい。古谷まではうちらが一緒に帰るけん、連れて行けばよかがね」

登美子が最終決断を下す。夏子も、春雄が登美子に逆らえないことを知っているので、この頃は何かあると、登美子を後ろ盾に頼んでいる。

約束の土曜日は、朝から雲ひとつなく晴れ渡っていた。朝方の少しひんやりするような微風が、今日一日の晴天を保証していた。

春雄は、午前中の授業が終わると、教科書を机の中に押し込み、ランドセルを空にして学校を飛び出した。国見山でアケビを採って遊ぶのだ。

純と二人で、県道を国見山に向かって笑い合いながら登っ

ていく。これから、国見山のすぐ麓にある、純たちの岩間集落に向かうのだ。

秋の柔らかい日差しが、二人をゆったりと包み込み、県道と並ぶ湯の上川からは、気持ちのよい風が吹いてくる。川の側に茂る雑木の、枝葉に巻きついたヤマブドウが、角のある大きな葉を、風にサワサワと揺らしている。薄い紅色や黄色に色付き始めた葉の下には、濃い紫色の葡萄の房が、無数に垂れ下がっている。

二人は、チョウジの集落の少し上流にある小さな砂防ダムの天場に座り、ランドセルから弁当を出して食べ始めた。

砂防ダムは土砂でもうほとんど埋まり、中央に切り込まれた水捌け口を、僅かな量の水が流れ落ちている。天場から、ダム下に広がる浅い淵を覗くと、薄茶色のタカハヤが、群れを成して泳ぎ廻っている。

ダムの上流の、渓谷に覆い被さっている木々は、もう殆んどが赤や黄色に染まっている。所々に群生する、マツやカシの濃い緑色を引き立て役にして、鮮やかな景色を作り上げていた。

紅葉を見物する人もいない、静かなダムからの風景は、これからの僅かな期間で、見事に色を塗り替えていく。大自然の生み出した、ダイナミックで幻想的な名画を、ダムは静かに見守っているだけだ。

渓谷のずっと先には、国見山が緩やかに両翼を広げ、どっ

しりとした姿を見せている。国見山の頂上は、所々で火事が燃え盛るように、真っ赤に染まっている。もうここまで来ると、標高も大分高くなり、吹いてくる風も冷やかさを感じさせる。

「春ちゃん、よか所やろ。ここのダムは、毎年、今頃が一番きれいかとたい。学校の帰りにいつも寄るたい」

「図書館の本に載っとる絵のごたるねえ。・・・こげん美しか山の景色は、高橋なら見れんもん」

二人は黙って、自然が織り成す美しい景色を眺めていた。山間から、山鳥の甲高い鳴き声が、時どき鋭く高く聞こえてくる。大自然が描き出す名画のような美しい風景が、二人の子供の胸底に染み込んでいく。

「そろそろ行くばい。夕方には山の倉に着かんと、登美ちゃんに怒られるけん」

純は、春雄に声を掛けて立ち上がった。純だけでなく、四年生はみんな登美子には逆らえないのだ。二人は、国見山の中腹にある純の家に向かった。

純はランドセルの替わりに、古びたリュックサックを納屋から持ち出し、小さな鉈とナイフを放り込んだ。アケビが高い木の上にある場合、蔦ごと切り払い引き下ろすためだ。

「山の倉に行くとは、東の尾根に出るとが近かかけん、山道ば通って行くバイ」

この辺は純の遊び場であり、細い山道でもみんな知っているので、春雄は安心して後ろから付いて行った。

尾根に出る、獣道のような細い道筋は、降り積もった落ち葉で所々消えている。周りは、カシとシイの大樹海で段々と薄暗くなってきた。一日中、陽光があまり差し込まないので、下草も生えていない。厚く降り積もった枯葉が、腐りもせずフカフカと弾む。

樹林が疎らになっている所には、ヤブニッケイやツバキのようなあまり高くない木が、しっかりと陣地を確保している。暗い樹海の中でも、谷筋ではサワフタギが、白い枝木の先に藍色の丸い美しい実をつけている。

「マテバシイのドングリは食べられるけん、拾うて行くバイ」

純が、小径の周囲に無数に散ばっているどんぐりから、二センチほどの細長くて尖がった果実を拾い上げた。

「このドングリしか食べられんとね」

「ほかのも食べられるばってん、これが一番美味しかとよ」

二人は、マテバシイが密生している樹林の下で、脇目も振らずに拾い集める。枯れ葉が、折り重なるように敷き詰められているから、案外と拾い辛い。またせっかく拾っても虫に食われたり、腐っていたりで食べられるものは、そんなに多くない。

二人は、小笊（こざる）一杯ほどのドングリを拾い集めて、純が持っ

てきたリュックに詰め込んだ。

「少し休もうか。これだけあれば、今日食べる分は十分たい」

純はリュックの中を覗いて、ニコッと笑った。山に入る時は、おやつ代わりによく食べているのだ。

谷筋には、ちょろちょろと僅かだが水が流れている。細流の傍に転がる小さな石に座り、純がナイフで割ってくれたドングリを食べてみると、果肉はほんのりとした甘みと、少し苦い味がした。

「春ちゃん、あの木は珍しかろうがね。葉の真ん中に、花と実が付くとたい」

純が指差すほうを眺めると、一メートルくらいの低い木が、谷筋にぽつん、ぽつんと生えている。もう茶色に変わり始めた、楕円形の葉っぱの真ん中に、黒紫の丸い実がいくつか残っている。

「なんて名前か、知っとるとね？」と、春雄が聞く。

「五月の連休のときに、薄緑色の花が咲いとったけん、父ちゃんに聞いたら、ハナイカダち教えてくれた」

「きれいか名前やねえ。山の中の花には、似合わんたい」

「こん葉っぱば小川に流してみると、本当に筏（いかだ）に花が乗っとるごと見えるけん、そう呼ぶとらしか」と、純が教える。

山の中には、不思議なものが一杯ある。この花も、どん

な訳があって、葉っぱに実を背負っているのだろうか。純に聞いても、そんなことまでは知らない。

春雄は、恵一が何で植物採集に熱中するのか、その面白さが少し分かるような気がした。恵一に見せるため、ハナイカダの枝葉を一本だけ折り取り、ランドセルに大切にしまった。

「春ちゃん、内緒ばってんが、この先の少し水が流れている所には、サンショウウオも居るとばい。もう少し水が増えると、出て来るばってんね。俺いは、もう何回も見たけん本当たい」

「うちも見たかばってん、いつ頃ならよう見えるとね」

「春ちゃんが見たけりゃ、連れてくるたい。そうやね、来年の夏休みならよかたい。他ん人には、絶対見せんけんね。人が来ればすぐ逃げてしまうけん」

「うん、誰にも言わんけん。来年の夏休みに、また来るたい」

二人は薄暗い樹海を抜け、やっと国見山の尾根筋に造られた、やや幅の広い道に出た。西に傾いた太陽の光をまともに浴びて、少し眼が眩(くら)んでしまった。山の倉に出るには、南の方に連なる緩やかな道を、どんどん降りていけばよい。

「この道沿いには、アケビとムベがいっぱい生えているけん、取り易か所ば探していくたい」

純は、アケビ採りにはよく来るらしく、どんどん歩いて

行く。暫くすると、林を切り開いた跡地に、低い木に絡まって伸びているムベの、ピカピカと照り返す葉が見つかった。

赤黒く熟れたスモモのような丸い実が、枝に沿っていくつも見え隠れしている。純が鉈で、ムベが巻きついているナツハゼを、木の根元から切り倒し道の脇に引きずり落とすと、ムベの実が転がり落ちてきた。ムベはまだ熟していないものと、鳥に食われて中身がないものを捨てても、十個ほど採れた。

「ムベは、この先にも幾らでもあるけん、美味しそうな実だけ採って行けばよかたい」

純は贅沢なことを言う。春雄は全部持って帰りたかったが、純の手前もあって、少し青いものは渋々捨てた。

またしばらく行くと、谷筋の高いマツの枝に、茶色に熟れた細長いアケビが、いっぱいぶら下がっているのが見えた。ムベより少し小さい葉が、まだ薄い緑色を保っている。

ぶら下がっている果実の幾つかは、縦にぱっくり割れて中身がなくなっている。多分カラスに食べられたのだろう。この辺でもカラスが数多く生息しており、美味しそうに熟れたものは、いち早くカラスに食われてしまう。何しろ人間と違い、自由に木の上を飛び回れるから、とても敵(かな)うものでない。

「マツの木が高いけん、とても登れんね。アケビの蔦も、しっかりマツに巻きついとるけん、引き摺り下ろせんたい」

さすがの純も困った顔をしている。しかし、見過ごして行くには惜しいほどアケビが生っている。

「純ちゃん、谷の脇の崖に竹が生えとるけん、あれでここから引っ張れんかな」

春雄は、前に一度アケビ採りにいった時、この方法で上手くいったことを思い出した。

「うん、そいはよか考えたい。竹ば切って来るけん、待っとかんな」

純は谷に降りて、細い真竹を切ってきた。細竹の一番先っぽに、近くのエノキの枝を切り、鉤型状(かぎがた)を逆さにして蔦で括りつける。

「こればアケビの蔓(つる)に引っ掛けて、思いっきり引き下ろして見るばい」

二人で力をあわせて細竹を引くと、アケビが蔓ごと落ちてきた。まだ、カラスに食われていないアケビをもぎ取り、リュックとランドセルに入れる。

この竹竿の新兵器を使い、高い木に茂っているアケビを退治しながら、山の倉に向かった。ムベは、道端の低木に茂っているから、よさそうなものだけを採り込む。

春雄は、歩きながらムベとアケビを食べ比べてみた。ムベは白い果肉が丸まっていて、内に黒い大きな種が、一杯入っているのが見える。甘くて柔らかい味が、口中に広がった。アケビを割ってみると、白い果肉が皮の裏側に細長く

くっ付いている。アケビの味は、ムベより強い甘みがあり、口中に果実の香りと旨味が広がった。

山の倉の近くまで来たときには、二人のリュックとランドセルはパンパンに膨らんでいた。二人は、アケビ採りの新兵器を惜しそうに捨て、足取りも軽く、目指す山の倉分校に向かった。高くそびえるクスノキの枝から、大きなカラスが数羽恨めしそうに見下ろしている。

分校に着いた時には、もう日は落ちて、黄金色の夕焼けが空一面に拡がっていた。道路沿いの庭に、並んで植えられたマンリョウが、目の覚めるような真っ赤な実を付けている。校庭では、赤とんぼの大将格アキアカネが、真っ赤な腹を見せながら、群れを成して飛んでいた。

みんなは分校の炊事場で、大鍋一杯に煮込む、サトイモやジャガイモらと格闘をしていた。

「春ちゃん、遅かったばい。少しは手伝わんと食べさせんよ」

炊事場を覗いたら、料理長のごとく差配していた登美子から、いきなり小言が飛んできた。炊事場では、ゆみ子や次男、知子、恵一らが忙しく働き、夏子が登美子のそばに座っている。

「純ちゃんと、アケビば一杯採ってきたけん、みんなに食べさすたい」

「どんだけ取れたんね？　アケビば見せてみんね」

登美子は果物（くだもの）と聞いて興味が湧いたらしく、純と春雄の獲物入れを覗きにきた。

「わあ、本当やなか。こげん多かとは、思わんかったばい。みなで食べても余るたい」

「春ちゃんたちは、アケビ採りの名人やね。余ったら、夏子も貰ろうてよかね？」

「純ちゃんがほとんど採ったんやけん、俺が勝手に出来んたい」

「余ったら皆にあげてよかたい。俺いは、何時でん採りに来られるもん」

純が、小さな体で、太っ腹なところを見せて答える。本当は、二人とも歩いてくる途中で大分食べたから、もうそんなに欲しくもないのだ。

「登美ちゃん、分校の池田先生は、何処にいったんね？」

春雄は来た時から、池田の姿が見えないので不審に思っていた。

「先生は一年生の子の家に行ったばってん、すぐ帰って来るち、言うとった」

登美子が、先ほどゆみこに聞いたことを教える。先生が居ないと、あまり勝手なことも出来ないので、登美子も心配なのだ。

「一年生の子が、風邪でずっと休んどるけん、見舞いに行っ

とるとよ」

いつの間にか後ろに来ていた、ゆみ子が説明してくれる。

「ここにはお医者さんは居らんし、風邪くらいでは町の病院には行けんからね。先生も心配しとるとよ」

ゆみ子もよく知っている子供なので、ちょっと心配しているのだ。

池田が分校に帰ってきたのは、もう周りを夕闇が覆い始めた頃だった。子供たちの芋鍋は、何とか出来上がり教室に運んであった。

「やあ、遅うなって済まんたい。子供のお母さんと話し込んでいたもんやから、こんな時間なってしもうたばい」

「先生、芳江ちゃんの具合はどうだった。もう直っとった？」

ゆみ子が心配そうに尋ねる。風邪を引いて休んでいる芳江は、集落の奥まったところに住んでおり、歩いて二十分くらいの距離である。

「うん、熱も下がっとるけん、月曜日には学校にも来れるばい。ゆみちゃん、もう心配は要らんたい」

ゆみ子は安心した顔でうなずいた。

池田は三〇歳を過ぎたばかりであるが、もうこの分校で教えて四年目である。今は一年生から三年生まで、十二人

の子供を教えている。本校である古市小学校にも、職員会議などに月に一度は顔を出すので、春雄たちも、頭がぼさぼさの優しそうな顔だけは知っている。

まだ独身なので、分校に設けられた宿舎に住み、毎日の食事は自分で作っている。とは言っても、子供たちの親や近所の人たちが、おかずや果物をいつも差し入れてくれるので、そんなに不自由はしていない。

夜は何かと理由をつけて、村の若者たちが、焼酎とつまみを持って遊びに来る。若い男女と一緒の飲み会やおしゃべりは、貴重な息抜きになるので退屈はしない。分校自体が、山の倉集落の公民館を兼ねているようなもので、若者から年寄りまで何かあると寄り合うことが多い。

それに池田は、学生の頃から星の観察が好きだったので、ここから見える星空を何よりも楽しんでいる。夜になれば、街灯ひとつない村は真っ暗になり、国見山に連なる標高の高い丘陵地は、星を見るには最高の環境なのだ。

理科の特別授業として、夏休みなどには、近くに住んでいる小学生や中学生たちに、星の観察を教えている。天体望遠鏡は、二年前にボーナスをはたいて思い切って購入したが、薄給なので口径の小さなものしか手に入らなかった。それでも、月のクレーターや土星リングは十分見ることができるので、子供たちは大喜びである。

「先生、腹が減った。芋鍋ば早よう食べたか」

夏子は、風邪を引いた子供より自分のお腹のほうが心配らしい。春雄もいつもは、とっくに夕食が済んでいる時間なのに気付いた。

「そうたいね、先生も腹が減ったたい。ゆみちゃん、みんなに食器ば配ってくれんね」

みんなは給食用のアルミカップに、芋汁を勝手に注いで旺盛に食べ始めた。

「春ちゃん、美味しかね。採ったばっかりの芋だけん甘かねえ」

夏子が、一人前の評論家みたいに料理批評を述べる。しかし確かに味噌とサトイモやジャガイモだけの料理だが、採り立ての野菜の持つ豊かな甘味が、味噌の味に混じって口中に拡がっていく。

「アケビとムベもいっぱいあるけん、食べてよかとよ」

登美子の言葉で、春雄と純がランドセルとリュックを開けた。山盛りになったアケビとムベに、みんなが目を輝かせて喜ぶ。

恵一はあまり食べたことがないので、大分驚いた顔をしている。

子供たちは、それぞれ好き勝手に口に運ぶが、種が多いので食べ辛そうである。夏子も口いっぱいに頬張り、クチュクチュさせながら夢中に食べている。

暫く経つと、芋鍋とアケビで満腹になり、子供たちは幸せそうな顔で、足を投げ出して座っていた。

食事の始まる頃は、まだぼんやりと校庭が見えた窓の外も、今は濃い闇以外は、何も見えなくなっていた。

「そろそろ星が見え始めるばい。みんな外に出て見たらよかたい」

思い出したような先生の言葉で、子供たちはゾロゾロと校庭に出てゆく。村中を包み込む漆黒の闇を、教室の窓から放たれた蛍光灯の光だけがほんのりと照らし出している。一歩外に出ると、コオロギやスズムシ、クツワムシらが、声の良さを競うかのように、大合唱を繰り広げている。

静寂の夜空を見上げると、青黒い天空を背景に、無数の星たちが青白い光を放ち、華やかな饗宴を繰り広げている。分校の周りには、高い山も建物もないので、ぐるっと見廻せる三百六十度、全てが星空となっているのだ。

春雄たち本校の子供たちは、初めて見る光景に言葉を失い、呆然と立ち尽くしている。夏子は、手が届くほど間近に見える星々が、今にも頭に落ちて来そうで、首を竦めて空を見上げている。

東の空の上には、今夜の主役を星々に譲った半月が、ひっそりと上がっている。

「ゆみちゃん。今夜は天体望遠鏡で見るけん、用意ばしてくれんね」

池田が厳かにゆみ子に伝えた。天体望遠鏡は池田の自慢で、遠来の客にはすぐ見せたがる。

春雄は〈テンタイボウエンキョウ〉が何のことだか分からない。登美子の方を見ると、やはり首を傾げている。古市小学校では、そんなものは聞いたことも、見たこともない。

「テンタイボウエンキョウて何のことね？」

ボーとして、星を眺めている恵一のそばに行き、春雄は小さな声で聞いてみた。

「うん、遠くの星とか月とかを観測する望遠鏡たい。値段が高かけんあんまり持っている人は居らん。僕も、福岡のデパートで見たことがあるだけたい」

「そげんとば使わんでも、星はこんなによう見えるがね」

春雄は小さく呟く。彼には何のことか、全く分かっていないのだ。恵一は苦笑して、仕方なくまた星空を見上げた。

「先生、この辺に据え付けてよかね」

ゆみ子と次男が、教室からの光があまり届かない校庭の端に、三脚と丸くて細長い筒を運んできた。

「うんその辺でよかけん、組立てば頼むばい」

池田は、天体望遠鏡の組み立てをゆみ子達に任せて、星座の説明を始めた。ゆみ子と次男は、池田の助手を大分遣

らされたのか、慣れた手つきで組立て始めた。

「北西から南東の方に、薄い白か帯が続いとるのが、天の川たい。これは知っとるやろ？七夕のときに、彦星と織姫があの川を越えて会うとたい。真上に来とる天の川の左で、大きく光っとるとが彦星のアルタイルたい。その反対側の、大きか星が織姫のベガたい」

池田は簡単な星から説明を始めたが、春雄にはどの星も大きく見えるし、何しろ星の数が多過ぎてよく分からない。

「先生、織姫は何でベガち言うんね」

登美子も、星の位置はあまり分からないらしく、取り敢えず名前のことを聞く。

「織姫は中国での名前で、ギリシャの神話ではベガち名前が付いとるたい。星の名前は、世界中の国で色々違うたい」

「そんなら今見とる星空は、どこの国でも同じように見えるとね」

春雄が少し驚いて尋ねる。高橋で見る星空と違うので、ここだけでしか見えないと思っていたのだ。

「うん、地球が一日一回ぐるっと回転するけん、明日の朝頃には、ギリシャでも今と同じような星空が見えるとたい」

「凄かことやねえ、ギリシャの小学生も、明日はこん星空ば眺めとるとやろか？」

春雄の、トンチンカンだが夢のある感想に、現実主義者の登美子が足で蹴って答えてくる。

「先生、望遠鏡で見ると織姫様が見られるとね」

夏子は子供らしい関心を示す。先生はほとほと困った顔で星空を見上げる。

「夏ちゃん、白く光っとる星はね、太陽と同じで物凄い温度で燃えとるんよ。だから、織姫は住んで居られんたい」

先生も、あまり上手い説明ではないが、何とか夏子を納得させる。

「そんなら、望遠鏡でなんば見るとね」

夏子は不思議そうに聞き返す。

「お月さんの南に、黄色くボオーとした大きか星が見えるだろう。あれが土星たい、望遠鏡で見ると、面白か輪っかが見えるばい。地球と同じ太陽の惑星やけん、お月さんみたいに、太陽の光ば受けて光っとるたい」

春雄たちは、期待と不審な気持で、ゆみ子が組立てた望遠鏡を、遠くから眺めている。

望遠鏡は、屈折式と呼ばれる細長い単純な構造のもので、対物レンズが八センチあるのが池田の自慢である。これで百倍の倍率までは、何とか見える。

「ファインダーの方向は、先生が土星に合わせるけん、皆はこの接眼レンズば覗くだけでよかたい」

池田は鏡筒の上にちょこんと乗っている、ファインダーと接眼レンズを説明して子供達に覗かせた。

最初に登美子から覗く。背が高いので椅子は要らない。

「うわー、星に大きか円盤が付いて回っとるばい。宇宙船みたいな変な形ばしとる！」

登美子は一人で興奮している。皆も早く見たくて、望遠鏡の傍に寄って来た。

続いて恵一、夏子たちが覗いて、同じように驚いている。春雄も早く覗きたかったが、次は夏子の順番だった。夏子は背が低いので、椅子に立って接眼鏡を覗く。

「ふーん、お星様は、こんな形ばしとるんね。輪っかがフラフープみたいに、くるくる回るんやろね。飛行機で行けんとやろか・・・・先生、土星が見えんようになったバイ！」

池田先生が替わって接眼レンズを覗く。

「これは、夏ちゃんが長い時間ば覗いたけん、土星が大分移動してレンズから外れたんたい」

「星はこげん早よう動くとね」

「地球が速いスピードで回転しとるけん、土星が動いたように見えるとばい」

池田先生は、子供にも分かるように丁寧に教えてくれる。しかし、星や宇宙の関係など考えたこともない古市の子供たちには殆んど理解が出来なかった。山の倉の子供は、天体望遠鏡が見られるし、いつでも教えてくれる先生が傍にいて幸せである。

やっと春雄の順番が来た。接眼レンズは望遠鏡の一番端から、直角に上に折れ曲がり、覗き易いようになっている。

接眼レンズに目をつけて覗いてみると、いきなり土星のリングが目に入る。本当に漫画で見る、円盤型宇宙船に似ている。

「先生、輪の中に細か溝が見えるばってん、どうしてね」

「あの輪は、小さな星屑が土星の引力で回っとるけん、隙間があるとたい。〈カッシーニの溝〉ち名前がついとるんよ」

しばらく眺めていると、土星がレンズの中央からだんだん外れて行くのが分かった。春雄は、地球がこんなに早く回転するものかと、不思議な気がしている。地面が揺れていないか、と、心配して足元を見たが大丈夫だった。

「今度は、月に望遠鏡ば合せて見るばい。今日は半月だけん、月の半分しか見られんばってん、面白かたい」

引き続いて、春雄が最初に眺める。

「うわあ、月はでこぼこしとるたい。にきびが一杯出来とるごたる」

春雄のユニークな感想に、池田先生は苦笑しながら説明する。

「でこぼこしとるんは、クレーターと言うて隕石なんかが月にぶつかった時に出来たんたい。小さいのでも、直径が三キロメートルくらいあるバイ」

「海か湖のごたる大きか丸い窪地は、名前があっとね」

「あれは、ラングレヌスち名前のクレーターたい」

子供たちは、また代わる代わる覗きながら、自分の目で見

上げる月が、望遠鏡で覗くと別物に見えるので驚いている。

春雄も、星や宇宙が初めて身近なものに感じられた。今までは美しい夜空を見ても、星が一杯あると思うだけだった。星に名前が付いていて、星の集まりを神様や動物にたとえて、星座と呼ぶことも始めて知った。

自分の家で見上げるのとはまったく違う、山の倉でみる星空の美しさと不思議さが、何時までも心の中に残っていた。由美子たちがいつもこの美しい夜空を眺めているのが、なんだか羨ましくなってきた。

池田先生は田中校長に用事があるので、春雄たちと一緒に古谷まで行くことになった。

春雄は、ゆみ子たちに分校前でお別れを言って別れたが、また近いうちに来ることを約束した。ゆみ子は、今まで見たこともない嬉しそうな顔で、サヨナラと小声で言った。顔と不釣合いなほど大きな目が、薄暗い蛍光灯の光に、恥ずかしそうに笑っていた。

古谷までの、狭くて曲がりくねった暗い道を、池田の懐中電灯を頼りに下って行く。周りの草むらでは、あらゆる種類の虫たちが、喧し過ぎるほど大合唱で道案内をしてくれる。

池田は、星と星座の名前などを、面白く、ときどき夜空を仰ぎ見ながら、懐中電灯を振り回し話してくれる。子供たちは先生にくっ付いて、目を輝かせて聞いている。

春雄は、古谷集落が近づくとだんだん狭くなる星空を眺め廻し、山陰に隠れていく星の神々が、別れを言っている気がして寂しくなった。

夏子は、登美子に手を曳かれながら、コックリ、コックリと船を漕ぎ出している。いつものことだが、ここから背負って帰るのは、春雄の役目である。春雄は、いっぺんに夢が壊れたような気がした。

十月の終わりには、恒例の全校生徒による遠足が催されることになった。このときは山の倉分校も勿論参加する。行き先は毎年決まっており、山の倉より山道を大分南に辿った先にある、三角点台地である。

ここには地図作成や、道路工事を行うときに使う、二等三角点が明治の初めに設けられたので、何時(いつ)となく三角点台地と呼ばれるようになった。国見山から、なだらかに続いてきた丘陵地が、ここから一気に急傾斜となり、複雑な様相を見せて不知火海に落ち込んでいく。

三角点台地に立つと、眼下に水俣や湯の上の町や集落が見渡せる。複雑に入り込むリアス式海岸の入り江に、細長く、べったりと張り付いているのが集落である。その先には、息を飲むような真っ青な海原が、陽を受けると四季折々の模様を描き、キラキラ輝いている。

土地の人たちが、唯一の宝物として誇らしげに語る、こ

の美しい豊かな海が不知火海である。海原の向こうに見えるのは、幾重にも重なる緑の山々と白砂で覆われた、天草の島々である。

春雄は昭雄と一緒に、アケビ取りの帰りに訪れたときは、丁度夕陽が落ちきる時分で、不知火海から天草の島々までが、赤や茜、紫など七色の彩りに染まっていた。二人は、目を見張るような景色に、いつまでも立ちすくんだ思い出がある。

だが、ここの絶景と言われる景色も、到達するには山の倉集落や岩山集落からの山道しかないので、土地の人もあまり見に来ない。古市小学校の子供たちが春秋の季節に遠足に来るほかは、土地の青年団の男女が、農閑期にハイキングがてらに来るだけである。

四年生の怠け教室では、国語の時間を課外授業に振り替えて、みんなで遠足の準備をしていた。三角は子供たちに全部任せて、職員室で校長先生と話し込んでいる。

春雄たちは、先日のホームルームの時間に、四年生の遠足の出し物を、あれこれ話し合い、今年はいつもの歌やお芝居と、違うものにしようと決めた。しかし、皆が好き勝手に、色々な案を出しても、実現可能なものになるとあまりなかった。

そこで最後には、チョウジが考案した凧をみんなで揚げることになった。夏休みの宿題で作ってきた凧を、校庭で高々

と揚げた印象が、まだ鮮烈に子供たちの脳裏にに残っていたのだ。

三角点台地は、いつも不知火海からの強い海風が吹いている。子供たちが集まって、学年毎の出し物をする付近も、風が強いので樹木は育たず天然の芝地となっている。確かに、凧揚げにはもってこいの場所なのだ。

登美子と春雄の学級委員二人が指図して、各班五人ずつでの凧作りは順調に進んでいる。凧作りの指導者は、もちろんチョウジである。チョウジは、この頃いつものように窓を飛び出しては、凧作りの材料集めに飛び回っていたのだ。もっとも凧の材料は、骨になる細竹と障子紙があればよいのだが・・・・・。

「チョウジ君、みんなのが大体出来たばってん、大丈夫か見てくれん」

登美子は、各班の凧が不恰好なので心配なのだ。しかし、多少重くなっても不恰好でも、あれだけ強い風が吹けば、凧は必ず揚がる筈だ。

「凧は大丈夫だけん、足のほうば、きちんと作ったほうがよか」

実は、凧にぶら下げる長い紙に、何を書くかは先生にも秘密にしてある。凧は丸めて持ち運びできるし、足の紙は当日三角台地に着いてから、糊で貼り付けるだけで済むのだ。みんなは凧足になる紙に、それぞれ工夫を凝らした絵

を書き始めた。

当日は、空には少し雲が出ているが、風のまったくない穏やかな日和から始まった。子供たちは古市小学校に集まり、先生が点呼を取った後は、学年ごとばらばらと出発した。三角点台地までの、コースや休憩は引率の先生がそれぞれ決める。学芸発表会が始まる、午後一時までに着けばよいのだ。

三角が引率する、我らの怠け学級は、いの一番に学校を出発した。学校の外で遊ぶことには、日頃から慣れているので、たいした準備や点検など要らないのだ。山の倉で、ゆみ子達と合流しのんびりした行軍で、三角台地を目指して進む。

途中には、樹木の裏側にムベやアケビが、まだ赤黒い果実を残している。今年、まだムベを食べていない子供たちは、大喜びで採って廻る。怠け学級は、これを目的に一番に学校を出発したのだ。

春雄は、ムベとアケビはもう食傷気味なので、真っ赤に色付いたアキグミや、地味な黒紫色に熟したイヌビワの実を探して歩く。採れたものを、登美子やゆみ子に分けてやる。アキグミのほんのりとした甘みが、秋の深まりを感じさせる。

「ゆみちゃん、美味しかね、こげんとば何時でも食べとるの？」

登美子が、羨ましそうにゆみ子に尋ねる。

「山の倉は、秋が一番よかたい。山の美味しか果物が、何処ででも採れるもん」

ゆみ子は、学校の教室にいる時より、ずっと輝いて見える。

怠け学級の行進に驚いたのか、ときどきコジュケイやヤマドリが、木々の下から飛び立って逃げる。ヤマドリが、黒と薄茶色の斑の美しい長い尾を見せて、木の枝の間を必死に逃げていく。大分晴れ間が出てきた上空では、雲の間をトビがゆっくりと輪を描いている。

三角点台地に着いたのは、もう昼前だった。各班毎に持って来た凧を組み立て、足代わりの長い紙を貼り付けた。

思い思いに持って来た弁当を、仲間で交換しながら食べていると、次々にほかの学級の子供も到着する。

「春ちゃんたち四年生は、こんな時は一番やねえ、勉強のときと大分違うたい」

夏子が、後ろに来て感心している。このごろ、一段と生意気なことを言うようになってきた。ついこの前の、山の倉からの帰り道で疲れて眠り込み、途中から春雄に背負われて帰ったことなど、とっくに忘れているらしい。

「夏ちゃんも、早く弁当食べて来んね。後で、一緒に遊びに連れて行くけん」

隣に座っていた登美子が、夏子を追い払う。このクラスの悪口は、学級委員として面白くないのだ。

弁当を食べ終わり、登美子やゆみ子と星空の話をしていると、夏子も、早々と弁当を食べ終え飛んできた。夏子は、担当の泉先生があまり好きでないのか、この頃は、登美子の傍で遊ぶことが多くなっている。

「登美ちゃん、四年生の学級は、今日の発表会に何ばするとね」

「うちらは、凧揚げばするだけたい。もう準備は出来取るけん、遊びに行けるとよ」

「凧揚げだけね、やっぱり怠け学級やね。簡単なことばっかしするとやもん」

夏子の指摘は、多少は当たっているのだ。ほかの学級は、今日の発表会の準備で毎日放課後に、コーラスやお芝居の練習をしていた。何にもしないで、すぐ帰ってしまうのは四年生だけだった。

春雄は、ゆみ子と恵一を誘い植物を観察して歩いた。何しろ恵一は、古市に生えている草花については先生達より詳しくなっている。

「これはリンドウたい。此処は少し寒いけん、こんなにいっぱい生えとるんやね」

恵一が教えてくれた草は、周りのススキの間に隠れるように、密やかに紫色の花をつけている。五十センチほどの茎に、笹のような黄色の葉が二枚ずつ付き、その上に釣鐘を上向きにした形の花が、二つ付いている。まるで、人目

を避けて寄り添う恋人みたいだな、と、春雄は何となくゆみ子のことを考えていた。

目を凝らしてみると、見渡す限りに広がるススキの草原の中に、リンドウがポツリポツリとどこにでもに咲いている。ススキは、強い風にあおられて、白い波のようにサァーと揺れていく。

「あそこに、セイタカアワダチソウが生えとる。こんな山奥には珍しかたい。町の方から、風に乗って種が飛んで来たんやろか」

ススキの丈より高い、毒々しいほどの黄色い花が固まって咲いている。外来種のせいか、この地方では、海岸線を南北に走る国道沿いでしか、まだ見掛けることはない。

各学年の学芸発表会は、一時を過ぎて田中校長の挨拶の後に始まった。

三角点台地にある、ススキの草原の間に広がる芝地に、みんなは思い思いに座っている。

一年生から順に、歌や踊り、お芝居と、稚拙だが子供なりに一生懸命に発表していく。夏子も、この時ばかりは真面目な顔で、大声で歌っていた。

四年生の順番が来た。登美子が代表して演目を説明する。

「四年生は日ごろの感謝を込めて、三角先生の凧ば揚げます！」

校長以下の先生たちは、何のことだか分からずポカンとしている。それもその筈で、三角でさえ、何が出てくるのか知らないのだ。

三角は、こんな時には全て、子供たちの自主性に任せているのだ。

春雄たちは、少し離れた三角点の付近まで戻り、持って来たチョウジ式凧を、揚げ始めた。五人ずつが組を作り、十本の大きな立方体の凧が揚がる。

「うわー、凄か凧たい！」

「変な形の凧ばい！」

皆は目を見張っている。見たこともない四角い立方形の凧が、不知火海から吹きつける強風に煽(あお)られ、上空に舞い揚っているのだ。

凧本体の紙の部分には、三角の似顔絵がクレヨンや絵の具で描いてある。絵は下手であるが、どれもこれも、にこやかに笑っている顔だ。

足に当たる、細長く垂れ下がっている紙にも、子供たち一人一人が描いた、三角の顔が描いてある。

三角先生の顔、顔、顔の凧が、晴れ渡った上空にはためいている。凧は長い糸を振り切るように、澄み切った青空を忙しく駆け廻っている。

三角は呆然(ぼうぜん)として、自分の顔がはためく上空を見上げている。子供たちが、こんなに自分のことを慕っているとは、

考えたこともなかったのだ。

校長の田中は、胸に熱いものがこみ上げ、年甲斐もなく涙ぐんでいる。こんなに子供たちに愛される先生は、久しぶりに見たのだ。

分校の池田も、この前会ったばかりの子供たちの、楽しい顔付きに限りない好意を覚えた。由美子たちは、いいクラスに入ったと嬉しくなった。

教頭の鈴木と、腰ぎんちゃくの泉は、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

座っている子供たちは、なんだか分からないが、楽しい気分になって自然に拍手を始めた。だんだんと大きな拍手になり、ススキの草原を、どこまでも埋め尽くして行く。

いくつかの凧は、あまりの強風に糸が切れ、一段と高く舞い上がりながら、遥か彼方に飛んで行った。

春雄と登美子はこれでよかったと、胸を撫で下ろしていた。三角と四十八人の子供たちは、この光景を何時までも忘れることがなかった。

第七章　四年生　冬

冬休みに入る前の寒い日曜日に、春雄は父親と、山の中にある炭焼き小屋に出かけた。

春雄の父は毎年、稲刈りも終わり農作業が多少暇になると、山に籠もり炭を焼いて生計の足しにする。特に、正月前は炭の需要が多くなるので、炭焼き窯に付きっ切りになる。

炭焼き小屋は、春雄が夏に訪れた氏神から、もう少し岩山集落のほうに登った、深い森の中に築かれている。付近に広がっている雑木林から、カシ、シイ、クヌギの雑木を、山の所有者から買い付けて焼くのだ。

父親が家に不在のときには、春雄が一人で親牛と子牛の世話をするので、炭焼き小屋に行くことは滅多にない。今日は、窯に火を入れる日なので、手が足りずに借り出されたのだ。

岩山集落に向かう小道を登って行くと、夏には騒々しかったセミや虫の声はまったく聞こえず、遠くの方でキイー、キイーとモズが甲高い声で鳴いている。道に沿った小さな渓流は、もうほとんど水がなくなり、砂地には小石や乾燥した水苔が、寒そうに転がっている。

「春雄は、勉強が少しは出来るごと成ったとか」
「勉強は、あんまり好かんばってん、前よりはテストの点数は上がったたい」
「冬休みは、牛の世話ばずっとして貰うばってん、少しは勉強もせんばいかんぞ」
「子牛は可愛かけん良かたい、ばってん、親牛は少し恐かたい」
「子牛は、今度のセリに出すけん、よう肥らせとかんばな」
「父ちゃん、なんで子牛ば売ってしまうとね？　かわいそうやがね・・・」
「もう生まれて一年に成るけんな、雄牛はそげん長うは、飼うて置けんたい」
「売られたらどうなっとね？」
「買うた人次第ばってん、やっぱり食肉にするしかなかろう」
雌牛なら農耕用に使いながら、子供を産ませて、長く飼うことが出来る。春雄の家で飼っている親牛も、七歳を超えている。
しかし、雄牛は出来るだけ早く大きくして、食肉にするしかないのだ。今の子牛が生まれたとき、父親が、がっかりしたのもその所為（せい）だった。
炭焼き小屋までの長い道のりを、春雄は黙って歩き通した。どんなに可愛がっても、イヌやウサギの小動物と違い、

どうにも成らないことなのだ。貧乏な農家で生まれた子牛の、これが運命でしかない。いや、どんなに裕福な農家に生まれても、結局は長く飼える訳ではないのだ。

炭焼き小屋の付近は、もうすっかり冬景色である。小屋の近くで青々と茂っていたクリやカシワはすっかり葉を落とし、カシやシイ、クヌギも、葉は付いているがくすんだ緑色になってしまった。炭焼き小屋から少し下った斜面に、僅かに残っているハゼノキの紅葉が、哀しく風に揺れている。

小屋の周りや谷沿いに固まって生えているヤブツバキだけが、鮮やかな紅色の花を付け始めている。これからの冬山を彩り、楽しませてくれる数少ない樹木である。

春雄親子は、炭焼き窯の前にお神酒と榊を供え、山の神に炭の出来を祈ってから、窯口を塞いでいたレンガを取り除いた。

窯口を塞いで置かないと、蝙蝠が住み着いてしまうからだ。夜になるとフクロウなどの夜型の鳥に混じり、コウモリが群れを成して飛んでいたりする森なのだ。

「俺が窯の中で木ば積むけん、春雄は炭木ば運んでくるとぞ。始めはカシからたい、良かね？」と、父が言いつける。

カシとシイの炭は、高価なので奥のほうに積み、クヌギ、クリなどは比較的近くに置くのだ。しかしそれほど単純なものではなく、火の廻り方などを考慮するので、熟練と勘

が炭の出来の良し悪しを決める。

父親が炭木を窯に積み終わると、まず、窯口の喉の大部分をレンガで塞ぎ、木を焚く場所を確保してから、一番手前の口をまたレンガで塞ぐ。

このとき薪を放り込む口の部分だけは残し、三,四日して炭木に十分火が廻ったら完全に塞ぐ。レンガの隙間は、付近から掘り出した赤土を、谷川の水で捏ねて塗りこむ。

窯に火を入れる前に、もう一度山の神を祀り、窯の入り口の焚き場に火を附け、どんどん薪を放り込む。しばらくすると窯の後ろに突き出た煙突から、勢いよく黒い煙が出てきた。

順調に火が廻りだした証である。父親はほっとした顔をしている。後はただ煙が白っぽくなるまで、火を焚き続けるだけだ。

父は夕方まで、窯の脇に作られた炭焼き小屋で仮眠をとる。最低でも三日は、火を焚き続けなければならないので、手伝いが居る時は少しでも休んで置く必要があるのだ。

小屋には、材木を伐採する鋸や斧などの道具や、寝泊り用の布団が入れてある。また、鍋、窯、米、味噌の炊事道具も用意してある。水は、谷川を流れるものを汲んできて、沸かして使えば足りる。

春雄は一人で火の番をしながら、国見山に連なる、遠くのくすんだ山並みを眺めていた。谷間から吹いてくる風は、

冷え冷えとしているが、窯の入り口はちょうど良い暖かさで、時には眠気が襲ってくる。

窯の薪(まき)が、パチッ、パチッと弾ける音のほかは、時どき強い風が、山の樹木を鳴らしているだけである。

春雄は強い眠気におそわれ、うとうとしてきた。暫(しばら)くしてフッと目を覚ましあたりを見廻すと、雑木林から三〇センチくらいの小人がぞろぞろ出てきて、山積みになっている薪に腰掛けた。頭の毛は真っ白で、仙人みたいな格好をしている。

「俺たちは、山の神である。鳥は大事な友達だ。獣は仲の良い友達だ。草木は昔から友達だ。みんなを大事にすれば遊んであげる」と、一番偉そうな小人が口を利く。

神々は、口々に、エイホウ、エイサエイホウと歌いながら、窯場の前で奇妙な踊りを始めた。何処からか、祭りのような賑やかな音まで聞こえてくる。なんだか楽しそうなので、春雄も一緒に踊りの輪に加わった。

「鳥は友達、エイホウ、獣は友達、エイホウ、草木も友達、エイホウ」

春雄も一緒に歌いながら、何度も何度も、炭焼き小屋の周りを踊り歩いた。体が温もり、春先の日向ぼっこの気分になった。林の中を見ると、コジュケイやヤマドリ、ヒヨドリらがいっぱい出てきて、声を上げて笑っている。春雄は、

鳥の笑い顔を始めてみた。

林の中はヤマザクラの白い花が咲き始め、ヤマモモが薄赤い実を付け、アケビが熟れて今にも口を開けそうになっている。

ウサギも、イノシシの親子連れも、楽しそうに駆け回っている。ふと林の奥に目を遣ると、いつも面倒を見ている子牛が、動物の輪に入らず寂しそうな目で春雄を見詰めている。

どの位経ったのか、もう思い出すこともできなかった。

「春雄は、俺たちと遊んだから、もう大事な友達だ。お礼にお前の好きなものを上げよう」と、突然告げられた。

一番偉くて長老らしい、爺さん神様が、欲しいものを言えと促す。

春雄は急いでしゃべりたかったが、なぜか口が動かせない。何度も何度もしゃべろうとしたが、どうしても声が出なかった。仕方なく、遠くに立っている子牛を指差した。

神様が子牛の方を向いて手招きすると、子牛は元気よく春雄の傍に走ってきた。子牛の大きな目が、泣いているように涙で濡れている。春雄はなんだかゆみ子の目を思い出していた。

突然、ギイーと高い声を上げて、ヤマドリが雑木林から飛び立っていった。春雄が、あわてて周りを見渡すと、子牛はもういなかった。神様も何処にもいないし、花も咲い

ていない。背中に寒い風が吹き付けている。炭窯の焚き口を見てみると、薪の火が消えかかっている。急いで薪を継ぎ足して、やっと今の出来事は夢だったことに気づいた。

春雄は、なんだか惜しい気がして、も一度夢に帰るつもりで目を閉じたが、目が冴えて眠れなかった。

二学期の終業式の日に、有り難くもない通信簿を貰った。中を恐々見たら、前より大分良い点が付いていた。もう間もなくすると、待ちかねた正月を迎えるので、みんなの顔も嬉しそうである。

夏子と並んで帰り始めていたら、登美子が後ろから声を掛けてきた。

「春ちゃん、ケイコ先生にちゃんと年賀状ば書かんといけんよ。住所は分かっとるね？」

春雄はこの頃、すっかりケイコ先生のことを忘れていた。

「分からんばい、登美ちゃん知っとるとね」

「これからうちの家に寄んしゃい。教えてあげるけん」

夏子も付いてくるので、三人で登美子の家に向かう。登美子の家は古谷集落のど真ん中にあり、門も大きな構えで、周りを圧倒している。なんだか登美子が、そっくり門になったように辺りを睨んでいる。

「あら、春ちゃんじゃなかと。いつも登美子が迷惑掛けとるとじゃなか。こちらの子供さんは誰だっけ？」

登美子のお母さんが出てきて、春雄と夏子を陽気に迎え入れた。

「おばさん、こんちわ。二年生の竹本夏子です」

「こんちわ、ちゃんと挨拶が出来っとやね。登美子より、大分、上手(うま)かばい」

登美子は母親を無視して、さっさと自分の勉強部屋に、二人を連れこんだ。二階にある、湯の上川の樹々が見える景色の良い部屋である。

「家のお母ちゃんは、お客が来ると良くしゃべるけん、好かんたい」

登美子は、自分のことは棚に上げて、母親のおしゃべりに文句を言う。春雄は、登美子の煩いところは、母親にそっくりだと言いたいが、さすがに我慢する。

「これが、ケイコ先生の住所たい。まだ自分の実家に居(お)らすけん、ここで届くたい」

登美子は、校長先生に教えて貰った住所を差し出す。春雄は、鉛筆でノートに住所を書き写した。夏子は漢字が分からないので、年賀状の宛名は、春雄が代筆することになる。

三人は、冬休みの計画などを、夢と期待を膨らませて話し合っている。冬休みは短いので、そんなに一杯、希望が叶えられる訳ではないのにだ。

「春ちゃん、恵一君が、三学期から福岡に帰るとは知っと

るとや？」

「知らんばってん、それ本当なこつな？」

「恵一君のお母さんが、昨日挨拶に来らしたち、母ちゃんが言うとった。今日、学校で恵一君に聞こうと思うたばってん、休みだったもんね」

恵一は、父母の仲が悪くなり、一時的に別れて暮らして居ただけなのだ。夫婦の仲が元に戻れば、福岡に帰るのが当たり前のことである。

「寂しくなるたいね。夏休みにあげん世話に成ったとやけん、お礼ばしたかね。もう会えんとやろか」と、春雄が聞く。

春雄は心が空っぽになり、寂しさが体中に広がる気がしてきた。恵一が居なくなれば、誰に勉強を教えて貰えるのか、今から心配でもある。

「もう引っ越しの準備で急がしかやろ。何で、もっと早よう、言わんかったとやろか」と、登美子が少し怒って言う。

登美子は大分不満顔である。学級委員としての立場より、憧れていただけに残念なのだ。

「これから、恵一君の家に行って見ようか。居るかも知れんばい」と、春雄が提案する。

春雄は、このまま別れてしまうのが堪らなく残念だった。出来れば、もう一度顔を見て置きたかった。

「うん、それが良かバイ。とにかく様子ば見に行ってみるたい」

登美子も、恵一にもう一度会って、サヨウナラをちゃんと言いたかった。

三人は、今年の夏休みの特別学習を思い出しながら、恵一の家に続くお馴染みの坂道を登って行った。

玄関では、恵一の母親が迎えてくれた。相変わらず、白くて小さな顔だが今日は汗が光っている。引越しの荷造りを、一人でしていたらしい。

「おばちゃん、こんにちは。恵一君は居らんとね」

登美子が挨拶する。いつもより少し硬くなっている。

「こんにちは、今日は新らしか学校ば見に、福岡に行っとるとよ」

千香子は、いつもより明るい感じの笑顔で答える。やっぱり、福岡に帰るのは嬉しいのだ。

「おばちゃんたち、何時(いつ)引っ越すと？」

「お父さんが、正月は福岡で迎えたいち言うけん、明後日ぐらいには引っ越す積もりばってんね」

三人は夏休みに勉強した、懐かしい部屋に通された。窓から見える向かいの山々は、落葉樹の葉が落ち、木々が枯れてしまったように、山全体が茶色っぽく見える。

夏には庭を飛び廻っていた昆虫も、今はまったく姿が見えない。

「恵一も、皆に会いたがっていたんよ。春ちゃんと登美ちゃんには、本当にお世話になったもんね」

三人は、千賀子が出してくれたお菓子を食べながら、夏休みの思い出を話し始めた。

「おばちゃんたちは、もう古市には戻って来んとね？」

夏子が、無神経にとんでもないことを聞く。夏子は、春雄たちが夏休みの勉強をしている時は、ほとんど昼寝か、千賀子に遊んで貰っていた。夏子が一番可愛がられたのだ。

「そうやね、お父さんと又喧嘩したら帰って来るたい。夏ちゃんに会いとうなったら、喧嘩して見ようかね？」

千賀子は楽しそうに笑う。春雄はこんな笑顔は、始めて見たような気がした。恵一も、福岡の父と一緒に暮らすほうが、ずっと嬉しいのだと気付き、なんだかほっとした気分になった。

「恵一君は、もう学校には来んとですか。お礼が言いたかとばってん」

春雄は恵一の顔がもう一度見たかった。

「引越しで忙しかけんね。・・・新学期は福岡だけん、皆には多分会えんたいね。・・・来年の夏休みにでも、ゆっくり遊びに来られたら良かばってん」

三人は、恵一にサヨナラを言ってくれるよう、母親に頼んで帰ることにした。やがて恵一は福岡に帰り、もう二度と古市小学校に戻ることはなかった。

終　章

楽しい正月が過ぎ、寒さが一段と厳しくなって三学期が始まった。

始業式の行事が終わり、帰り支度を始めた時、春雄と登美子は三角に呼ばれて職員室を訪れた。

「恵一君のことは急だったもんで、学級委員の君たちにも教えなくて、済まんかったバイ。実は恵一君から、君たちに渡してくれと預かった物んがあるとよ」

三角が取り出したものは、恵一が一生懸命作っていた、植物採集の記録帳だった。画用紙の半分を使い、一ページに一個ずつの植物が、丁寧に記録されている。何十枚も重ねて、左端を紐で止めてあるのが二冊ある。表紙には春、夏と、墨で大きく書かれている。

「恵一君は、花の咲く植物ば季節ごとに纏(まと)めていたとたい。秋のは恵一君が持って行ったバイ」

恵一も皆の顔を見ると、別れが辛くなると思ったのだろう。会える時間は、多分作れた筈だ。だけど、最高の思い出を、大事な宝物で残してくれたのだ。恵一が、植物採集帳をどんなに大事にしていたか、二人は良く知っていたのだ。

春雄と登美子は、植物採集帳を一冊ずつ持ち、黙って帰って行った。

春雄は登美子が涙ぐんでいる顔を始めてみた。いつもより、ずっと可愛く見える。学校からの帰りに、恵一が植物採集した山々を眺めると、一番高い国見山はもう雪をかぶっていた。

三月に入り、寒さが少し和らいだ頃、諏訪神社の境内で毎年恒例になっている、牛のセリ市が開かれた。一昨年の秋祭りに、ケイコ先生と春雄、登美子が出掛けた神社だ。

春雄が面倒を見てきた子牛も、このセリ市に出すことになった。

その朝は、春先にも拘らず暗い雲が空を覆い、冷たい風が吹いていた。

春雄と父親は十時を過ぎた頃、父が親牛、春雄が子牛をそれぞれ曳いて出掛けることにした。子牛だけだと初めての道を怖がり、歩かなくなるので、親牛も同道させていくのだ。諏訪神社までは、牛の足で三時間ばかり掛かる。

子牛は肌つやが良く見えるように、朝から春雄が干し藁で磨き上げてあった。

競り市は午後一時開始だが、境内が狭いので、早く着いた牛から順番に行われる予定だ。市は十数人の仲買人が競って行くのだが、売り手の希望価格に達しないときは、不成

立になるときもある。その時は所有者が引き取り、個別に仲買人と交渉するか、連れ帰ることになる。

県道を順調に下っていた親牛が、半ばほど来た所で愚図りだした。

「この前のセリ市のときは、こげん愚図ることはせんだったバイ」

父親が、何度も鞭で叩いても歩まない。子牛も不安そうにモウー、モウーと、鳴いているばかりだ。

「とうちゃん、親牛は、子牛が売られることば分かるんやろか」

「馬鹿たれ！　動物にはそげん、セリ市のことは分からんたい」

「ばってん、親牛は泣いとるバイ。悲しいか顔ばしとるもん」

春雄は、こんな様子の親牛を見るのは初めてだった。

父親は力いっぱい手綱を引き、牛を引き摺るように歩かせる。やっと諏訪神社に辿りついた時は、もう二時近くになっていた。

父は急いでセリ市の世話役に挨拶し、セリの用意をしてもらった。

春雄は親子の牛の番をしながら、昼飯代わりのおにぎりを急いで食べている。周りには、数十頭の牛が繋いである

ので、牛の鳴き声で人の話し声は聞こえない。

やがて、春雄の子牛がせりに掛かる番が来た。角型にロープを張り巡らせたセリ会場に、春雄の父が、子牛を力任せに曳いていく。

セリの声はポツリ、ポツリと、少しづつ掛かった。三分ほどの時間が、春雄にはとても長い時間に感じられた。どうせ売れるのなら、家の家計からも、高い値段が欲しい。だが、値が付かないと、また家に連れて帰れるので、しばらくは世話が出来るのだ。

春雄は期待と不安で、どきどきしながら、どちらになるかを待っていた。

セリが終わって、父が帰ってきた。少し顔をうな垂れている。周りにいる知り合いの人たちが、慰めの言葉を掛けているようだ。

やはり、希望価格に達しなかったので、引き取ってきたのだ。春雄の両親も、子牛が売れることを計算して家計を立てているので、連れ帰ることは絶対したくないのだ。それでも安売りは、周囲の目もあり簡単には出来ないのだ。

春雄の父は昼飯も食べずに、周りにたむろする仲買人と交渉して廻る。一時間ほどしてから、肩を落として帰ってきた。どうしても希望の価格で売れないのだ。

「春雄、子牛は連れ帰るぞ。暫くは、また面倒ば見て貰わんといかんな」

春雄は、心では飛び上がるほど喜んだが、父の手前黙って頷いただけだった。

帰り道の父は無言で肩を落とし、がっかりした表情である。それに引き換え、牛の親子は嬉しそうに寄り添い、とことこ早足で高橋に向かっている。早く帰らないと、又、仲買人に売られるとでも思っているのだろうか。

春雄は、子牛に引き摺られるように早足で歩きながら、ふと、この前炭焼き小屋で見た、不思議な夢のことを思い出していた。山の神の長老が、子牛を呼び寄せた時に、夢から覚めたのだ。確かに、山の神は約束を守ったのだと思い当たった。

春雄は父に隠れるように、炭焼き小屋のある山に向かい、手を合わせてお礼の真似事をした。

春が、もうそこまで来ているときに、突然悲しい知らせがあった。

春雄は、もうすぐ三学期も終わり春休みに入るので、浮かれていつもより早く学校に着いた。

教室に入るなり、異様な雰囲気が感じられた。春雄を見つけるなり、机に座っていた登美子が飛んできた。

「春ちゃん、ケイコ先生のこと聞いたとね？」

「なんね、怖い顔して何が有ったと？」

「ケイコ先生が、・・・死んだとバイ！」

「・・・・・？」

春雄には、登美子が何を言っているのか分からない。だが、冗談などではないのが、差し迫った雰囲気で分かる。

「昨日の夕方、水俣の学校から家に帰る途中で、交通事故に遭ったとバイ。ケイコ先生のバイクが、トラックに撥ねられたとたい！」

「大怪我ばしたとね？」

「ばか！　亡くなったとたい！　死んじゃったんたい！」

春雄には、ケイコ先生が死んだという事実が、どうしても理解できないのだ。先生は年寄りでもないし、病気でもなかったのだ。だんだん、頭の中が真っ白になってきた。

「どうしよう。・・・そげんことは信じられんばい！」

春雄は、自分の机にしがみ付いて泣き出した。登美子も堪えられなくなったのか、涙をぼろぼろ流している。

次々に子供たちが登校してきたが、ケイコ先生の死を知り、黙って机に座り込んでいた。

一番驚き、悲しんだのはチョウジだった。何も知らずにいつものように、最後に教室の戸を空けて入ってきたが、皆の様子で異変に気付いた。すぐそばの子に、ケイコ先生が死んだと聞かされ、教室を飛び出していった。

「三角先生は、もう来とらすとやろか？」

チョウジはいきなり職員室の戸を開けて、中に声を掛けた。田中校長や他の先生も、一斉にチョウジを見た。みん

な沈みきった顔をしている。

「チョウジ君、教室で待っといてくれんね。先生が説明に行くからね」

三角が出てきてチョウジをなだめる。

「宮内先生は、ほんなこつ死んだと？」

「うん、夕べ亡くなったとよ。本当たい・・・」

チョウジは最後まで聞かずに、校門から外に走り出して行った。

後に残された校門の周りの桜は、何事もなかったようにつぼみが膨らみ、もうすぐ来る春の宴を心待ちにしている。

授業開始のベルが鳴り、三角が淡々と昨日からの出来事を説明した。皆は押し黙って座っているだけだ。春雄は他の子供たちと同じように、どうしてもケイコ先生の死の実感が湧いてこないのだ。

三角が田中校長と、お葬式の手伝いに行くので、授業はまる一日自習となった。三角は春雄と登美子を呼んで、後のことを指示したが、二人は何も聞いていなかった。

だが、とにかくチョウジが心配なので、昌男たちと手分けして探すことにした。

春雄と登美子は、黙って泳ぎ場に向かった。チョウジが一人で居るとすれば、其処(そこ)しかないと思ったのだ。

「チョウジ君、やっぱ此処(ここ)だったんやね。皆が探しとるたい・・・」

チョウジは、泳ぎ場の天場に座り込み泣いていた。春雄は声を掛けたものの、チョウジの隣に登美子と黙って座り込んだ。

朝は曇っていた空も、今は太陽が顔を出し、少し暖かくなっていた。泳ぎ場の上流に、トンネルを作っている樹々は、新芽が薄緑や白のフワーッとした色で膨らみ、若々しい命の誕生を見せている。

「あそこのトンネルの下で、ケイコ先生は一生懸命に魚ば探しとったんやね。・・・どうしようもなかがね・・・ケイコ先生の寿命だったとバイ」

登美子は、今朝早く母親が、近所の人たちと話していた言葉を繰り返した。今は自分では何も、考えることが出来なかった。

春雄は、二人を見ているのが辛くて、川下に目を向けた。ふと、山並みに目を留め、炭焼き小屋がある付近が、ここからも良く見えることに気付いた。

春雄は突然あることに気付き、目が眩(くら)んだ。そうだ、山の神は、何でも褒美にくれるといったのだ。春雄は子牛を選んだから、売られずに、また世話ができたのだ。何で、ケイコ先生の幸せを、頼まなかったのだろうか。

春雄は止めどなく、涙が溢れ出てくるのが分かった。六畳岩の上に、ケイコ先生がぼんやり座っているような気がした。

ケイコ先生の、葬儀の準備に駆けつけた田中校長と三角は、通夜、本葬と忙しく立ち働いた。特に田中は、奥さんが縁戚ということもあり、弔問客への挨拶など大変な忙しさであった。

ケイコ先生の本葬には、古市小学校から先生たちは勿論のこと、ケイコ先生が担当した子供の代表で、春雄と登美子も行くことになった。

二人は、大勢の弔問客の中でも、最もやつれて見えた。泣き腫らした目と、諦めきった顔付きが、まるで親を亡くした子供のようで、周囲の涙を誘った。

春雄は、葬儀が終るまで、ほとんど口を利かなかった。登美子も同様に黙り込んでいる。

春雄は、どんな手順で葬儀が進んだかを、後になって思い出そうとしたが、何も覚えていなかった。ただ、きれいに化粧されたケイコ先生の、白い美しい死顔だけが、何時までも胸に焼き付いていた。

帰り道のバスの中で、春雄は、今年の正月にケイコ先生から貰った年賀状を、学生服のポケットからそっと取り出してみた。

「春ちゃん、何を見とると？」

隣に座っている登美子が、静かに声を掛けてきた。帰り始めた頃から、少し口を利くようになっていた。

「ケイコ先生から貰うた、年賀状たい。これだけが、先生の想い出たい。他には何んも、記念に残る物は持たんもん」

「うちも同じたい、年賀状だけたい。あげん、良か先生だったばってん、思い出に残るもんは、これしか貰うておらん」

登美子も、母親から借りてきたハンドバッグの中から、ケイコ先生から貰った年賀状を取り出した。大分、くしゃくしゃになっている。多分、何回も、何回も、取り出して読んだのだろう。

「夏休みに泳ぎ場で遊んだとが、昨日みたいやね」と、登美子が呟く。

春雄は六畳岩での、先生の少し日焼けした、白い美しい横顔が思い出された。

「ほんなごつやねえ。皆で見た時のホタルはきれいかったねえ。ケイコ先生もボオーとして見とったもんね」と、春雄がゆっくりと答える。

登美子は、春雄と違うことを思い出しているらしい。ホタルを見に行った時は、ケイコ先生は離れていたし、暗かったのでどんな顔で見ていたのか思い出せない。

「あげん美しかもんは、もう一生、見られんかも知れんたい」春雄は自分に語りかける。

二人は静かに目を瞑り、あの夜のホタルが舞い踊る宴を、思い出していた。本当に、もう二度と見ることが、出来ないのかも知れない。いや見ることは出来ても、ケイコ先生は、

もうそこには居ないのだ。

春雄はそっと隣の登美子の手を握ってみた。登美子も払い除けることなく、握り返してきた。

三角は葬儀が終わり、帰り支度をしている時に、校長の田中から食事に誘われた。

田中は、国道沿いの小さいウナギ屋の、小部屋に連れて行った。

「校長先生は宮内さんと親戚だけん、皆さんとご一緒されると思っていたのですが、良かとですか？」

「いや、それは家内が出るから良かとです。それより三角先生こそ、宮内とは余り面識もないのに、ご苦労様でした」

「そんなことはありませんたい。宮内先生は、今の四年生が心配で、休みの日にわざわざ私の家を訪ねて来て貰うたんです。一人一人の、性格まで教えて貰いましたから、本当に役に立ちましたバイ」

「そうですか。本当に子供思いの良い先生でした」

「もっとも、私はその好意を生かし切れませんでしたが。・・・それだけが心残りです」

「ところで先生の新しい仕事は、もう準備できましたか？」

「ええ、先輩が遣っている学習塾は、新年度の募集も順調で、かなり生徒が集まるらしかです」

三角は、家計上のことや子どもの教育のこともあり、大

分前から田中に、古市小学校での教職を辞することを申し入れていた。

今後は八台市で、小・中学生を対象にした学習塾の、講師をすることが決まっていた。田中は、最初に聞いた時は慰留したが、前の学校で三角が怪我をさせた子供の、治療費の負担も大きいことを知り了解したのだ。学習塾が順調なら、収入も大分増えるらしかった。

「うまく行くと良いですね。これからは、終戦直後と違って生活も豊かになるから、進学熱も高くなるでしょう。案外成功するかも知れませんね」

田中も、定年が間近なこともあり、次の人生を考えて都会の教育事情を調べていた。世間の親は、家計が楽になれば、子供の教育に力を入れるらしい。

「校長先生のお宅の桜ば見られずに、残念なことをしました」

「来年も咲くでしょうから、何時でもお出掛けください。もっとも、私が何時まで居るか分からんですがね」

二人は、ケイコ先生や四年生の子供たちのことを、そしてこれからの教育事情を遅くまで話していた。

ケイコ先生の葬式も終わり、幾分平常に戻った頃に、卒業式と終業式が続いた。春雄たちも、悪童学級とか、怠け学級とか言われながらも、四先生が無事に終わった。

春休みが終わり、いつものようにサクラが咲き乱れる頃には、もう五年生である。だが、新学期にはケイコ先生はもちろん、三角先生も恵一もいないのだ。

いろいろな悲しみを乗り越えて、春雄は自分たちが、確実に子供から大人に変わっていくのを感じていた。

古市小学校の周りは、又、今年も新学期とともに、サクラの花が咲き誇り、元気な子供たちを花吹雪で迎えてくれる。悲しみを洗い流してくれるような、見事な桜花が、毎年毎年、何も変わらないかのように咲き続けている。

了

悪童達と先生

2003年 8月 8日　紙版発行
2011年12月10日　デジタル版発行

著　者 —— 溝上雄文
発行者 —— 桐生敏明

紙版発行 —— 株式会社かんぽうサービス
デジタル —— 編集工房 DEP

©2003 Printed in Japan
ISBN4-900277-29-X

乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

小倉